

# 信 川 遺 跡

2022

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター



山口県埋蔵文化財センター調査報告 第111集

のぶ      かわ  
信      川      遺      跡

2022

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター



## 序

本書は、柳井市新庄に所在する信川遺跡で実施した発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、新庄南地区の農地整備事業に先立ち、山口県柳井農林水産事務所及び柳井市教育委員会から令和2年度に発掘調査業務の委託を受けて、公益財団法人山口県ひとつくり財団が実施しました。

調査では、中世を主体とする集落跡から、大型の掘立柱建物をはじめ多数の建物や土坑などが検出され、多量の中世の土器・陶磁器のほか、弥生～古墳時代の土器・石器なども出土しました。

とりわけ、中世の掘立柱建物の柱穴から出土した中国製の青磁・白磁や土師器などは、地域の当時の暮らしや文化を知る上で、貴重な資料となるものです。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただきたいと思います。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が一進一退を繰り返す中、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、多くの御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 山口県ひとつくり財団  
理 事 長 浅 原 司

## 例 言

- 1 本書は令和2（2020）年度に実施した信川遺跡（柳井市新庄地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査および調査のとりまとめは公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県柳井農林水産事務所（契約名：農業競争力強化農地整備事業 新庄南地区 埋蔵文化財発掘調査業務1号および2号）と柳井市教育委員会（契約名：農業競争力農地整備事業 新庄南地区の埋蔵文化財発掘調査およびとりまとめ業務）からの委託を受けて実施した。

- 3 調査組織は以下のとおりである。

令和2年度

調査およびとりまとめ主体 公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター

調査担当	調査第一課 文化財専門員	井上 広之
	調査第一課 文化財専門員	磯村 義信
	調査員	塚本 史晃

令和3年度

とりまとめ担当	調査第一課 文化財専門員	井上 広之
	調査員	山田 圭子

- 4 本書の第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「柳井」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調標記は農林水産省農林水産技術会議事務所（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は挿図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。  
S I：竪穴建物 S B：掘立柱建物 S K：土坑 S C：祭祀遺構 S D：溝  
S A：柱穴列 S P：柱穴
- 9 本書の作成に当たり、石材の鑑定については山口県立山口博物館学芸課主任 赤崎英里氏のご指示をいただいた。
- 10 出土炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定については業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 11 本書の作成は井上・磯村・山田が分担し、井上が編集した。なお、執筆分担は次のとおりである。  
I：井上 II：磯村 III-1・2：井上 3：山田、井上 IV：業者委託（井上） V：井上

# 本文目次

<b>I 調査に至る経緯と調査の概要</b>	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と概要	1
<b>II 遺跡の位置と環境</b>	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	4
<b>III 調査の成果</b>	
1 遺跡の概要	7
2 主な遺構	7
3 主な遺物	22
<b>IV 自然科学分析</b>	
1 信川遺跡出土炭化材・生材の放射性炭素年代測定、樹種同定	50
<b>V 総括</b>	
1 弥生時代・古墳時代の様相	65
2 古代～近世の様相	66
3 まとめ	68

## 挿 図 目 次

<p>第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・・・・・ 3</p> <p>第2図 余田・新庄の地割図・・・・・・・・・・ 4</p> <p>第3図 調査範囲図・・・・・・・・・・ 7</p> <p>第4図 遺構配置図・・・・・・・・・・ 8</p> <p>第5図 北壁土層断面図・・・・・・・・・・ 9</p> <p>第6図 東壁土層断面図・・・・・・・・・・ 9</p> <p>第7図 西壁・中央トレンチ土層断面図・・ 10</p> <p>第8図 SK01 土器出土状況実測図          ・土層断面図・・・・・・・・・・ 11</p> <p>第9図 SIO2 実測図・土層断面図・・・・・・・・ 12</p> <p>第10図 SB01・構成柱穴実測図・・・・・・・・ 13</p> <p>第11図 SB05 実測図・・・・・・・・・・ 14</p> <p>第12図 SB05 構成柱穴          土器等出土状況実測図・・・・・・・・ 15</p> <p>第13図 SB02・06 実測図・・・・・・・・・・ 16</p> <p>第14図 SB07・構成柱穴実測図・・・・・・・・ 17</p> <p>第15図 SB03 実測図          ・構成柱穴支柱材出土状況実測図・・ 18</p> <p>第16図 SB04・08・09・10 実測図・・ 19</p> <p>第17図 SA01・02・03 実測図・・・・・・・・ 20</p> <p>第18図 SK05 実測図・・・・・・・・・・ 20</p> <p>第19図 SC01 実測図・・・・・・・・・・ 20</p> <p>第20図 SD01・02・03・04・05 実測図・・ 21</p> <p>第21図 SK01 出土遺物実測図①・・・・・・・・ 23</p> <p>第22図 SK01 出土遺物実測図②・・・・・・・・ 24</p>	<p>第23図 SK01 出土遺物実測図③・・・・・・・・ 25</p> <p>第24図 SIO2、SK001 出土遺物実測図・・ 26</p> <p>第25図 SB01 出土遺物実測図①・・・・・・・・ 28</p> <p>第26図 SB01 出土遺物実測図②・・・・・・・・ 29</p> <p>第27図 SB05 出土遺物実測図・・・・・・・・ 30</p> <p>第28図 SB02・06・07 出土遺物実測図・・ 31</p> <p>第29図 SB03・04・08・09          出土遺物実測図・・・・・・・・ 32</p> <p>第30図 SK19・05・07、SC01、SD01          ・03・04・05 出土遺物実測図・・ 33</p> <p>第31図 柱穴出土遺物実測図①・・・・・・・・ 35</p> <p>第32図 柱穴出土遺物実測図②・・・・・・・・ 36</p> <p>第33図 遺物包含層出土遺物実測図①・・ 37</p> <p>第34図 遺物包含層出土遺物実測図②・・ 38</p> <p>第35図 遺構外遺物実測図・・・・・・・・・・ 39</p> <p>第36図 暦年較正結果-1・・・・・・・・・・ 55</p> <p>第37図 暦年較正結果-2・・・・・・・・・・ 56</p> <p>第38図 出土木材（1）・・・・・・・・・・ 62</p> <p>第39図 出土木材（2）・・・・・・・・・・ 63</p> <p>第40図 出土木材（3）・・・・・・・・・・ 64</p> <p>第41図 ベッド状遺構をもつ竪穴建物の          型式分類・・・・・・・・・・ 65</p> <p>第42図 SIO2 平面図および出土高杯実測図 65</p> <p>第43図 遺構図（時代別）・・・・・・・・・・ 67</p>
--	--



## 写 真 目 次

写真1	重機による表土除去	1
写真2	国土座標設置風景	1
写真3	遺構掘り込み作業風景	2
写真4	出土遺物の整理	2

## 表 目 次

第1表	掘立柱建物一覧表	15
第2表	出土土器・陶磁器観察一覧表	40
第3表	出土石器類観察一覧表	49
第4表	鉄製品および鍛冶関連遺物観察一覧表	49
第5表	測定試料および処理	51
第6表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	52
第7表	樹種同定結果一覧	61
第8表	ベッド状遺構をもつ竪穴建物の地域別・時代別・形式別分布	66

## 図 版 目 次

図版1	調査区 遠景 (東から)
図版2	調査区 遠景 (北から)
	調査区 遠景 (南から)
	調査区 近景 (北から)
図版3	調査区 近景 (東から)
	調査区 全景 (南上空から)
	SB01・06 (南上空から)
図版4	東壁 土層断面 (西から)
	北壁 土層断面 (南から)
	西壁 土層断面 (東から)
	SK01 弥生土器等出土状況 (北から)
	SK01 完掘状況 (北から)
図版5	SI01 完掘状況 (東から)
	SI02 検出状況 (北から)
	SI02 土層断面 中央～西 (北から)
	SI02 完掘状況 (北から)

- 図版 6 SB01 完掘状況（西から）  
SB01 構成柱穴 SP003 土師器碗等出土状況（北から）  
SB01 構成柱穴 SP005 土師器杯出土状況（北から）  
SB01 構成柱穴 SP019 土師器杯出土状況（北から）  
SB01 構成柱穴 SP023 土師器皿出土状況（南から）
- 図版 7 SB05 完掘状況（西から）  
SB05 構成柱穴 SP114 土師器杯出土状況（南から）  
SB05 構成柱穴 SP187 土師器皿等出土状況（西から）  
SB05 構成柱穴 SP188 土師器皿出土状況（北から）  
SB05 構成柱穴 SP243 柱根検出状況（南から）
- 図版 8 SB07 構成柱穴 SP163 白磁四耳壺等出土状況（西から）  
SB03 構成柱穴 SP066 支柱材出土状況（西から）  
SK05 土層断面（北から）  
SC01 土師器皿・杯出土状況（南から）  
SD01 セクション①土層断面（北から）  
SD03 セクション③土層断面（西から）

- 図版 9 出土遺物（1）  
図版 10 出土遺物（2）  
図版 11 出土遺物（3）  
図版 12 出土遺物（4）  
図版 13 出土遺物（5）  
図版 14 出土遺物（6）  
図版 15 出土遺物（7）  
図版 16 出土遺物（8）  
図版 17 出土遺物（9）  
図版 18 出土遺物（10）  
図版 19 出土遺物（11）  
図版 20 出土遺物（12）  
図版 21 出土遺物（13）  
図版 22 出土遺物（14）

## I 調査に至る経緯と調査の概要

### 1 調査に至る経緯

信川遺跡は山口県柳井市新庄に所在する。赤子山を主峰とし柳井港西端から東西に延びる低丘陵の北東裾部、周防灘に突出する室津半島の根元付近に位置する。

山口県柳井農林水産事務所により農業競争力強化農地整備事業（新庄南地区）としてほ場整備工事が計画され、それに伴い柳井市教育委員会が平成 29 年度に試掘調査を実施している。その結果、耕作土・盤上下の堆積層平坦面で土坑や柱穴等の遺構が確認され、弥生土器や土師器等の土器も検出されたため、工事に先立ち当該地区を対象とする発掘調査が実施されることとなった。

令和 2 年度に山口県柳井農林水産事務所および柳井市教育委員会の委託を受けた山口県埋蔵文化財センターが、850mの範囲について記録保存のための発掘調査を実施した。

古墳時代以前は標高約 10m 以下が海水面下であったと考えられ、その範囲内（以下古柳井水道と称す）では遺跡は確認されていないが、古柳井水道北岸域から西岸域にかけては明地遺跡や開明遺跡をはじめとする弥生時代中期から後期の遺跡や国森古墳や納蔵原古墳群等多くの古墳が点在している。

信川遺跡を含む周辺地域は古柳井水道南岸域に当たる。遺構の広がりや、隣接する梶ノ森古墳（円墳未調査）や農業用のため池、旧河川の河道等による影響、また遺跡の性格は防予諸島内外の交易・交流の影響を受けていると考え、これらを視野に入れての発掘調査となった。

### 2 調査の経過と概要

調査期間は令和 2 年度の後半で、初秋から現場準備をはじめた。委託契約事務や資料収集等を進めると共に、地元関係者への実施挨拶、発掘作業員説明会等を行った。11月6日から駐車場等用地の整地、仮設事務所の設営、重機による調査地の草刈り・表土除去作業等を行った。

11月17日に発掘作業員の稼働を開始して、発掘器材の搬入を行い、翌日の 11月18日から現場の環境整備に着手した。

11月19日から遺構検出作業を開始したが、作業の進捗にともない、遺構数が当初の想定を大幅に超えることが判明したため、調査期間を延長することとなった。遺構は大小多数の柱穴、土坑、溝に加え、竪穴建物の一部など、調査範囲全体に遺構が密に存在していることを確認した。その数は予想をはるかに上回るもので、特に



写真1 重機による表土除去



写真2 国土座標杭設置風景

柱穴検出数は100mあたり175～180個で高密度となった。

11月26日から壁下トレンチ等の掘削、12月2日から遺構の掘り込みを行った。谷筋の砂質土堆積層上での建築のためか、柱穴は総じて深く掘られており、深さ30cmを超えるものが半数以上を占めた。それぞれの遺構に伴う遺物は量・種類とも豊富で、弥生時代から室町時代に至る各時代で、貿易品や近海域流通品と考えることができる遺物を多数確認した。これらの出土遺物は、随時センターに持ち帰り、洗浄・接合・復元作業を行った。

12月2日に業務委託により国土座標杭設置を実施し、12月4日から12月10日まで調査員による遺構配置略測図の作成を行った。

2月19日に空中写真撮影と空中写真測量（図化を除く）を実施した後、補足的に遺構の掘り込みを行い調査員で個別遺構の追加測量をした。

仮設事務所契約延長により、仮設水道・電気配線撤去をいずれも2月4日から2月24日に、仮設事務所等の借上期限を2月5日から2月25日に延長した。

2月22日に器材搬出し、2月24日に杭抜き等の補足作業を行い、発掘作業員の稼働を終了した。2月25日には仮設事務所・トイレの借上げを終了した。また、2月26日に駐車場等用地の現況復旧作業を完了した。記録関係については、随時、担当職員による各遺構の実測図作成のほか、写真撮影等を実施し、3月3日にすべての現地作業を終了した。

令和3年度に入り、年度未発行予定の報告書作成に向け、とりまとめ作業に取り掛かった。

まず、遺構の個別図面や現場写真等の記録類の整理確認後に、遺構の個別図面のデジタルトレースを行った。平行して、出土遺物から報告書掲載予定の遺物の選出作業を行い、遺物実測・デジタルトレースを進めていった。また、炭化遺物等の自然科学分析の委託や空中写真測量データの図化（遺構の平面図）の業務委託を行った。7月下旬に報告書に掲載する出土遺物の写真撮影をした後、写真整理や掲載予定遺物の整理作業を行った。

10月に入り報告書の仕様を検討し、ページ割付し、各ページのレイアウトを進め、12月から本文原稿執筆を始めた。

2月1日に印刷業者と契約し、データ入稿を行った。その後2回原稿校正を行い、3月18日報告書を刊行した。



写真3 遺構掘り込み作業風景



写真4 出土遺物の整理

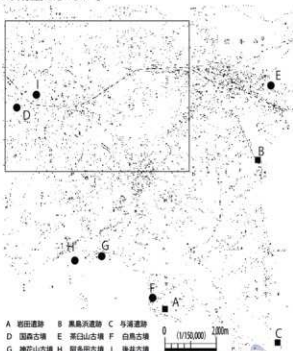
## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

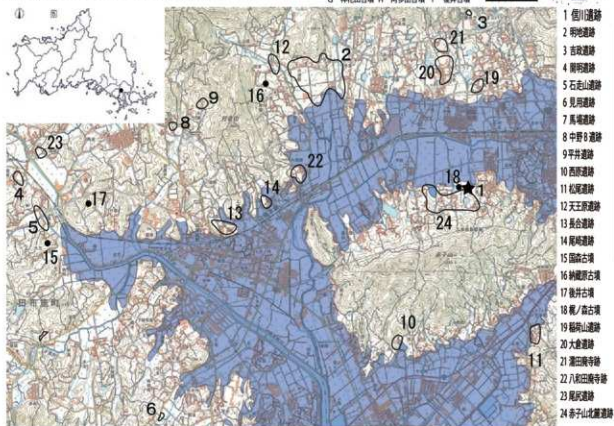
信川遺跡は、山口県柳井市新庄南に所在する。調査区の100m西側は余田地区となり、横穴式石室の梶ノ森古墳や、その南西側に造成され溜池として利用される梶ノ池に隣接する。

柳井市は山口県の南東部に位置し、瀬戸内海に面する熊毛半島の東半部を市域としている。市域の北側は岩国市周東町、西側は光市、田布施町、平生町、南側は上関町、東側は岩国市由宇町、周防大島町とそれぞれ隣接している。気候は温暖で、年間を通して雨量は少ない。

新庄地区は市域の中央部、熊毛半島の基部にある赤子山（標高230m）とその北側の大平山（標高316m）との間に東西に広がる柳井低地にあり、本遺跡は赤子山から北方向に延びる舌状丘陵の標高12～13mに位置する。柳井低地は柳井川と土穂石川に沿う湿地帯で、平生一大波野—余田—新庄間の広い低地帯が特徴的である。洪積世の最大海進（縄文海進）期には海峽化（古柳井水道）していたと考えられ、その後の古代海進期（9-10世紀）にもなお海峽であった可能性が高い。洪積台地は広く、谷底平野も発達しているが、河川の流域が極めて狭く乏水性の地域であるため、小溜池が多く、長溝水路の開発などによって、水田化が図られてきた。



A 余田遺跡 B 梶ノ森古墳 C 与瀬遺跡  
D 国崎古墳 E 赤白山古墳 F 白鳥古墳  
G 神山古墳 H 阿多古墳 I 後井古墳

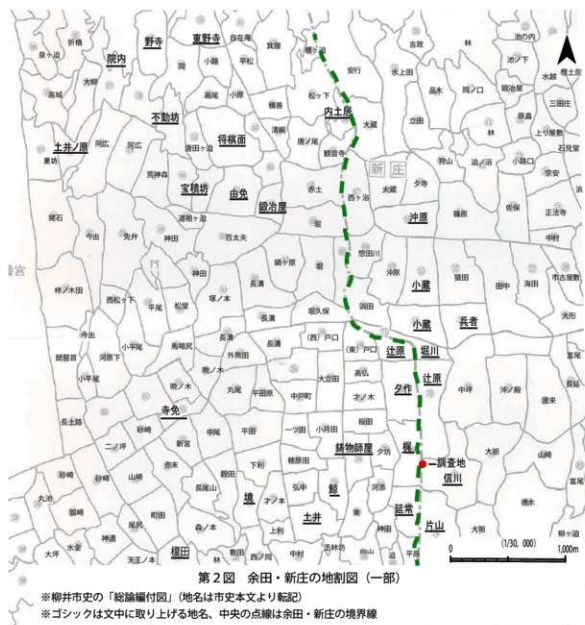


第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（色掛け部は標高10m未満の範囲）

## 2 歴史的環境

縄文時代の遺跡は、平生町の岩田遺跡、伊保庄の黒島浜遺跡、阿月の与浦遺跡等があり、熊毛半島沿岸に分布する。これらの遺跡からは、多くの石錘が出土し、漁労を営んでいたことが分かる。

弥生時代になると、田布施町の明地遺跡・尾崎遺跡・長合遺跡、平生町の西原遺跡・松尾遺跡等が、標高10～13mの間に海岸線を想定される古柳井水道の海面に近い低地に集落形成をしていたと考えられる。他に当時の海岸から距離を置くが、田布施町の見用遺跡・馬場遺跡・開明遺跡等で集落が営まれていると同時に、高地性集落の性格も窺える田布施町の中屋B遺跡・平井遺跡、柳井市の吉政遺跡がある。また、田布施町の石走山遺跡で、前期・中期には集落内にあった墓が後期には地区が



見下ろせる集落外の高所に築かれることは、その地の有力者の出現を示している。

4世紀前半(古墳時代前期)からは、さらに広い範囲を統合した首長が現れる。田布施町の国森古墳は県内でも最古級の方墳であり、茶白山古墳→白鳥古墳→神花山古墳→阿多田古墳と続く熊毛地方一帯に分布する大型で単独の畿内型前方後円墳に先立つものである。ヤマト政権の権威の象徴であり地方の首長(豪族)の社会的浪費をもたらした巨大古墳の造営も、6世紀(古墳時代後期)になると消長していく。この頃に築造された納蔵原古墳や後井古墳は共に首長墓と考えられるが、前方後円墳でありながら小型であり、周囲に同時代の古墳を造営する群集性が見られる。やがて、各地では円墳が中心となり、所によれば古墳群が築かれるようになる。本遺跡が隣接する梶ノ森古墳も、当地を治めた有力者の墓である可能性が高い。

やがて奈良時代に入り、公地公民のもと余田は朝廷領とされ、周防国衛が管理する「保」と称する地域は保司が任命した公文が直接管理した。一方、定められた班田収授制で分与する口分田の不足をきっかけに、三世一身の法や墾田永年私財法により開墾が進められることとなり、結果として開墾田を私有地化して荘園領主となった地方豪族や有力者が台頭してくる。奈良時代末期に建立されたとする柳井市新庄の潘田廃寺や田布施町で発見された八和田廃寺は、一帯を支配していた豪族達の氏寺と考えられる。

平安時代になると、立荘の時期は明らかでないが、まず楊井荘(楊井本庄)が開発され、やがて満ち潮が入り込む干潟の自然堆積が進み稲の耕作範囲が広がった新庄が開発され(共に京都蓮華王院領として妙法院の所管)ている。一方、余田保では平安時代末期に朝廷が租米徴収の権利を東大寺に寄進したため、国衛領でありながら東大寺の荘園となっていく。

武士による楊井の支配が始まった鎌倉時代、源頼朝は全国に守護・地頭を配置し、領地でもない国衛領・荘園にも地頭が置かれた。余田保においては平安末、鎌倉初期には既に公文職として、源湛与が保内の治安と租米を朝廷に送る仕事に当たっていたが、1204(建仁4)年、地頭職として藤原朝俊(地名をとって与田氏と名乗るようになる)もまた警察権をもち租米徴収の仕事を開始するために公文と地頭の争いが起きることとなった。

この地の地頭には地頭職としての公務執行費用に充てるための土地(用作)の所有が認められていたが、第2図を見ると与田・新庄の境界線に沿って、「用作」の畝りと捉えることのできる「夕作(ようじゃく)」の地名がある。他にも、「夕作」の南西方向には中世武士の居住地を表す土居の意味を表す「土井」の地名や、公務執行(公事)のために所有していた公事領(くじりょう)と結び付けることのできる「鯨(くじら)」の地名があることから、余田保の東南部に地頭の館があったと考えることができる。他に武器や農具・仏具などの金属製品の生産とつながる「鑄物師屋(いもじや)」や「梶(かじ→鍛冶)」の地名や、境界を表す木である榎(えのき)を用いた「榎田(えのきだ)」や「境(さかい)」の地名もまた、地頭の勢力範囲を示すものではなかろうか。

一方、それ以外、即ち余田保の北部及び西南部は公文の力が及んでいた所と言えよう。居住地を示す土居を含む「内土居(うちどい)」や「土井ノ原(どいのはら)」、公文給田を表す「将棋面(しょうぎめん)」や、金属製品生産に係る「鍛冶屋(かじや)」等の地名が見られることから公文の勢力範囲を想像するに難くないが、同時に地名にも残る「野寺(のでら)」の存在も大きい。野寺の盛時

には上野寺12坊、下野寺6坊を構えており、今も「東野寺（ひがしのでら）」をはじめ、野寺の燈油用料田を示す「由免（ゆめん）」、野寺の用料田である「寺免（じめん）」、僧の住居を示す坊を含む「不動坊（ふどうぼう）」「宝積坊（ほうしゃくぼう）」、寺院境内を示す「院内（いんない）」等、余田保北部に野寺と係る地名が多く見られる。

今回の調査地は、現在の余田・新庄の境界線近くにあり、行政上は新庄に属する。しかし中世より余田保と楊井庄の境については争論が起きている。そもそも余田には古代より条里制が敷かれており、中世期に存在していた8つの里の一つである「延常（のぶつね）」が調査地の近くにある。この条里制から調査地近辺を見渡すと、「信川」より北へ「辻原（つじはら）」、「堀川（ほりかわ）」、「小蔵（こくら）」、「沖原（おきはら）」、南へ「片山（かたやま）」と目を移していくと、それぞれの東側境界線が南北にほぼ揃っているのに反して、「信川」のみ境界線が東側に離れている。「梶」と調査地のある「信川」の西側は同じ条里に属しており、新しく余田・新庄の境が設定される際に、分断されたとは言えないだろうか。与田の地頭の横暴が新庄に及ぼぬように兵を配置したとも考えられる「兵者（つわもの）」、余田あるいは新庄からの道が交差する地点としての「辻原」、その「辻原」が余田にも新庄にも存在することも気になる。調査においては、多数の大型の掘立柱建物と共に古代から中世にかけての陶器・磁器・土師器等が多く発掘されており、余田保の地頭与田氏との関わりや新庄・楊井庄との当時の接点が見えてくることが期待される。

1347（貞和3）年に地頭与田武者六郎入道が追放され、周防守護大内長弘の家臣曾我左衛門尉師助に与田保地頭職が預けられることとなり、140年余り続いた与田氏の支配が終わりを迎える。

#### 引用・参考文献

- 山口県 1976『都道府県土地分類基本調査 山口』
- 平凡社 1980『日本歴史地名大系第36巻 山口県の地名』
- 角川書店 1988『角川日本地名辞典35 山口県』
- 柳井市 1984『柳井市史（通史編）』
- 柳井市 1988『柳井市史（総論編）』
- 柳井市史編纂委員会 1958『柳井市新庄地区史』
- 山口県文化財愛護協会 1991『瀧田廃寺Ⅰ』
- 山口県教育委員会 1992『瀧田廃寺Ⅱ』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1993『明地遺跡』
- 山口県教育財団・山口県教育委員会 1994『明地遺跡Ⅱ』
- 田布施町教育委員会 1996『納蔵原古墳』
- 山口県教育財団 1996『吉政遺跡』その他



### Ⅲ 調査の成果

#### 1 遺跡の概要

谷筋に堆積した微高地(12.00m～12.50m)上に展開する信川遺跡では、調査区全面において、弥生時代中期～古墳時代初頭、平安時代末～鎌倉・室町時代の多くの遺構・遺物を確認した。

各壁面による土層観察を行った結果、基本層序は耕作土(現代)下に盤土、客土(整地土含む)、堆積土(遺物包含層含む)と判明した(第5・6図)。数cmから約30cmの粘質土の堆積は何層にも重なり合っており、その更に下位には黄褐色・黄橙色の砂質層が広がっている。遺構は堆積土上に密に分布する。

#### 2 主な遺構

遺構の時期は、弥生時代中期～古墳時代初頭と平安時代末～鎌倉時代初頭が中心である。

弥生時代中期の土坑、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴建物2棟(円形1棟、隅丸方形1棟)と、平安時代末から鎌倉時代初頭および室町時代の掘立柱建物10棟をはじめ、土坑、溝、柱穴等を複数検出した。柱穴は、各時期を通じて約1,500個を数える。

弥生時代では、中期の土器が多数出土した。また、古墳時代初頭の土師器が出土している。

中世の遺物は、土師器の碗・杯・皿が多数出土したほか、瓦器、瓦質土器、輸入磁器等が出土した。

平安時代末～鎌倉初頭の掘立柱建物には、三面粉付柱間5間×3間(11.3m×6.9m)30本の総柱建物や4間以上×4間(約8.8m×約7.4m)25本の総柱建物もあり、総じて大型である。また、柱穴や土坑出土の遺物から当時の儀礼の様子が伺えるものもあった。

#### SK01(第8図 図版4)

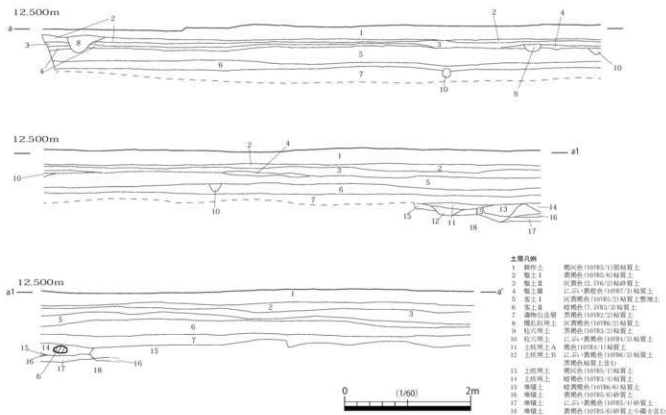
西端部分は調査区外に延びており未調査だが、平面形は隅丸長方形で、断面形は皿状を呈す。短軸160cm、長軸(調査部分)224cm、検出面からの深さは16cmを測る。弥生土器の壺・甕・鉢・高杯等(第



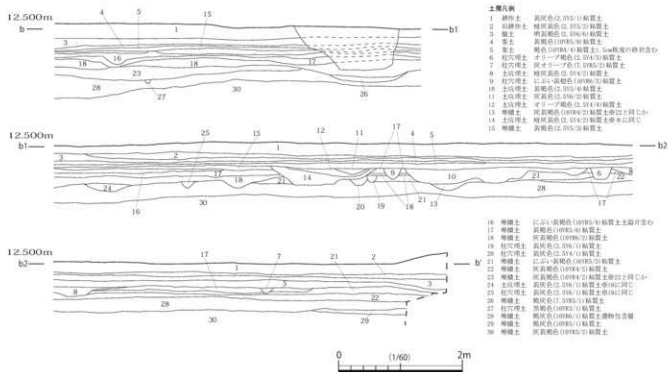
第3図 調査範囲図



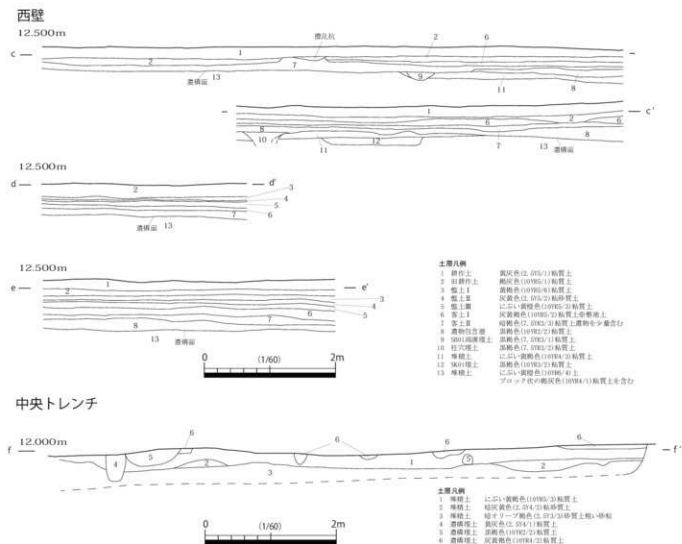
第4図 遺構配置図



第5図 北壁土層断面図



第6図 東壁土層断面図



第7図 西壁・中央トレンチ土層断面図

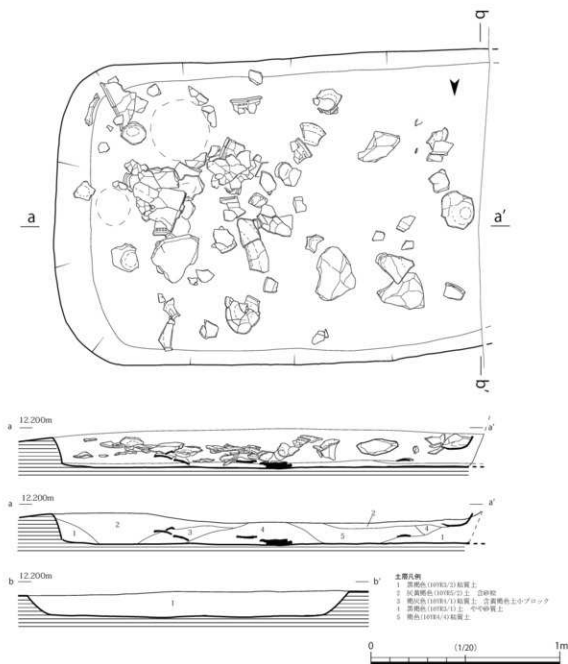
1～23図)が多量に出土した。出土土器の形状や出土状況等から弥生時代中期の廃棄土坑と考える。

#### SI02(第9図 図版5)

調査区の南西部に位置する。平面形は隅丸方形で、貼床が施され三辺(以上)にベッド状の高まりを有す(以降「ベッド状遺構」と記す)。南半分は調査区外埋存のため未調査だが、規模は東西方向、南北方向(推定)各軸ともに約4.8mを測る。検出面からの深さは35cm～40cmである。主柱穴は調査区内で2個確認した(全体で4個と考える)。中央部に屋内土坑を有す。床面直上に中央土坑から掻き出したと考えられる炭化材を検出した。炭化材の樹種はクリで、放射性炭素年代測定(AMS)では3世紀前半～4世紀前半の暦年代(弥生時代後期～古墳時代前期)を示した。貼床面直上で検出した高杯の杯部(第24図の38)の形状や建物の構造から、古墳時代初頭の造営と判断する。

#### SB01(第10図 図版3・6)

調査区の西部に位置する総柱建物で、桁行4間以上(8.8m以上)×梁行4間(7.4m)、床面積65.12㎡以上を測る大型建物である。棟方向はN88°Eである。(以下、掘立柱建物規模の詳細は「第1表 掘立柱建物一覧表」を参考にされたい。)個々の構成柱穴は径約50cm～60cm、深さ約40cm

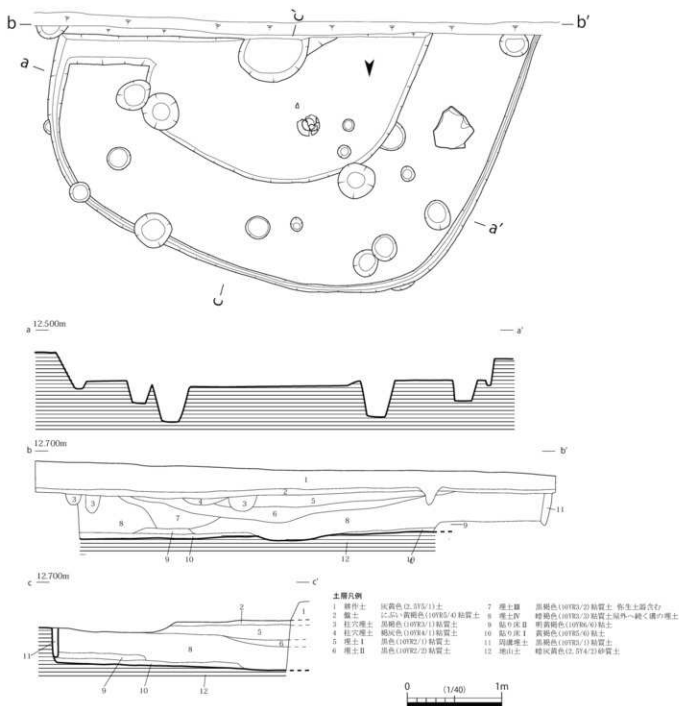


第8図 SK01 土器出土状況実測図・土層断面図

～70cm。数か所で柱痕あるいは柱根(生材)を確認している。全ての構成柱穴から土師器皿・杯・碗や瓦器碗が複数点出土したほか、土師質土器鍋や青磁皿等(第25・26図)が出土している。構成柱穴出土炭化材・生材の放射性炭素年代測定(AMS)では11世紀中頃～13世紀初頭の暦年代(平安時代中期～鎌倉時代初頭)を示した。出土遺物の時期と概ね一致し、平安時代末～鎌倉時代初頭の建物と考える。

SB01の構成柱穴 SP003・005・019・023(第10図 図版6)

SP003の平面形は楕円形を呈し、規模は長径が60cm、短径が54cmであり、検出面から底面までの深さは44cmを測る。黒褐色の埋土で炭化木材と共に土師器皿(52～65)・碗(66～68)・杯(69～73)、瓦器碗(74～79)、白磁皿(80)、土師質土器鍋(81)等の多量の土器(第25図)が出土した。

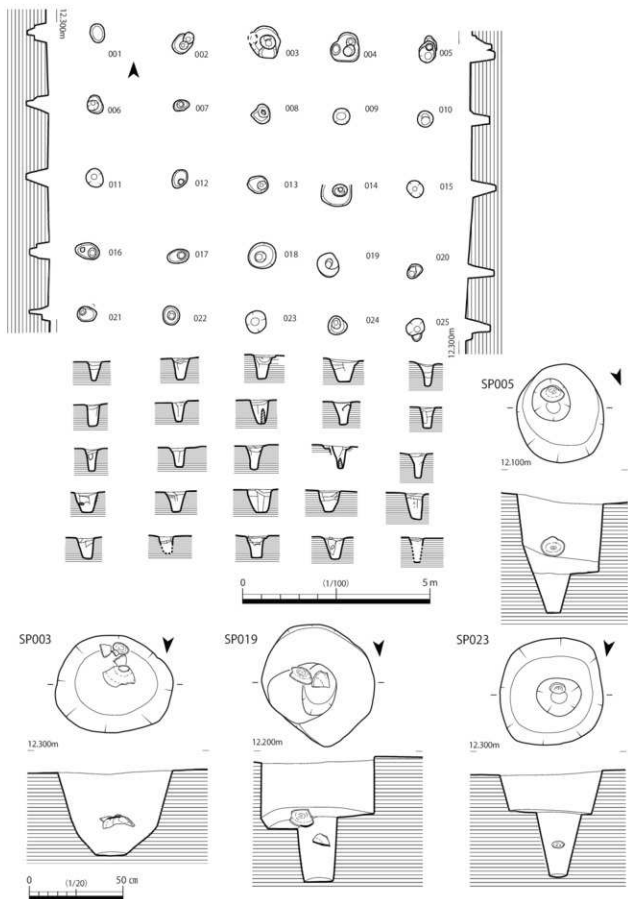


第9図 SI02 実測図・土層断面図

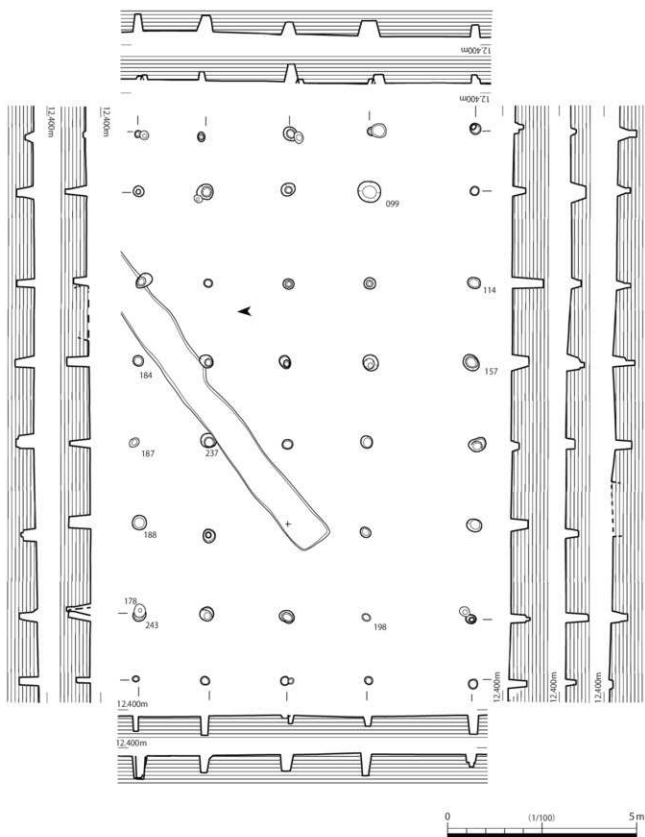
SP005・019・023 もほぼ同規模で、複数の遺物（第25図88～92、26図115～127）が出土した。柱痕部のあるSP019・SP023は検出面からそれぞれ64cmと54cmの深さを測る。

#### SB05（第11図 図版7）

調査区南西部に位置する桁行5間×梁行3間以上の総柱大型建物で、北東西三面に廂を有す。SB01 とほぼ同じ棟方向で同時期の築造と考えるが、軒先の接触が懸念されるため同時に建てていたとは考えにくい。構成柱穴出土炭化材・生材の放射性炭素年代測定（AMS）の結果は11世紀前半～13世紀前半の暦年代（平安時代中期～鎌倉時代前期）を示している。構成柱穴からの出土遺物（第27図のうち153を除く）もほぼ同時期と判断する。SB01の構成柱穴との切り合いもないため、先

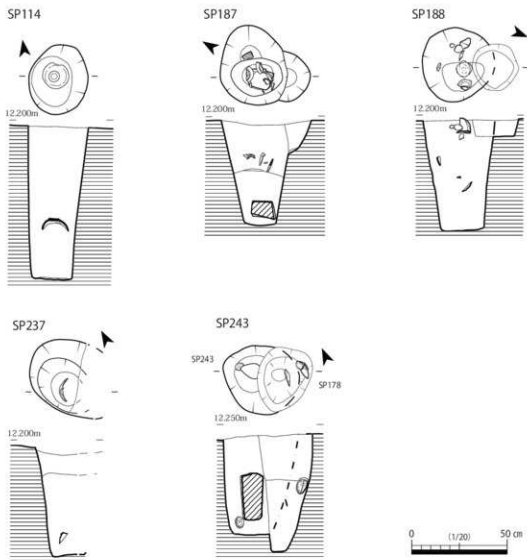


第 10 图 SB01・構成柱穴実測図



第 11 图 SB05 实测图



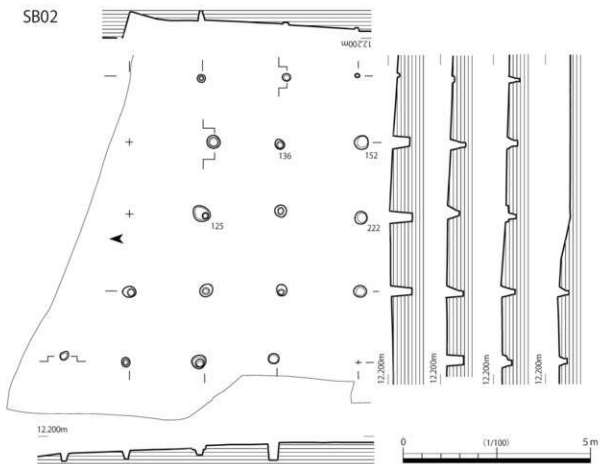


第 12 図 SB05 構成柱穴土器等出土状況実測図

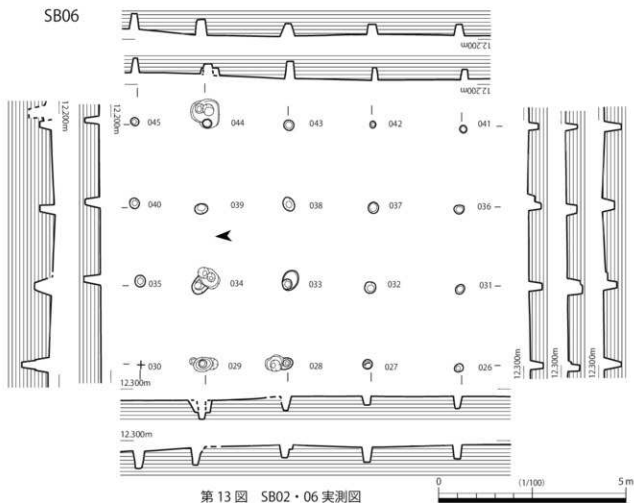
第 1 表 掘立柱建物一覧表

遺構番号	規模(間)	棟方向	柱間		面積(m <sup>2</sup> )	出土遺物	備考
			桁行 建物南東隅から (m)	梁行 建物南東隅から (m)			
SB01	4以上×4	N88° E	8.8(2.3・2.2・2.2・2.1)	7.4(1.7・2.0・1.9・1.8)	65.12 以上	土師器 瓦 青磁 灰化材	平安時代末～鎌倉時代初期
SB02	4以上×4以上	N2° E	7.8	7.6	—	土師器	平安時代末～鎌倉時代中
SB03	5×2	N87° W	9.3(1.9・1.8・1.8・1.9・1.9)	6.0(3.0・3.0)	55.8	土師器 土師瓦土面 兼盛系瓦器部 灰化材	室町時代
SB04	2×2	N1° W	3.7(1.8・1.9)	3.1(1.6・1.5)	11.47	青磁 土師瓦土面 瓦質土面	室町時代
SB05	5×3以上	N88° W	11.3(2.4・2.1・2.3・2.1・2.4) 側溝 14.7(東 1.7・西 1.7)	6.9(2.8・2.0・2.1) 側溝 8.8(北面 1.9)	77.97 以上	土師器 瓦 灰化材	平安時代末～鎌倉時代初期 三層構
SB06	4×3以上	N6° W	8.5(2.3・2.2・2.2・1.9)	6.3(2.1・2.1・2.1)	53.55 以上	土師器 瓦 灰化材	平安時代末～鎌倉時代初期
SB07	4×3	N87° W	6.7(2.1・2.1・2.5)	6.4(2.1・2.2・2.1) 側溝 7.9(北面 1.5)	42.88	土師器 青磁 白磁 灰化材	平安時代末～鎌倉時代初期
SB08	3×3	N2° W	6.4(2.0・2.1・2.3)	5.0(1.4・1.7・1.9)	32.0	土師器 土師(用材)	室町時代中
SB09	3×1	N4° W	6.2(2.1・2.1・2.0)	2.5	15.5	土師器	室町時代中
SB10	2×1	N 1° E	4.7(2.1・2.6)	2.8	13.16	土師器	室町時代中

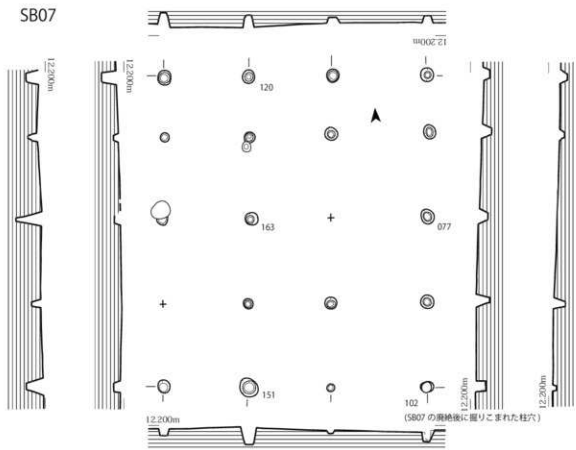
SB02



SB06



第13図 SB02・06実測図



後関係は不明である。

SB05の構成柱穴 SP114・187・188・237・243 (第12図 図版7)

平面形はほぼ円形で、径平均40cm。検出面からの深さはSP114が80cm、ほかは52cm～58cmを測る。SP114・187・188・237では複数の遺物(第27図)が出土した。SP243で柱根を確認している。

SB02 (第13図)

SB01の北方に位置する。北および東方向に棟が延びる可能性があるが、規模は不明である。平安時代末～鎌倉時代と考える。

SB06 (第13図 図版3)

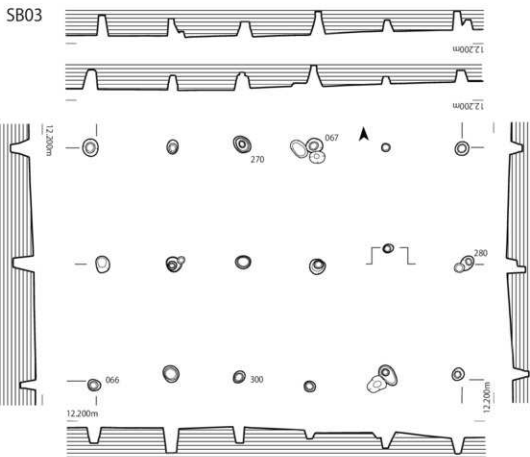
先述の大型建物SB01と棟方向を同じくし、棟の大半が重なり合う。SB01とほぼ同時期の出土遺物(第28図170～176)が確認されており、出土炭化木材・柱根(生材)の自然科学分析も同時期頃という結果を得ている。複数の構成柱穴の切り合いによる先後関係により、SB01よりやや古い時期の建造物と判断する。

SB07 (第14図)

調査区中央部に位置する総柱建物。北部に廂を有す。構成柱穴 SP077・163出土の炭化材の放射性炭素年代測定(AMS)の結果はそれぞれ10世紀末～12世紀中頃、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは平安時代中期～後期にあたる。出土遺物と併せて平安時代末～鎌倉時代初頭の築造と判断する。



第14図 SB07・構成柱穴実測図



SB07の構成柱穴 SP163 (第14図 図版8)

柱痕部から土師器杯、青磁碗、白磁四耳(又は双耳)甕がまとめて出土した。建物廃絶時の儀礼と考える。

SB03 (第15図)

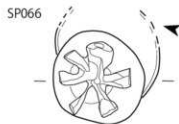
調査区北東部に位置する。平安時代末～鎌倉時代初頭に築造された建物群と棟方向をほぼ同じとする。構成柱穴 SP066 出土の支柱材(生材)および SP270 出土の炭化材の放射性炭素年代測定(AMS)の結果はそれぞれ15世紀初頭～15世紀前半、15世紀前半～15世紀中頃の暦年代を示した。いずれも室町時代中期にあたる。出土遺物と併せて判断し、築造時期は室町時代と比定した。

SB03の構成柱穴 SP066 (第15図 図版8)

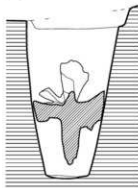
SB06の南西隅を構成する角柱である。柱穴の下位で、穴にすっぽりとはまる様に枝部を切断加工されたマツ属の生材を検出した。柱穴下位で湧水を確認しており、柱の沈下を防ぐための支柱材と考える。

SB04・09・10 (第16図)

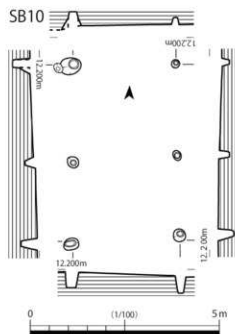
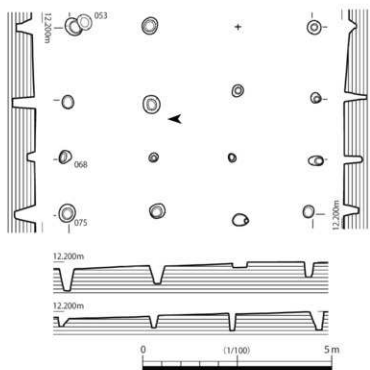
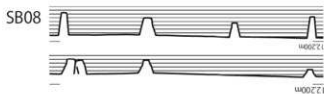
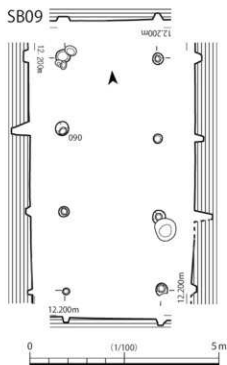
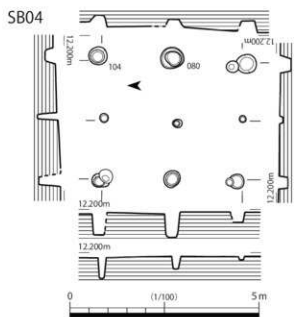
SB04・09は調査区南東部中央寄りに位置し、棟は重な



12.00m



第15図 SB03・構成柱穴  
支柱材出土状況実測図



第 16 図 SB04・08・09・10 実測図

り合う。またSB10はSB03と重なる。いずれもほぼ東西あるいは南北の棟方向を示す。総量は少ないが、出土遺物から室町時代の築造と比定する。

#### SB08 (第16図)

調査区南東部中央寄りに位置する。北東隅の構成柱穴より新しい柱穴の柱根(生材)の放射性炭素年代測定(AMS)の結果は15世紀中頃～の暦年代(室町時代～)を示しており、SB08はそれに先行する時期の築造と考える。

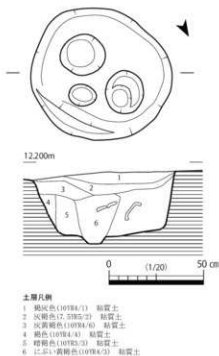
#### SA01・02・03(第17図)

SA01は調査区南西隅に位置する。平面形は隅丸方形で柱痕を有す。更に西方の調査区外に展開し、掘立柱建物を構成すると考える。隣接のSB05の構成柱穴から平瓦(流込み遺物と考える)が出土しており、SA01がその時代に関わる築造物である可能性もある。SA02・03は調査区の北東部に位置し、SB03の北部・西部を囲むように延び、建物に付随する構造物と考える。

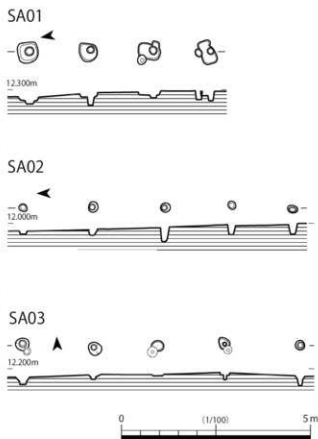
#### SK05(第18図 図版B)

調査区北西部、SB06の棟範囲内に位置する。平面形はほぼ円形に近い長楕円形を呈し、規模は長径76cm、短径70cm、検出面から深さ36cmを測る。断面は筒状を呈し、底面はほぼ平坦で、柱痕のような窪みを3カ所有す。大型柱穴の堀

#### SK05

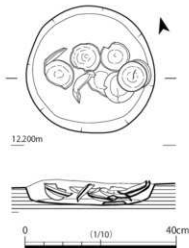


第18図 SK05実測図

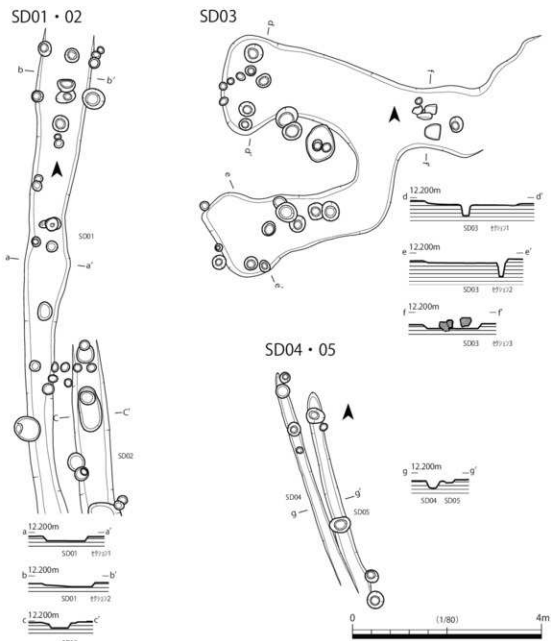


第17図 SA01・02・03実測図

#### SC01



第19図 SC01実測図



第20図 SD01・02・03・04・05実測図

方の可能性もある。出土遺物から、平安時代後期～鎌倉時代前半の築造と判断する。

#### SC01(第19図 図版8)

調査区の南部中央付近、SB07 および SB05 の棟範囲内に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径34cm、検出面から深さ6.5cmを測る。断面は皿状で底面は平坦である。底面に並べるように土師器皿12枚(201～211)と土師器杯2枚(212・213)が出土した。平安時代中期～鎌倉時代の地鎮めの遺構と考える。多くの土師器皿と土師質土器で構成される遺構は大部分県で類例が多く、国東半島の六田遺跡1号土壇と時期・様相ともに類似している。

#### SD01・02・03・04・05(第20図 図版8)

調査区南東部にSD01からSD05まで5本の溝が検出された。SD01、SD02はほぼ併行し、南から北へ緩やかに流れる傾斜をとる。SD03は二股にわかれたものが西から東へ緩やかに流れる傾斜をとる、東方で一本になる。出土遺物から判断しSD01・02と造られた時期に大差はない。SD04、SD05は北から南に緩やかに流れる傾斜をとる、南方で合流する。溝のそれぞれの出土遺物から、築造時期はいずれも室町時代と比定できる。

### 3 主な遺物

信川遺跡では、弥生土器をはじめとして土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦器・石製品・鉄製品など多数の遺物を取り上げることができた。その多くが遺構に伴い、伴件関係が判明する良好な資料であった。紙面の都合で詳しく記述できないため、個別の詳細は遺物観察一覧表(第2～4表)を参考にされたい。

#### (1) 弥生時代・古墳時代の遺構出土遺物

SK01 出土遺物(第21～23図 図版9～10) 1・2は垂下部に山形文を施文している壺の口縁部である。3の垂下部は無文であるが、口縁の内面に交差する沈線が描かれている。4～6は壺の頸部である。頸部には貼付け突帯が1条(3・5)残るものと2条(4・6)残るものがある。7は長頸壺の頸部である。8・9は壺の底部である。浅い上げ底である。10～13は甕である。10は頸部に連鎖状指頭押圧痕をもつ突帯が見られるが、11～13には装飾は見られない。14は直口の甕である。15～19は甕の底部と思われる。いずれも上げ底である。20は高杯の杯部および脚部の一部である。21～25は鉢である。21は頸部に連鎖状指頭押圧痕がある突帯を有し、口縁端部と肩部に大型のハケ目原体の押圧痕が巡る。類例は見られない。22と23は分量が酷似し、同一人物の成形をうかがわせる。

SI02 出土遺物(第24図 図版10) 26～30は弥生土器で混入遺物である。26～28は垂下部に施文のある壺口縁部である。29は頸部に指頭押圧痕のある貼付け突帯が施されている。30は上げ底を呈する甕の底部である。31～33、35～37は弥生土器甕である。36は浅い上げ底を呈する底部、37はミニチュア甕の底部と思われる。34は土師器壺、38は高杯の杯部である。岡山県津寺遺跡3出土の高杯と酷似する。39は高杯の裾部である。40は軽石の砥石で、幅0.4cmの溝が13条見られる。

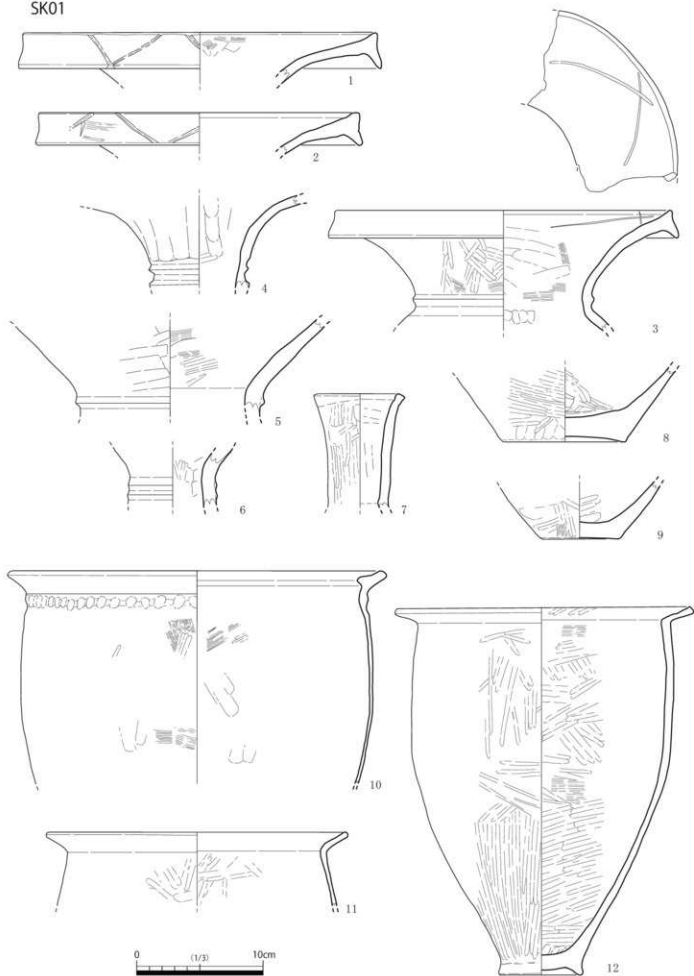
SK001(SI02埋土中位)出土遺物(第24図 図版10) 41～43はいずれも甕で、口縁部と肩部の内外面にハケ目調整を施している。

#### (2) 中世の遺構出土遺物

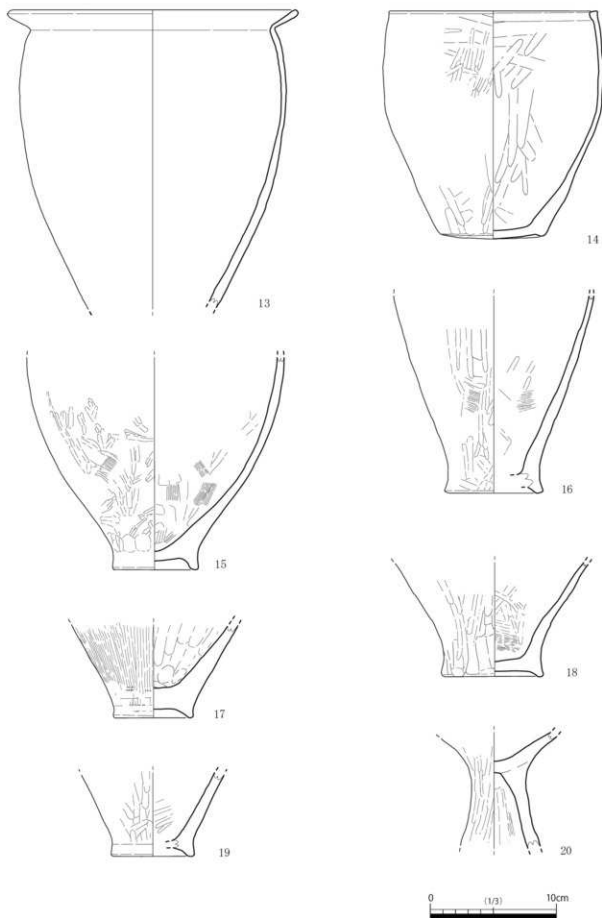
SB01 構成柱穴出土遺物(第25・26図 図版11～14) SP001:44は底部へら切りの土師器皿である。SP002:45・46は底部へら切りの土師器皿である。47・48は土師器椀、49・50は土師器杯である。SP003:51は須恵器杯身の底部である。混入遺物である。52～58は底部へら切り、59～65は底部系切りの土師器皿である。66～68は土師器椀である。69～73は土師器杯である。74～79は瓦器椀である。74・75・77は小さく歪な高台を持つ。80は白磁の皿である。81は土師質土器の鍋口縁部である。SP004:82・83は底部へら切りの土師器皿である。84は土師器杯である。85・86は瓦器椀である。87は青磁皿である。SP005:88・89は底部へら切りの土師器皿である。90・91は底部系切りの土師器杯である。92は瓦器椀である。SP006:93は土師器杯、94は椀である。SP007:95～97は底部へら切りの土師器皿である。98は混入遺物の須恵器杯蓋である。SP008:99は底部へら切りの土師器皿、100は瓦器椀である。SP009:101は底部系切りの土師器皿である。102は土師器杯の体部、103は底部系切りの杯である。SP010:104は底部へら切りの土師器皿である。SP011:105は底部へら切りの土師器皿である。SP013:106は底部系切りの杯である。107は滑石製の用途不明石製品である。6花弁を持つ小さな器が二つ連なる。博多遺跡群などから酷似する石



SK01

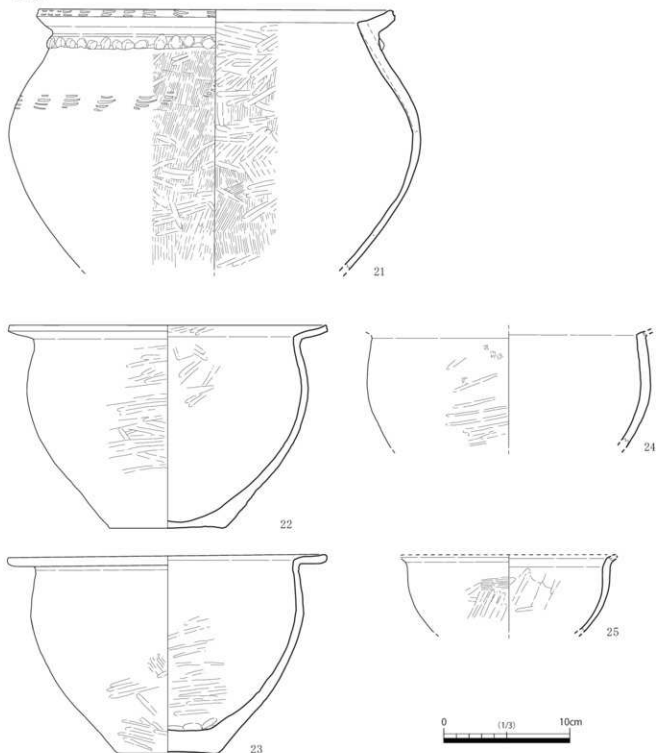


第 21 图 SK01 出土遺物実測図①



第22图 SK01 出土遺物実測図②

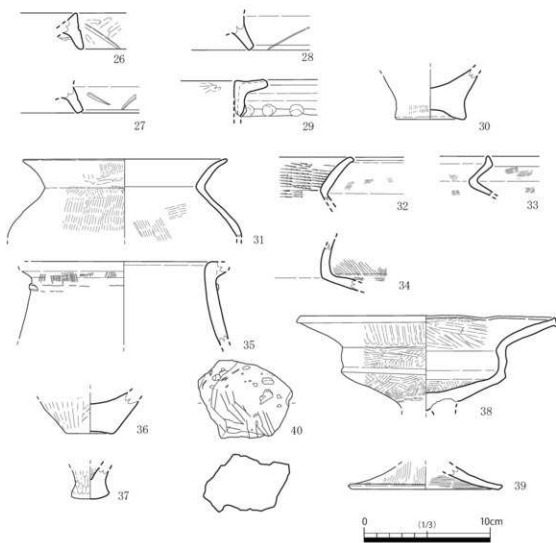
SK01



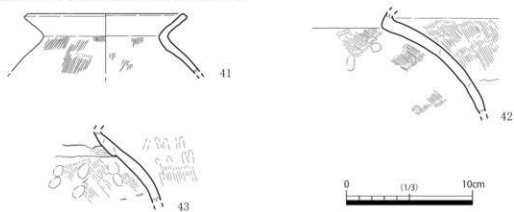
第 23 図 SK01 出土遺物実測図③

製品が出土している。SP014 : 108 は外面に櫛目を持つ青磁皿である。SP018 : 109 ~ 111 は底部ヘラ切りの土師器皿である。112 は底部糸切り、113 はヘラ切りの土師器杯である。114 は小さく垂な高台を持つ瓦器椀である。SP019 : 115・116 は底部糸切りの土師器杯である。117 は青磁椀の口縁部である。SP020 : 118 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP021 : 119 は口縁端部がわずかに外反する土師器杯である。SP023 : 120・121 は底部ヘラ切りの土師器皿である。122 ~ 124 は底部糸切りの土師器杯である。125・126 は瓦器椀である。126 は SP004 出土の破片と接合している。

SI02



SK001 (SI02 埋土中位: SI02 廃絶後間もなく掘りこまれた土坑)



第 24 図 SI02、SK001 出土遺物実測図

127 は内外面に密なヘラミガキを施している土師器碗である。

**SB05 構成柱穴出土遺物 (第 27 図 図版 14・15)** SP113:128 は底部糸切りの土師器杯である。SP114:129 は底部糸切りの土師器杯である。SP184:130 は底部糸切りの土師器杯である。SP157:131 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP187:132～135 は底部ヘラ切りの土師器皿である。136 は底部糸切りの土師器皿である。137、138 は土師器杯と思われる。139 は瓦器碗である。140 はやや楕円形を呈する滑石製品である。縦横断面はわずかに内湾している。石鋼転用の温石の可能性はある。SP188:141～144 は底部ヘラ切りの土師器皿である。145 は底部糸切りの土師器皿である。146、147 は底部糸切りの土師器杯である。148 は瓦器碗、149 は瓦器皿である。150 は土師質土器羽釜の口縁部である。SP195:151 は底部糸切りの土師器杯である。152 は土師質土器羽釜である。SP197:153 は平瓦である。上面に粗い布目痕、下面に縄目痕が残る。SP211:154・155 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP227:156 は土師器杯と思われる口縁部である。SP245:157 は底部糸切りの土師器杯である。SP237:158・159 は底部ヘラ切りの土師器皿である。160 は底部糸切りの土師器碗である。161 は杯の口縁部である。162 は瓦器碗である。

**SB02 構成柱穴出土遺物 (第 28 図 図版 15)** SP125:163 は瓦器碗である。外面低位に指オサエ痕が多数残る。SP136:164 は底部ヘラ切りの土師器皿である。ヘラ切り後、無調整のため左右に歪みが生じている。SP152:165 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP222:166 は底部ヘラ切りの土師器皿である。167 は土師器碗、168 は杯である。169 は鉄滓である。

**SB06 構成柱穴出土遺物 (第 28 図 図版 15)** SP034:170・171 は底部ヘラ切りの土師器皿である。172 は底部糸切りの土師器杯である。173 は瓦器碗である。SP038:174 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP039:175 は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP041:176 は底部ヘラ切りの土師器皿である。

**SB07 構成柱穴出土遺物 (第 28 図 図版 16)** SP120:177 は鉄製の角釘である。SP151:178 は鉄製の角釘である。SP163:179 は土師器杯である。底部切り離しは不明である。180 は体部外面に鎬連弁文をもつ青磁碗である。鎬は明瞭で、間弁も明確に彫られている。181 は輸入陶磁の白磁四耳壺である。肩に強い屈曲をもち、高台端部外面に幅広の面取りを施している。

**SB03 構成柱穴出土遺物 (第 29 図 図版 16)** SP067:182 は土師器杯である。底部切り離しは不明である。SP270:183 は東播系須恵器のこね鉢である。184 は土師器蓋である。全面に煤が付着している。SP280:185 は土師質土器鍋である。

**SB04 構成柱穴出土遺物 (第 29 図 図版 16)** SP080:186 は青磁碗である。SP104:187 は土師質土器鍋である。188 は瓦質土器羽釜である。体部外面に格子目タタキを施している。

**SB08 構成柱穴出土遺物 (第 29 図 図版 16)** SP075:189 は縄文土器深鉢で、混入遺物である。SP068:190 は底部糸切りの土師器皿である。

**SB09 構成柱穴出土遺物 (第 29 図 図版 16)** SP090:191 は底部糸切りの土師器皿である。192 は土師器碗である。193 は土師質土器足鍋の脚部である。

**SK19 出土遺物 (第 30 図 図版 16)** 194 は弥生土器の口縁部である。端部は内方向につまみ上げている。

**SK05 出土遺物 (第 30 図 図版 16・17)** 195・197 は底部ヘラ切りの土師器皿、196・198 は底部

SB01

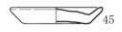
SP001



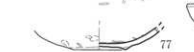
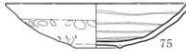
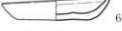
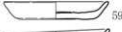
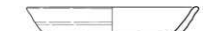
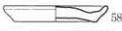
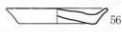
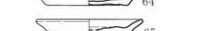
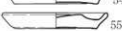
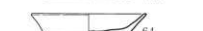
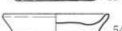
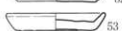
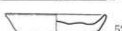
SP002



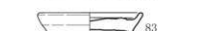
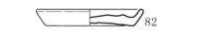
SP002



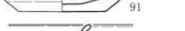
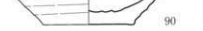
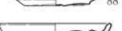
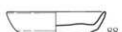
SP003



SP004



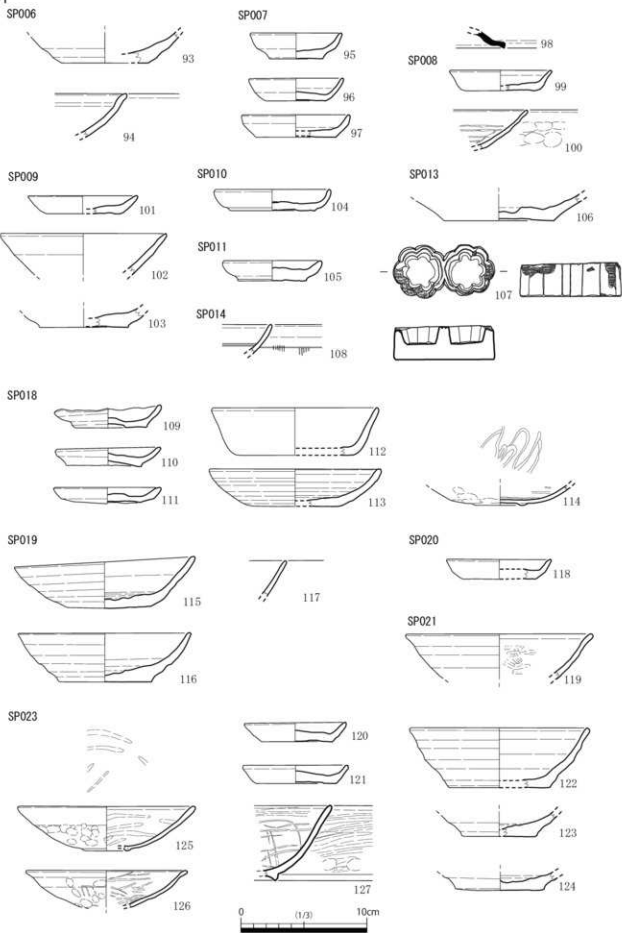
SP005



0 (1/3) 10cm

第 25 图 SB01 出土遺物実測図①

SB01



第 26 图 SB01 出土遺物実測図②

SB05

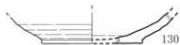
SP113



SP114



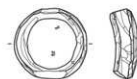
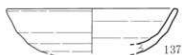
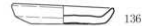
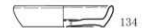
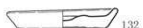
SP184



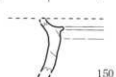
SP157



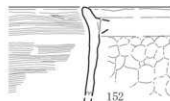
SP187



SP188



SP195



SP211



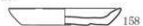
SP227



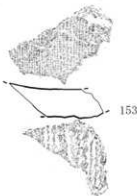
SP245



SP237



SP197



第 27 図 SB05 出土遺物実測図



SB02

SP125



163

SP222



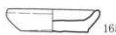
166

SP136



164

SP152



165



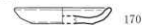
168



169

SB06

SP034



170



171



172



173

SP038



174

SP039



175

SP041



176

SB07

SP120



177

SP151



178

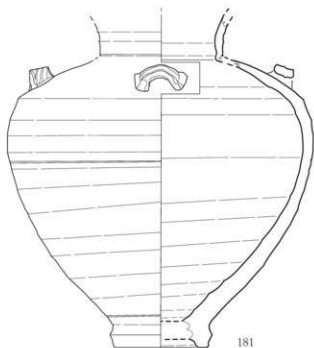
SP163



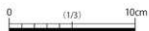
179



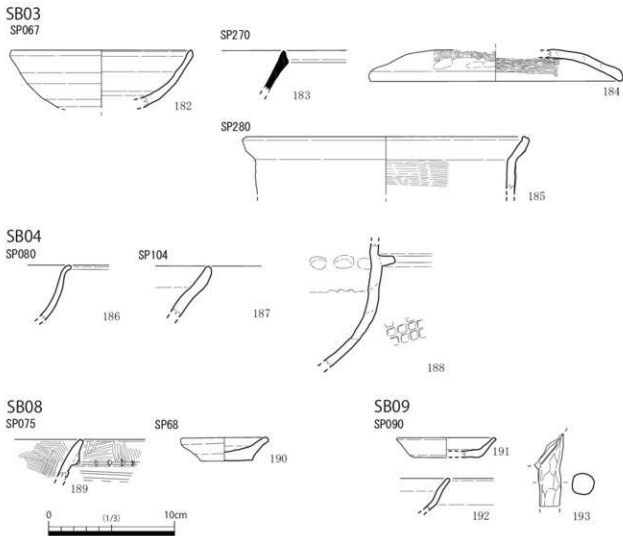
180



181



第 28 図 SB02・06・07 出土遺物実測図



第 29 図 SB03・04・08・09 出土遺物実測図

糸切りの土師器皿である。199 は白磁碗である。

SK07 出土遺物 (第 30 図 図版 17) 200 は底部糸切りの土師器杯である。

SC01 出土遺物 (第 30 図 図版 17) 201 ~ 211 は底部ヘラ切りの土師器皿である。212・213 は底部糸切りの土師器杯である。

SD01 出土遺物 (第 30 図 図版 17) 214 は瓦質土器の鍋である。215 は花崗斑岩の砥石である。三面を使用している。

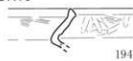
SD03 出土遺物 (第 30 図 図版 17・18) 216 は瓦質土器の湯釜、217 は瓦質土器の鍋である。218 は瓦質土器足鍋の脚部である。219 は土師質土器足鍋の脚部である。220 は備前焼播鉢である。1 単位 7 条の播目をもち。

SD04 出土遺物 (第 30 図 図版 18) 221 は玉縁口縁をもつ白磁の碗である。222 は長頸甕と思われる。

SD05 出土遺物 (第 30 図 図版 17) 223 は土師質土器の鍋である。

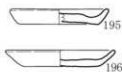
(3) 柱穴出土遺物 (第 31・32 図 図版 18 ~ 20) SP250:224 は泥質片岩製の平基無茎式の石甕である。SP047:225 は弥生土器壺で、口縁端部に 2 条の凹線が巡る。226 は弥生土器高杯である。SP238:227 は弥生土器壺の口縁部である。九州系の特徴を持つ口縁部と頸部に指頭押圧痕を持つ。SP061:

SK19



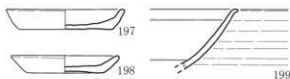
194

SK05



195

196



197

198

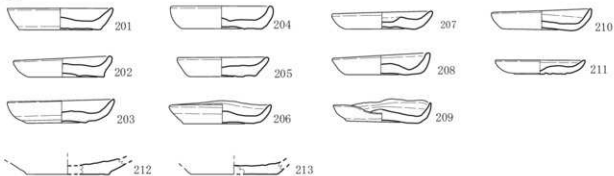
199

SK07



200

SC01



201

204

207

210

202

205

208

211

203

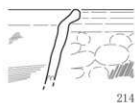
206

209

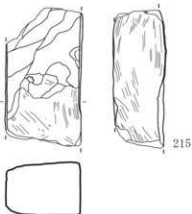
212

213

SD01



214

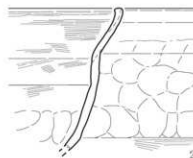


215

SD03



216



217

SD04



221

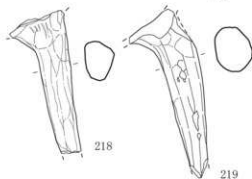


222

SD05

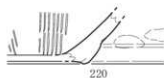


223



218

219



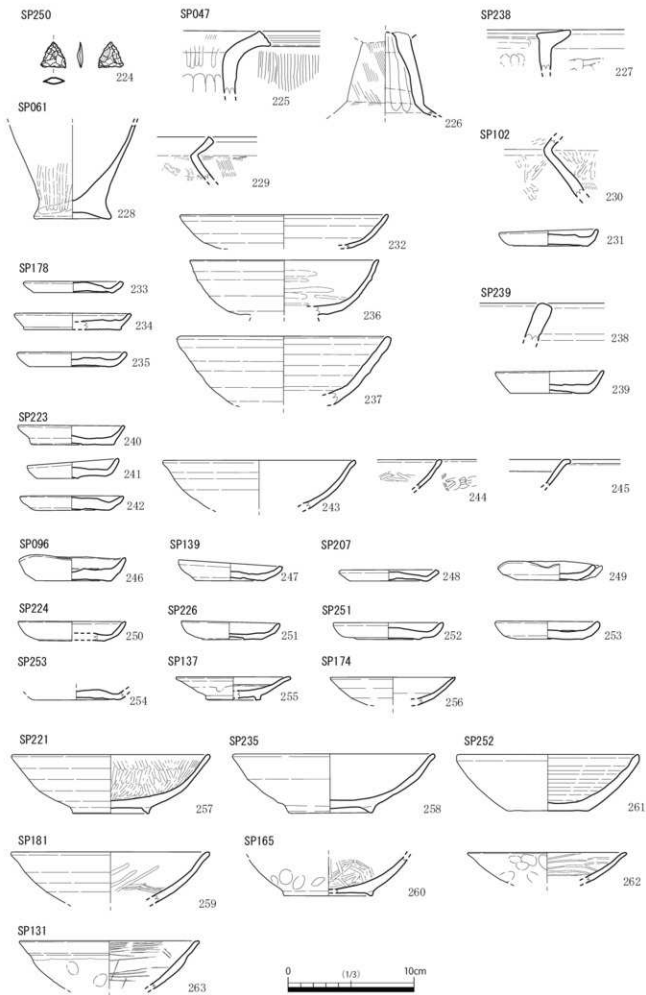
220



第30图 SK19・05・07、SC01、SD01・03・04・05出土遺物実測図

228は弥生土器甕である。底部は緩やかな上げ底を呈している。229は弥生土器甕の口縁部である。SP102:230は弥生土器甕、231は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP178:232は土師器杯である。233～235は底部ヘラ切りの土師器皿である。336は土師器椀である。237は土師器鉢である。SP239:238は企救型土師器甕の口縁部である。239は底部糸切りの土師器皿である。SP223:240～242は底部ヘラ切りの土師器皿である。243は土師器椀である。口縁端部がわずかに外反する。244は瓦器椀である。245は白磁椀である。SP096:246は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP139:247は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP207:248・249は底部ヘラ切りの土師器皿である。249はロクロ成形後に片口を作り出している。SP224:250は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP226:251は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP251:252・253は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP253:254は底部ヘラ切りの土師器皿である。SP137:255は高台を持つ白磁の皿である。SP174:256は白磁の皿である。SP221:257は土師器椀である。内面全体に丁寧なヘラミガキを施している。SP235:258は土師器椀である。SP181:259は土師器椀である。SP165:260は土師器椀である。SP252:261は底部糸切りの土師器杯である。262は瓦器椀である。SP131:263は瓦器椀である。SP135:264は瓦器椀である。SP141:265は瓦器椀である。SP156:266は瓦器椀である。SP285:267は土師質土器鍋である。SP216:268は土師質土器鍋の底部と思われる。SP298:269は土師質土器鍋である。体部外面に煤が付着している。SP302:270はいわゆる東周防型の土師質土器鍋である。271は土師質土器足鍋の脚部である。SP295:272は土師質土器足鍋の脚部である。273は瓦質土器鍋である。SP062:274は瓦質土器鍋の口縁部である。SP268:275は瓦質土器鍋の口縁部である。SP278:276は瓦質土器鍋の口縁部である。SP194:277は瓦質土器鉢である。SP143:278は東播系須恵器のこね鉢である。SP049:279は滑石製石鍋である。温石として転用した可能性が考えられる。SP058:280は鉄滓である。下部に丸味を持つため椀形滓と考えられる。SP169:281は鉄滓である。上面に赤錆が付着している。SP065:282は鉄製の角釘である。頭部と先端を欠損している。

(4) 遺物包含層出土遺物(第33・34図 図版20・21) 283は弥生土器壺の体部で肩部に段を有し、2条のヘラ描き沈線を持つ。284は壺の垂下口縁で、施文帯に山形文を有する。285は壺の口縁部で、内面に双頂突帯を有する。286は壺の頸部から肩部である。頸部に尖頂突帯5条残る。287は浅く緩やかな上げ底を持つ壺の底部である。288は甕の頸部から底部で、頸部は意図的に欠かれたものか、同じ高さで一週巡る。289はミニチュア壺で、脚部はハの字形に長く開き、頸部に6条の沈線が巡る。290～292は壺の底部である。いずれも浅く緩やかな上げ底を持つ。293は弥生土器甕の口縁から胴部で、口縁部は頸部からわずかに外傾して、直線的に伸びる。294は弥生土器で口縁端部を上方に突出させている。295は甕の底部で内外面に密なヘラミガキを施している。底部は浅い上げ底を呈している。296は小型の甕で、底部の厚さは1.7cmと厚い。297は大型の甕の底部である。298は平坦な底部を持つ甕である。299はわずかに上げ底を呈する甕の底部である。300は須恵器杯身の底部である。301は底部ヘラ切りの土師器皿で底部が厚く、体部は極めて浅い。302は底部ヘラ切りの土師器皿である。303～305は土師器椀の底部である。306～308は底部糸切りの土師器杯である。309は青磁の皿で見込みに草花状文を持つ。310は青磁の椀である。体部内面に片切蓮華文

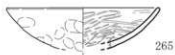


第31図 柱穴出土遺物実測図①

SP135



SP141



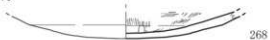
SP156



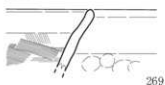
SP285



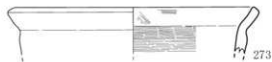
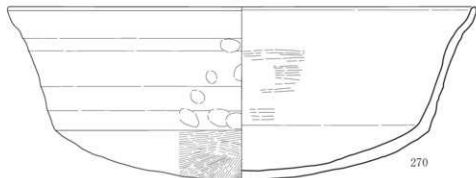
SP216



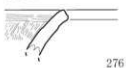
SP298



SP302



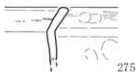
SP278



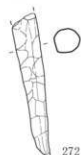
SP062



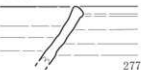
SP268



SP295



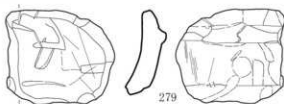
SP194



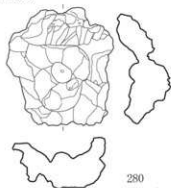
SP143



SP049



SP058



SP169

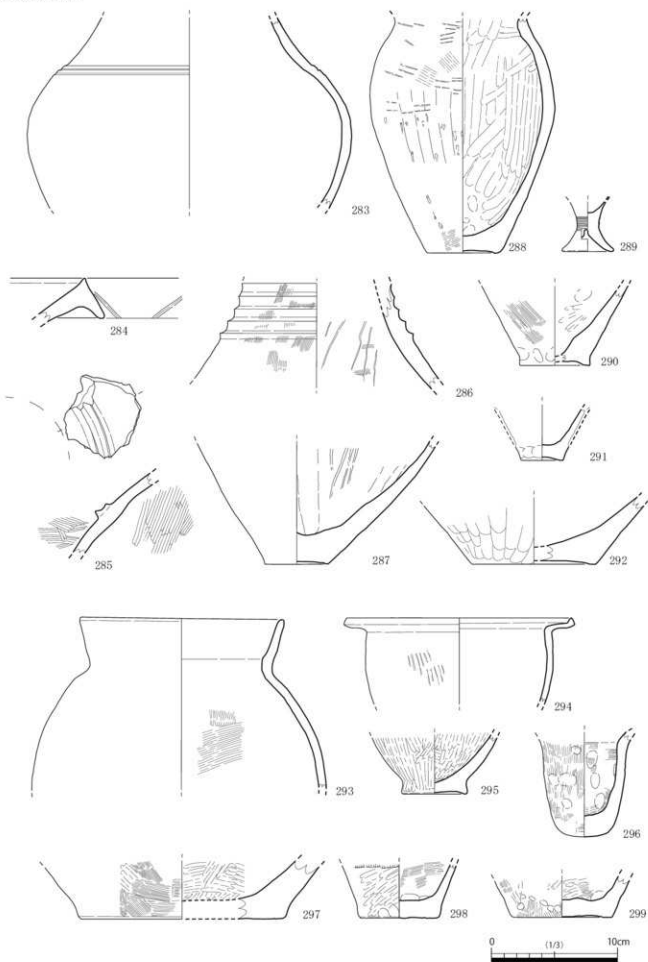


SP065



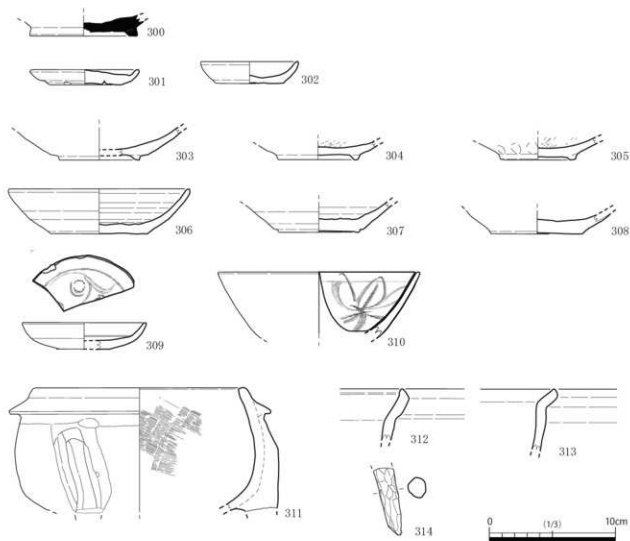
第 32 図 柱穴出土遺物実測図②

遺物包含層



第 33 図 遺物包含層出土遺物実測図①

## 遺物包含層



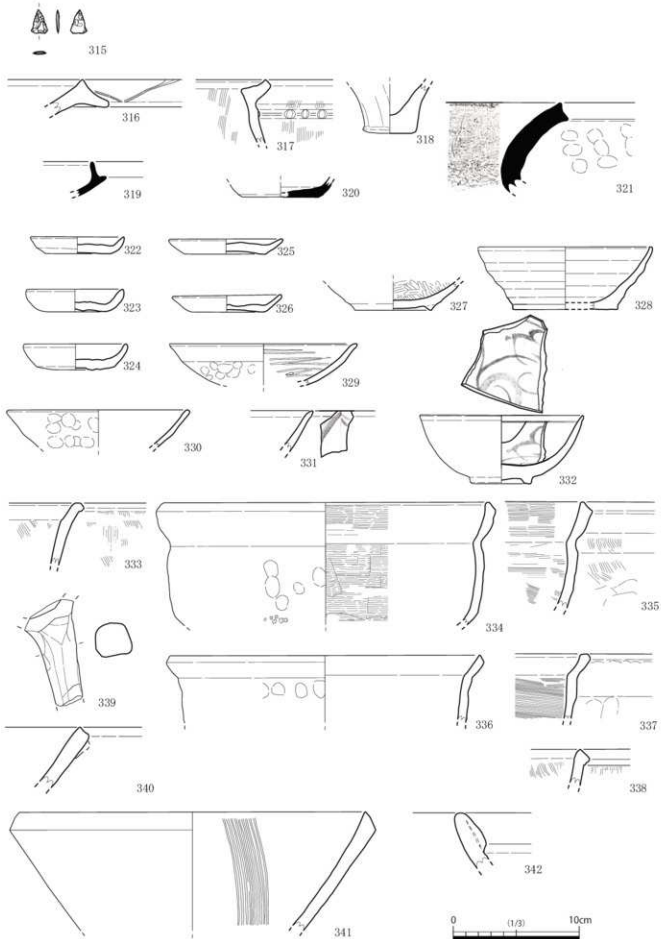
第34図 遺物包含層出土遺物実測図②

を持つ。311は瓦質土器の足釜である。脚部が鈎の直下から伸び、関西系の特徴をもつ。312・313は瓦質土器鍋の口縁である。314は瓦質土器足鍋の脚部である。

(5) 遺構外遺物(第35図 図版22) 315は泥質片岩製の平基無茎式の石甌である。316は垂下部に山形文を有する弥生土器壺の口縁部である。317は頸部の突帯に指頭圧痕を施している弥生土器甕である。318は弥生土器甕あるいは壺の底部である。319は須恵器杯身の口縁部である。320は須恵器杯身の底部である。321は須恵器大甕の口縁部である。322～325は底部へラ切りの土師器皿である。326は底部糸切りの土師器皿である。327は底部糸切りが残る土師器椀である。328は底部糸切りの土師器杯である。329・330は瓦器椀である。331は鎗蓮弁文をもつ青磁椀である。332は内面に片切蓮弁文を持つ青磁椀である。333は土師質土器鍋の口縁部から頸部である。334～338は瓦質土器の鍋である。339は土師質土器足鍋の脚部である。340は瓦質土器鉢の口縁部で、片口の痕跡が残る。341は備前焼の播鉢で、一単位9条の播目をもつ。342は備前焼の大甕の口縁部である。



遺構外



第 35 図 遺構外遺物実測図

第2表 出土土器・陶磁器観察一覧表

No.	採 取 区	出土場所	種別	加飾	寸法 (mm)			胎土	焼成	色調	(内) 主な調整 (外)	(内) 備考	
					口径 (復元値)	高さ (復元値)	底径 (復元値)						
1	21	9	SK01	赤生土器	直	(28.4)	(4.1)	-	やや細	良	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR5/3	ハケ目後ヘラミガキ ナデ	口縁垂下部外面に山形文
2	21	9	SK01	赤生土器	直	(25.6)	(3.2)	-	滑	やや 良	灰褐色 7.5YR5/2 にぶい褐色 7.5YR6/3	ハケ目かナデ ヘラケズリ後ナデ	口縁垂下部外面に山形文
3	21	9	SK01	赤生土器	直	(28.0)	(9.5)	-	やや細	良	明褐色 7.5YR7/1 褐色 5YR6/6	ヘラケズリ後ナデハケ目 顔面に擦オセエ ナデ後ハケ目ヘラミガキ	内面上部に交差する直線状の沈凹 顔面に一葉の突帯
4	21	9	SK01	赤生土器	直	-	(7.4)	-	やや細	良	褐色 5YR7/6 にぶい褐色 7.5YR5/3	ナデヘラケズリ後ヘラミガキ ヘラケズリ後ナデ	二葉の突帯
5	21	9	SK01	赤生土器	直	-	(7.3)	-	やや細	やや 良	明褐色 7.5YR7/2 にぶい褐色 7.5YR6/3	ヘラケズリハケ目ヘラミガキ ヘラケズリナデ	貼付け突帯(一葉のみ確認)
6	21	9	SK01	赤生土器	直	-	(4.4)	-	滑	良	にぶい褐色 5YR6/3 灰褐色 7.5YR6/2	ヘラケズリヘラミガキ ヨコナデ	貼付け突帯(二葉)
7	21	9	SK01	赤生土器	長脚直	(6.6)	(9.2)	-	やや細	やや 良	明黄褐色 10YR7/6 にぶい褐色 7.5YR7/4	ヘラケズリ 器面割減 ヘラケズリ後ナデヘラミガキ	-
8	21	9	SK01	赤生土器	直	-	(6.0)	10.0	やや細	不良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 7.5YR7/3	ヘラケズリ後ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ	底部の横ヘラケズリ後ナデ 底部～体部片集積面有り
9	21	9	SK01	赤生土器	直	-	(4.6)	6.2	やや細	やや 良	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 5YR6/4	ヘラケズリ後ヘラミガキ ヘラケズリ後ハケ目ヘラミガキ	底部ヘラケズリ後ナデ 外面平ら削付
10	21	9	SK01	赤生土器	変	(29.2)	(17.0)	-	やや細	やや 滑	褐色 5YR6/6 褐色 5YR7/8	ヘラケズリハケ目ヘラミガキ ハケ目ヘラケズリヘラミガキ	外面に遠隔状の溝(凹)突帯 器径 2cm
11	21	9	SK01	赤生土器	変	(23.8)	(5.8)	-	滑	良	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 5YR6/4	ヘラケズリ後ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ	-
12	21	9	SK01	赤生土器	変	(23.3)	28.3	6.7	滑	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 灰褐色 7.5YR6/2	ヨコナデ後ハケ目ヘラミガキ ヨコナデ後ヘラミガキ	内面に縁6～17mmから底部まで黒色 (7.5YR2/1)
13	22	9	SK01	赤生土器	変	(23.4)	(23.9)	-	滑	良	にぶい褐色 5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3	ヨコナデ後ヘラミガキか ヨコナデ後ヘラミガキか	摩滅のため調整不明
14	22	9	SK01	赤生土器	変	(16.8)	18.2	8.4	やや細	やや 良	にぶい黄褐色 10YR6/4 明黄褐色 10YR7/6	ヘラケズリ後ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ	口縁及び底部ナデ 内面割減(器底)
15	22	9	SK01	赤生土器	変	-	(17.0)	6.7	やや細	やや 良	にぶい褐色 7.5YR7/3 明褐色 7.5YR3/4	ヘラケズリ後ヘラミガキ ハケ目後ナデヘラミガキ	内面に地成時の肌腫 (10YR3/1 肌腫 色)
16	22	9	SK01	赤生土器	変	-	(15.8)	(7.8)	やや細	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	ナデ 後ハケ目ヘラミガキ ナデヘラケズリ後ハケ目ヘラミガキ	-
17	22	9	SK01	赤生土器	変	-	(7.4)	6.4	やや細	良	黄褐色 2.5Y4/1 にぶい黄褐色 10YR7/3	擦オセエナデ ナデの後上方面のハケ目後ヘラミガキ	底部内面に沿ったナデ 中央左方向のナデ
18	22	9	SK01	赤生土器	変	-	(9.1)	8.0	やや細	やや 良	黒色 2.5Y2/1 にぶい褐色 7.5YR6/3	ヘラケズリ後ハケ目ヘラミガキ ヘラケズリ後ヘラミガキ	底部及びヘラケズリ後ナデ 内面及び体部共に黒色
19	22	9	SK01	赤生土器	変	-	(6.5)	66.8)	滑	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	ハケ目ヘラミガキ ナデヘラミガキ	底部ヘラケズリ後ナデ 外面に割付帯
20	22	9	SK01	赤生土器	高坪	-	(9.3)	-	滑	やや 良	赤褐色 10YR6/6 にぶい褐色 5YR6/4	杯部ナデ後ハケ目 器部ヘラケズリ後 ハケ目ヘラミガキ 杯部ヨコナデ 器部ヘラケズリ後ヘラ ミガキ	杯部と器部の接合部に工具による痕跡
21	23	9	SK01	赤生土器	鉢	(28.4)	(18.0)	-	滑	良	灰褐色 7.5YR6/2 にぶい褐色 7.5YR6/4	ヨコナデ後ヘラミガキ ヨコナデ後ハケ目ヘラミガキ	口縁縁部に二葉のハケ目 器部に四葉 のハケ目
22	23	10	SK01	赤生土器	鉢	(25.4)	16.2	(9.4)	滑	良	明褐色 10YR4/1 黄褐色 10YR4/2	ヨコナデ後ヘラミガキ ヨコナデ後上方面のヘラミガキ	底径に縦溝によるハセ 内面摩滅のため調整不明
23	23	10	SK01	赤生土器	鉢	(25.6)	15.8	8.0	滑	良	明褐色 7.5YR7/2 にぶい褐色 7.5YR6/4	ヨコナデ後ヘラミガキ ヨコナデ後ヘラミガキ	-
24	23	10	SK01	赤生土器	鉢	内(20.6)	(9.3)	-	滑	良	明褐色 7.5YR7/2 にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	ヨコナデ後ヘラミガキか ヨコナデ後ヘラミガキ ヨコナデ後ヘラミガキ	-
25	23	10	SK01	赤生土器	鉢	(17.0)	(6.2)	-	滑	やや 良	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい赤褐色 5YR5/4	ヘラケズリハケ目ヘラミガキ ヘラケズリハケ目ヘラミガキ	-
26	24	10	SK02	赤生土器	也	-	(2.9)	-	やや細	良	にぶい赤褐色 5YR5/4 明赤褐色 5YR5/6	ヨコナデ前後のハケ目 ヨコナデ前後のハケ目	-
27	24	10	SK02	赤生土器	也	-	(2.1)	-	やや細	やや 良	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	口縁部ヨコナデ	口縁垂下部外面に山形文
28	24	10	SK02	赤生土器	也	-	(2.7)	-	やや細	やや 良	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	口縁部ヨコナデ	口縁垂下部外面に山形文
29	24	10	SK02	赤生土器	変	-	(3.0)	-	滑	良	にぶい褐色 7.5YR7/3 灰褐色 7.5YR6/2	ヨコナデ後ヘラミガキ ヨコナデ	顔面に貼付け突帯
30	24	10	SK02	赤生土器	変	-	(4.0)	3.7	やや細	やや 良	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい褐色 10YR6/4	ナデ ハケ目後ナデ	-
31	24	10	SK02	赤生土器	変	(16.4)	(6.3)	-	滑	良	明褐色 5YR5/1 褐色 5YR6/6	ヨコナデハケ目 ヨコナデハケ目	-
32	24	10	SK02	赤生土器	変	-	(3.5)	-	やや細	良	にぶい褐色 5YR6/4 褐色 5YR6/6	ヨコナデ 天目のハケ目 ヨコナデ 顔目のハケ目	-
33	24	10	SK02	赤生土器	変	-	(3.1)	-	やや細	良	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR5/3	ヨコナデ前後のハケ目 ヨコナデ前後のハケ目	-

No.	種別	採取	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			出土	焼成	色調	(内)	(内)	備考
						口径 (最大径)	器高   残存高	底径 (最大径)						
34	24	10	SI02	土師器	甕		(4.1)		中や	中や	灰白・褐色 7.5YR7/4 に赤い褐色 7.5YR6/4	ナデ ハケ目 (大小ハケ目有り)	扉部は細いハケ目	
35	24	10	SI02	赤生土器	甕	(17.0)?	(6.7)		中や	中や	に赤い黄褐色 10YR7/2 に赤い褐色 7.5YR7/3	ナデか? 口縁下ハケ目 以下部面割れのため不明	口縁水平部、口縁下に船付け突帯	
36	24	10	SI02	赤生土器	甕小		(3.3)	3.8	南	中や	灰色 5Y5/1 明赤褐色 2.5YR5/6	指オサエ ナデ 指オサエ ナデ ヘラミガキ	扉部指オサエ ナデ ヘラミガキ	
37	24	10	SI02	赤生土器	甕		(2.5)	3.0	中や	南	灰褐色 5YR4/1 褐色 5YR6/6	ナデ 指オサエ ナデ ヘラミガキ	ミニチュア土器	
38	24	10	SI02	土師器	高杯	外 21.0 内 20.4	(7.75)		中や	南	灰褐色 5YR4/2	ヨコナデ ハケ目 ヘラミガキ ヨコナデ ハケ目 ヘラミガキ	岡山県伊予郡藤井 3 調査出土土器と類 似する	
39	24	10	SI02	土師器	高杯		(1.8)	(12.5)	南	南	に赤い褐色 5YR6/4 に赤い褐色 7.5YR7/4	ハケ後ナデ ハケ目	内面に黒染	
41	24	10	SK001	土師器	甕	(13.0)	(4.8)		中や	南	褐色 7.5YR4/6 赤褐色 5YR4/6	口縁部ナデ 以下ハケ目後ナデ 口縁部ナデ 以下ハケ目後ナデ	全体的に丁寧なナデ	
42	24	10	SK001	土師器	甕		(8.2)		中や	南	黄灰色 2.5Y4/1	ヨコナデ 指オサエ ハケ目 ヨコナデ ハケ目		
43	24	10	SK001	土師器	甕		(5.7)		中や	南	に赤い黄褐色 10YR6/4 に赤い褐色 7.5YR5/4	指オサエナデ ハケ目 指オサエナデ ハケ目 ヘラミガキ		
44	25	11	SB01 (SP001)	土師器	皿	(8.0)	1.7	(7.0)	南	南	に赤い褐色 5YR6/4 に赤い黄褐色 5YR5/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
45	25	11	SB01 (SP002)	土師器	皿	(7.3)	1.3	(5.4)	南	南	明赤褐色 7.5YR7/2 明赤褐色 7.5YR7/2	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
46	25	11	SB01 (SP002)	土師器	皿	(9.1)	1.9	7.1	中や	南	に赤い褐色 7.5YR7/4 に赤い褐色 7.5YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
47	25	11	SB01 (SP002)	土師器	碗	(16.0)	4.0		南	中や	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	口縁ナデ後ヘラミガキ 口縁ナデ後ヘラミガキ		
48	25	11	SB01 (SP002)	土師器	碗	(15.2)	3.8		南	中や	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	口縁ナデ後ヘラミガキ 口縁ナデ		
49	25	11	SB01 (SP002)	土師器	杯	(14.4)	3.95	(8.2)	中や	南	に赤い黄褐色 10YR7/4 に赤い黄褐色 10YR7/4	口縁ナデヘラミガキナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り 板目正座	
50	25	11	SB01 (SP002)	土師器	杯	(15.2)	3.5	(7.8)	中や	南	に赤い黄褐色 10YR7/4 に赤い黄褐色 10YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り	
51	25	11	SB01 (SP003)	須恵器	杯身		(1.15)	(9.3)	南	南	灰色 N6/ 灰色 N6/	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 船付け高台	
52	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.1	1.5	6.3	中や	南	浅灰色 2.5Y7/3 に赤い褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
53	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	(8.0)	1.4	6.0	中や	中や	に赤い褐色 7.5YR7/3 明褐色 7.5YR5/6	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り	
54	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.4	1.6	6.8	南	南	に赤い黄褐色 10YR7/3 に赤い黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
55	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.5	1.3	6.7	中や	中や	に赤い褐色 7.5YR7/4 に赤い褐色 7.5YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
56	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	(8.1)	1.2	(6.2)	中や	南	浅黄褐色 10YR8/4 に赤い黄褐色 10YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
57	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	9.0	1.5	7.2	中や	中や	褐色 5YR7/6 褐色 5YR6/6	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁へら切り 右回転	
58	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	直径 8.4 厚径 8.0	1.3 ~ 1.25	6.6	南	南	褐色 5YR6/6 に赤い褐色 5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り 右回転 口径が正円ではなく楕円形	
59	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	(8.4)	1.4	5.8	南	南	灰褐色 7.5YR6/2 灰褐色 7.5YR6/2	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り 板目正座	
60	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.6	1.6	6	中や	南	浅黄褐色 7.5YR8/6 明赤褐色 7.5YR7/2	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り	
61	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	(9.0)	1.4	(6.8)	中や	中や	に赤い黄褐色 10YR7/3 に赤い黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り後ヘラ(磨) 状工具で ナデ	
62	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.6	1.5	6.3	中や	南	に赤い黄褐色 10YR7/3 に赤い黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り 板目正座	
63	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	8.8	1.4	6.8	中や	中や	に赤い褐色 7.5YR6/4 に赤い褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り 右回転 板目正座	
64	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	9.2	1.8	6.6	中や	南	に赤い黄褐色 10YR7/4 に赤い黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り	
65	25	11	SB01 (SP003)	土師器	皿	(8.9)	1.3	(5.6)	中や	中や	に赤い褐色 7.5YR7/4 に赤い褐色 7.5YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り	
66	25	11	SB01 (SP003)	土師器	碗	(16.8)	5.2	(6.3)	中や	南	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	口縁ナデ後ヘラミガキ 口縁ナデ後ヘラミガキ		
67	25	11	SB01 (SP003)	土師器	碗	(14.6)	5.0	(5.0)	中や	南	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	口縁ナデ後ヘラミガキ 口縁ナデ	扉部ナデ 船付け高台	
68	25	11	SB01 (SP003)	土師器	碗		(1.8)	(6.4)	南	中や	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 5YR8/2	口縁ナデ後ヘラミガキ 口縁ナデ後ヘラミガキ	扉部ナデ後ヘラミガキ	
69	25	11	SB01 (SP003)	土師器	杯	(16.2)	5.5	(9.8)	中や	中や	に赤い褐色 7.5YR6/4 に赤い褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	扉部口縁糸切り	

No.	種 別	出土地所	種別	器種	法量 (cm)		胎土	焼成	(内)		備考		
					口径 (断面径)	高さ (残石高)			色調	主な調整			
70	25	11	S801 SP003	土師器	杯	(13.8)	(4.1)	-	やや粗	且	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	同転ナデ後下位にヘラミガキ 同転ナデ	-
71	25	11	S801 SP003	土師器	杯	(14.0)	3.2	66.0	やや粗	且	黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	同転ナデ後ヘラミガキ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚
72	25	11	S801 SP003	土師器	杯	-	(2.1)	(8.0)	やや粗	且	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR6/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り
73	25	12	S801 SP003	土師器	杯	-	(2.9)	-	やや粗	且	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい褐色 7.5YR5/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り
74	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	(14.4)	3.35	4.2	やや粗	やや 粗	灰色 N5/、灰白色 N8/ 灰色 N4/、灰白色 N6/ 黒褐色 2.5Y3/1	横ナデ後上方向横方向のヘラミガキ ヨコナデ 指オサエヘラミガキ 横ナデ後上方向横方向の短文 ヨコナデ 指オサエ	底部フタミナデ ナデ 指オサエ
75	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	14.6	3.6	3.7	新	且	黒褐色 2.5Y3/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	横ナデ後上方向横方向の短文 ヨコナデ 指オサエ	底部フタミナデ 指オサエ
76	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	(15.2)	(3.6)	-	やや粗	且	灰色 N4/ 灰色 N4/、灰白色 N7/	横ナデ後上方向横方向の短文 ナデ 指オサエ	口縁から1.5cm下位に浅彫が施る 粘土 巻き上げ極薄
77	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	-	(1.8)	4.1	やや粗	且	灰色 N4/ 相灰色 N3/	ナデ後横方向のヘラミガキ ナデ 後指オサエ	底部高台に白ったナデ 指オサエ ナデ
78	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	-	(2.9)	-	新	且	灰色 N4/ 灰色 N4/	ナデ後指オサエ 指オサエナデ	-
79	25	12	S801 SP003	瓦器	椀	-	(2.7)	-	やや粗	且	灰色 N4/ 相灰黄色 2.5Y5/2	ナデ後ヘラミガキ 指オサエナデ	-
80	25	12	S801 SP003	白磁	皿	(10.4)	2.45	(5.0)	新	且	灰白色 5Y7/2 灰オリーブ色 5Y6/2	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へラケズリ
81	25	12	S801 SP003	土師質土 器	皿	-	(4.4)	-	粗	且	にぶい赤褐色 5YR5/3 黒褐色 5YR3/1	ヨコナデ後ハウ目 ヨコナデ後ハウ目	外面に黒、炭化物付着
82	25	12	S801 SP004	土師器	皿	(4.6)	1.3	7.0	新	且	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3	同転ナデ後横ハウ目 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚後、横方向 のナデ
83	25	12	S801 SP004	土師器	皿	8.4	1.5	6.8	新	且	にぶい褐色 5YR7/4 にぶい褐色 5YR7/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚 見込に凹面に白った指オサエナデ
84	25	12	S801 SP004	土師器	杯	(13.8)	3.6	-	やや粗	且	にぶい褐色 7.5YR6/3 相間灰色 7.5YR7/2	同転ナデ 同転ナデ	粘土ケス外面に付着
85	25	12	S801 SP004	瓦器	椀	-	(2.2)	-	新	且	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	ナデ後ミガキ ナデ	外面に指痕付着
86	25	12	S801 SP004	瓦器	椀	-	(3.4)	-	新	且	灰白色 2.5YR/1 灰白色 2.5YR/1	ナデ後ミガキ ナデ 中位下指オサエ	内面に短文 外面指痕付着
87	25	12	S801 SP004	青磁	皿	-	(1.6)	(4.7)	新	且	オリーブ黄色 7.5Y6/3 オリーブ黄色 7.5Y6/3	ヘラによる筋文 同転へラケズリ	発色良好
88	25	12	S801 SP005	土師器	皿	(7.8)	2.0	5.2	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 左1枚
89	25	12	S801 SP005	土師器	皿	(9.0)	1.7	(7.0)	やや粗	且	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚
90	25	12	S801 SP005	土師器	杯	13.4	3.9	7.3	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り 左1枚
91	25	12	S801 SP005	土師器	杯	-	(2.6)	(7.0)	やや粗	やや 粗	灰褐色 7.5YR6/2 にぶい褐色 7.5YR7/3	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り 同転方向不明
92	25	12	S801 SP005	瓦器	椀	-	(3.3)	-	新	且	相灰色 N/ 黄灰色 2.5Y4/1	横ナデ後横方向の短文 口縁下縁ナデ 体部下位指オサエ	-
93	26	12	S801 SP006	土師器	杯	-	(2.4)	(7.0)	やや粗	やや 粗	相灰色 7.5YR4/1 にぶい褐色 5YR6/3	同転ナデ 同転ナデ	底部磨滅 底部切り崩し法不明
94	26	12	S801 SP006	土師器	椀	-	(3.1)	-	新	且	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	同転ナデ 口縁下横ナデ後ミガキ 同転ナデ	環状口縁
95	26	12	S801 SP007	土師器	皿	(7.6)	2.1	(4.2)	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 左1枚
96	26	13	S801 SP007	土師器	皿	(7.6)	1.8	(4.6)	やや粗	やや 粗	黄褐色 7.5YR5/1 にぶい褐色 7.5YR6/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚
97	26	13	S801 SP007	土師器	皿	(8.8)	1.8	(6.4)	やや粗	且	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚
98	26	13	S801 SP007	須恵器	杯蓋	-	(1.3)	-	新	且	灰白色 N6/ 灰白色 N6/	同転ナデ 同転ナデ	-
99	26	13	S801 SP008	土師器	皿	(6.2)	1.65	(6.4)	新	且	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR7/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 左1枚
100	26	13	S801 SP008	瓦器	椀	-	(3.1)	-	新	且	灰黄褐色 10YR6/2 黄灰色 2.5Y4/1	ヨコナデ後短文 口縁下ヨコナデ 体部下位指オサエ	-
101	26	13	S801 SP009	土師器	皿	(8.8)	1.45	(6.0)	新	且	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り
102	26	13	S801 SP009	土師器	杯	(13.4)	(3.3)	-	やや粗	且	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	同転ナデ 同転ナデ	-
103	26	13	S801 SP009	土師器	杯	-	(1.5)	(7.2)	やや粗	やや 粗	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい褐色 7.5YR6/3	同転ナデ 同転ナデ	底部同転糸切り
104	26	13	S801 SP010	土師器	皿	(9.6)	1.7	(6.8)	新	且	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/4	同転ナデ 同転ナデ	底部同転へら切り 右1枚

No.	採 掘 区	出土地所	種別	部種	法量 (kg)			樹土	地成	(内)		備考	
					口徑 (直径)	深さ (埋存)	底径 (直径)			色調	主要調整		(内)
105	26	13	SB01 (SP011)	土師器	皿	(8.0)	1.6	(5.4)	やや粗	黒	灰白色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/3	同ホナデ	底面にへら切り 右回転
106	26	13	SB01 (SP013)	土師器	杯		(2.1)	8.8	細	黒	灰褐色 7.5YR6/2 灰褐色 7.5YR6/2	同ホナデ	底面に転末切り 右回転
108	26	13	SB01 (SP014)	古銅	輪		(2.3)		やや粗	黒	オリーブ黄褐色 5Y5/2 灰オリーブ色 5Y5/2	同ホナデ	内面に浅彫 2条 外面に浅彫と横目
109	26	13	SB01 (SP018)	土師器	皿	8.8	1.6	5.7	やや粗	黒	浅黄褐色 10YR8/4 浅黄褐色 10YR8/4	同ホナデ	底面にへら切り 右回転
110	26	13	SB01 (SP018)	土師器	皿	8.5	1.6	6.1	やや粗	黒	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	同ホナデ	底面にへら切り 左回転
111	26	13	SB01 (SP018)	土師器	皿	(8.6)	1.3	5.4	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	同ホナデ	底面にへら切り 左回転
112	26	13	SB01 (SP018)	土師器	杯	(13.4)	3.8	9.4	やや粗	黒	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	同ホナデ	底面に転末切り
113	26	13	SB01 (SP018)	土師器	杯	(13.8)	3.0	(7.0)	やや粗	黒	靑灰色 7.5YR4/1 にぶい褐色 7.5YR7/3	同ホナデ	底面縁方向のへら切り
114	26	13	SB01 (SP018)	瓦器	輪		(1.6)	3.8	細	黒	灰色 N5/ 灰色 5Y5/1	ナサ後堀文 敷オサエ	脇付け高台
115	26	13	SB01 (SP019)	土師器	杯	14.5	3.7	6.7	細	黒	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	同ホナデ	底面に転末切り
116	26	13	SB01 (SP019)	土師器	杯	(13.8)	3.9	(7.4)	やや粗	黒	褐色 7.5YR7/6 浅黄褐色 7.5YR8/6	同ホナデ	底面に転末切り
117	26	13	SB01 (SP019)	古銅	輪		2.9		細	黒	灰オリーブ色 7.5Y5/2 灰オリーブ色 7.5Y5/2	同ホナデ	.
118	26	13	SB01 (SP020)	土師器	皿	8.4	1.6	(5.6)	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4	同ホナデ	底面にへら切り 回転方向不明
119	26	14	SB01 (SP021)	土師器	輪か杯	(15.0)	(3.6)		やや粗	やや 粗	灰白色 2.5Y7/2 灰白色 10YR8/2	同ホナデ	底面に後へらミガキ
120	26	13	SB01 (SP023)	土師器	皿	8.2	1.6	5.7	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	同ホナデ	底面にへら切り 右回転
121	26	13	SB01 (SP023)	土師器	皿	8.4	1.4	6.5	やや粗	やや 粗	灰褐色 7.5YR6/2 にぶい褐色 7.5YR6/4	同ホナデ	底面にへら切り 回転方向不明
122	26	14	SB01 (SP023)	土師器	杯	(14.4)	4.8	(8.0)	細	黒	明褐色 7.5YR7/2 褐色 5YR6/6	同ホナデ	底面に転末切り
123	26	14	SB01 (SP023)	土師器	杯		(2.0)	(6.0)		黒	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	同ホナデ	底面に転末切り
124	26	14	SB01 (SP023)	土師器	杯		(1.5)	7.1	やや粗	黒	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/3	同ホナデ	底面に転末切り
125	26	14	SB01 (SP023)	瓦器	輪	(14.3)	3.55	(3.6)	やや粗	黒	灰白色 2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1	ミガキ 同ホナデ	脇付け高台
126	26	14	SB01 (SP023)	瓦器	輪	(13.0)	(2.9)		やや粗	黒	黒色 7.5Y2/1 靑灰色 N3/ 靑灰色 N3/	同ホナデ	ヨコナデ後へらミガキ 敷オサエ ナデへらミガキ
127	26	14	SB01 (SP023)	土師器	輪		6.0		細	黒	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	同ホナデ	底面に後へらミガキ 見込はへらミガキ
128	27	14	SB05 (SP113)	土師器	杯	(14.7)	3.5	(7.9)	やや粗	黒	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	同ホナデ	底面に転末切り
129	27	14	SB05 (SP114)	土師器	杯	13.2	3.5	6.3		粗	褐色 7.5YR7/6 にぶい褐色 7.5YR7/4	同ホナデ	底面に転末切り
130	27	14	SB05 (SP184)	土師器	杯		(2.5)	(8.0)	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	同ホナデ	底面に転末切り 回転方向不明
131	27	14	SB05 (SP157)	土師器	皿	(8.0)	1.3	(5.6)	やや粗	粗	にぶい褐色 7.5YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/4	同ホナデ	底面にへら切り 右回転 先端部ツマミ上げ
132	27	14	SB05 (SP187)	土師器	皿	8.9	1.7	6.7	やや粗	やや 粗	褐色 5YR6/6 にぶい褐色 5YR6/4	同ホナデ	底面にへら切り 左回転
133	27	14	SB05 (SP187)	土師器	皿	8.6	1.3	5.5	やや粗	やや 粗	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	同ホナデ	底面にへら切り 右回転
134	27	14	SB05 (SP187)	土師器	皿	(8.0)	1.7	(6.4)	やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4	同ホナデ	底面にへら切り 右回転
135	27	14	SB05 (SP187)	土師器	皿	(8.0)	1.4	(6.6)	細	やや 粗	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6	同ホナデ	底面にへら切り 左回転
136	27	14	SB05 (SP187)	土師器	皿	8.2	1.4	6.1	やや粗	やや 粗	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6	同ホナデ	底面に転末切り 転目付痕
137	27	14	SB05 (SP187)	土師器	杯	(13.8)	(3.7)		やや粗	やや 粗	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2	同ホナデ	
138	27	14	SB05 (SP187)	土師器	杯		(2.7)		やや粗	やや 粗	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	同ホナデ	
139	27	14	SB05 (SP187)	瓦器	輪		(3.2)		やや粗	やや 粗	灰白色 2.5Y7/1 灰色 N4/	ヨコナデ ヨコナデ	下掘敷オサエ
141	27	14	SB05 (SP188)	土師器	皿	8.2	1.5	6.2	やや粗	粗	明赤褐色 2.5YR5/6 にぶい褐色 5YR6/3	同ホナデ	底面にへら切り 左回転
142	27	14	SB05 (SP188)	土師器	皿	(8.6)	1.3	6.7	やや粗	粗	灰褐色 7.5YR6/2 灰黄褐色 10YR5/2	同ホナデ	底面縁にナデ 左回転

No.	種別	河川	出土場所	種別	器種	寸法 (cm)			出土	焼成	色調 (内)	主な調整 (内)	備考
						口径 (厚元端)	高さ (現存値)	底径 (厚元端)					
143	27	14	S005 SP188	土師器	皿	(7.6)	1.5	7.2	中や箱	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/4 にぶい-褐色 7.5YR7/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
144	27	14	S005 SP188	土師器	皿	8.0	1.3	6.7	中や箱	黒	灰褐色 7.5YR6/2 褐色 7.5YR5/1	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
145	27	14	S005 SP188	土師器	皿	(8.4)	1.1	4.4	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/4 にぶい-褐色 7.5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り
146	27	14	S005 SP188	土師器	杯	(11.8)	3.5	(4.8)	煎	黒	にぶい-褐色 5YR6/6 にぶい-赤褐色 5YR5/4	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り
147	27	14	S005 SP188	土師器	杯	(14.0)	3.0	-	中や箱	黒	にぶい-黄褐色 10YR6/3 にぶい-黄褐色 10YR6/3	同軸ナデ 同軸ナデ	-
148	27	14	S005 SP188	瓦器	輪	(13.0)	2.1	-	中や箱	黒	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 2.5Y6/1	横ナデ 川面に引ったナデ 指オサエ	横ナデ後縁方向の順文 川面に引ったナデ 指オサエ
149	27	15	S005 SP188	瓦器	皿	(7.6)	1.5	2.8	煎	中や 黒	にぶい-黄褐色 10YR7/2 にぶい-黄褐色 10YR7/2	横ナデ 横ナデ 指オサエ	底面横ナデ 指オサエ
150	27	15	S005 SP188	土師瓦土 器	目蓋	-	(4.2)	-	中や箱	黒	褐色 7.5YR5/1 灰褐色 7.5YR6/2	ヨココナ 川面に引ったナデ	ヨココナ
151	27	15	S005 SP195	土師器	杯	-	(1.3)	(6.8)	煎	黒	にぶい-黄褐色 10YR7/3 にぶい-黄褐色 7.5YR7/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 外面一部黄変
152	27	15	S005 SP195	土師器	羽蓋か	-	(7.1)	-	中や箱	中や 黒	褐色 5YR7/6 褐色 5YR6/6	ハナ目 指オサエ	外面内以下保存
153	27	15	S005 SP197	瓦	平瓦	-	-	厚さ 2.3	中や箱	中や 黒	にぶい-黄褐色 10YR7/2 にぶい-褐色 7.5YR7/4	布目織 横目タタキ	横目タタキ
154	27	15	S005 SP211	土師器	皿	9.8	1.3	(7.6)	煎	黒	にぶい-赤褐色 5YR5/4 にぶい-褐色 5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	-
155	27	15	S005 SP211	土師器	皿	9.2	1.6	(6.2)	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR7/3 にぶい-黄褐色 10Y7/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り
156	27	15	S005 SP227	土師器	杯	-	(1.9)	-	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR7/3 にぶい-褐色 7.5YR7/2	同軸ナデ 同軸ナデ	-
157	27	15	S005 SP245	土師器	杯	12.9	3.5	7.8	中や箱	黒	にぶい-褐色 7.5YR7/6 褐色 5YR7/6	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
158	27	15	S005 SP237	土師器	皿	9.0	1.4	3.4	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/3 にぶい-褐色 7.5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転 焼成時ののみみ
159	27	15	S005 SP237	土師器	皿	8.0	1.0	(3.2)	煎	中や 黒	灰褐色 7.5YR5/2 灰黄褐色 10YR6/2	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
160	27	15	S005 SP237	土師器	皿	-	(1.7)	(7.6)	煎	中や 黒	灰白色 10YR8/2 灰黄褐色 10YR6/2	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転後縁付高行
161	27	15	S005 SP237	土師器	杯	-	(3.3)	-	中や箱	中や 黒	灰褐色 7.5YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2	同軸ナデ 同軸ナデ	-
162	27	15	S005 SP237	瓦器	輪	(14.0)	3.5	(3.8)	中や箱	黒	灰白色 10YR7/1 灰色 N5/1	へらさき 古断面有り ハナ目 へらさき 断面有り	口縁ヨココナ付 唇付付高行 (輪部ともにはまらない)
163	28	15	S002 SP129	瓦器	輪	(13.5)	(3.5)	-	中や箱	黒	灰色 N4/ 灰色 N4/	ヨココナ 順文 口縁部ヨココナ 以下指オサエ	-
164	28	15	S002 SP136	土師器	皿	7.4	1.6	3.7	中や箱	黒	にぶい-褐色 5YR7/4 にぶい-褐色 5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
165	28	15	S002 SP152	土師器	皿	7.5	1.8	5.3	煎	黒	にぶい-黄褐色 10YR6/3 灰褐色 7.5YR6/2	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
166	28	15	S002 SP229	土師器	皿	9.4	1.4	(7.8)	煎	黒	にぶい-褐色 5YR6/3 にぶい-褐色 5YR6/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転 数目圧痕
167	28	15	SP222	土師器	輪	-	(1.3)	(6.6)	煎	中や 黒	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/2	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転後縁付高行
168	28	15	S002 SP229	土師器	杯	(13.4)	(2.4)	-	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/3 灰褐色 7.5YR6/2	同軸ナデ 同軸ナデ	-
170	28	15	S006 SP034	土師器	皿	(7.8)	1.3	(5.0)	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/4 にぶい-褐色 7.5YR7/4	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り
171	28	15	S006 SP034	土師器	皿	9.0	1.0	(4.9)	中や箱	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/3 にぶい-褐色 5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	-
172	28	15	S006 SP034	土師器	杯	-	(2.1)	(6.8)	中や箱	黒	にぶい-褐色 7.5YR7/3 にぶい-褐色 7.5YR6/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り
173	28	15	S006 SP034	瓦器	輪	-	(1.1)	(3.8)	中や箱	黒	褐色 10YR5/1 褐色 10YR5/1	ナデ 上・下縁方向の順文 ナデ 指オサエ	-
174	28	15	S006 SP038	土師器	皿	9.0	1.3	(3.7)	煎	黒	にぶい-褐色 5YR7/4 褐色 5YR7/6	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
175	28	15	S006 SP039	土師器	皿	8.1	(1.2)	(6.6)	煎	黒	にぶい-褐色 7.5YR6/3 褐色 7.5YR5/1 明褐色 7.5YR7/2	同軸ナデ 同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 左回転 内部に保存着 右明部か
176	28	15	S006 SP041	土師器	皿	8.0	1.35	(5.6)	中や箱	黒	明褐色 7.5YR7/2 にぶい-褐色 7.5YR7/3	同軸ナデ 同軸ナデ	底面のへら切り 右回転
179	28	16	S007 SP163	土師器	皿	18.8	3.0	(7.0)	煎	黒	にぶい-褐色 5YR6/4 にぶい-褐色 7.5YR6/4	同軸ナデ 同軸ナデ	-
180	28	16	S007 SP163	青磁	輪	(15.6)	6.1	(5.0)	煎	黒	灰土 灰白色 5Y7/1 輪: オリーブ色 5Y5/4	同軸ナデ 同軸ナデ へらケズリ	唇付露体 ケズリ出し高台 内外面焼
181	28	16	S007 SP163	白磁	西川面 又は双 耳蓋	-	(26.2)	(7.2)	煎	黒	灰土 灰白色 2.5YR4/1 輪: 灰白色 5Y7/1	内外面同軸ナデ 断面割製にたい内角 台がつく 内外面焼	底面ケズリ出し高台

No.	排 取	出土地所	種別	器種	寸法 (cm)			粘土	地蔵	色調	(内)	(外)	備考
					口径 (底元値)	高さ (残存値)	底径 (底元値)						
182	29	16	SB03 (SP067)	土師器	杯	11.4φ	4.6	-	やや粗	やや 色	黒灰色 10YR4/1 灰青褐色 10YR5/2	口縁ナデ 口底ナデ	-
183	29	16	SB03 (SP270)	東海系土 器	古石鉢 カマ	-	3.5	-	やや粗	黒 色	黒色 5Y7/1 灰色 5B7/1	口縁ナデ 口底ナデ	-
184	29	16	SB03 (SP270)	土師器	蓋	20.4φ	2.5	-	やや粗	黒	黒褐色 10YR3/1 にふい黄褐色 10YR6/3	口縁ナデ 口底ナデ	古代土器の蓋 ツマミの形不明 破部 分の形不明
185	29	16	SB03 (SP280)	土師土器	皿	23.0φ	4.6	-	やや粗	黒	黒褐色 10YR3/1 黒色 10YR2/1	口底ナデ 口底ナデ	-
186	29	16	SB04 (SP080)	白磁	椀	-	4.4	-	やや粗	黒	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	口縁ナデ 口底ナデ	-
187	29	16	SB04 (SP104)	土師土器	皿	-	4.0	-	やや粗	黒	にふい褐色 7.5YR6/3 にふい褐色 7.5YR6/3	口底ナデ 口底ナデ	外面に灰化層付着
188	29	16	SB04 (SP104)	瓦質土器	目皿	-	9.8	-	やや粗	黒	灰白色 2.5Y8/1 黄灰色 2.5Y6/1、黒色 2.5Y3/1 + 灰化層	胎オサエ、口底ナデか 口底ナデ	-
189	29	16	SB08 (SP075)	縄文土器	深鉢	-	3.0	-	やや粗	黒	黒色 7.5YR2/1 灰褐色 7.5YR5/2	口縁ナデ 口底ナデ	口縁基部を有す 口縁基部 胎付け突部に断面三角形の 痕
190	29	16	SB08 (SP068)	土師器	皿	7.0	1.9	4.2	滑	黒	にふい褐色 7.5YR7/4 にふい褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
191	29	16	SB09 (SP090)	土師器	皿	10.0φ	1.6	0.6φ	やや粗	やや 色	にふい褐色 7.5YR6/4 にふい褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着か 内面に植物有機物付着
192	29	16	SB09 (SP090)	土師器	椀	-	2.6	-	滑	黒	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	口縁部は口底ナデ 以下内面ミガキか 口底ナデ	外面灰化層付着
193	29	16	SB09 (SP090)	土師土器	皿	長さ 5.8	幅 1.8	厚さ 1.7	やや粗	黒	にふい褐色 7.5YR6/4 手取ね (胎オサエ)	口底ナデ 口底ナデ	一部黒変
194	30	16	SK19	赤土土器	甕	-	3.2	-	滑	黒	黒褐色 7.5YR3/3 暗赤褐色 5YR3/4	ハケ目ナデ ハケ目後ヘラミガキ ナデ	口縁部はナデ 裏面上げ口縁
195	30	16	SK05	土師器	皿	7.8φ	1.2	0.2φ	滑	黒	にふい褐色 5YR7/3 にふい褐色 5YR6/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
196	30	16	SK05	土師器	皿	8.8φ	1.3	0.8φ	滑	黒	にふい褐色 5YR7/4 にふい褐色 7.5YR7/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
197	30	17	SK05	土師器	皿	9.4φ	1.6	7.6	やや粗	黒	にふい褐色 7.5YR6/4 にふい黄褐色 10YR7/2	胎、口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
198	30	17	SK05	土師器	皿	8.6	1.4	6.2	やや粗	黒	にふい褐色 5YR7/3 にふい褐色 5YR7/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
199	30	17	SK05	白磁	椀	-	4.8	-	滑	黒	灰白色 5Y7/2 灰白色 5Y7/1	口縁ナデ 胎輪 口底ナデ 胎輪	-
200	30	17	SK07	土師器	杯	-	1.6	0.8φ	やや粗	黒	にふい褐色 7.5YR6/3 にふい褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
201	30	17	SK01	土師器	皿	8.4	1.7	6.6	やや粗	黒	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
202	30	17	SK01	土師器	皿	7.8	1.7	6.1	やや粗	黒	にふい黄褐色 10YR6/2 灰青褐色 10YR6/2	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 左口縁 内面赤褐色層しい
203	30	17	SK01	土師器	皿	8.5	1.7	4.8	やや粗	黒	浅黄褐色 2.5Y7/3 にふい黄褐色 10Y7/4	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
204	30	17	SK01	土師器	皿	8.2φ	1.8	6.4φ	やや粗	黒	にふい黄褐色 7.5YR7/3 灰褐色 7.5YR6/2	口縁ナデ 口底ナデ	底面へら切り 右口縁
205	30	17	SK01	土師器	皿	-	1.65	0.4φ	滑	やや 色	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい褐色 7.5YR7/3	口縁ナデか 口底ナデ	底面に灰化層付着
206	30	17	SK01	土師器	皿	8.2	1.7	5.5	やや粗	黒	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい黄褐色 10YR7/4	胎、口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁 胎目直縁
207	30	17	SK01	土師器	皿	8.0	1.3	5.7	やや粗	黒	にふい褐色 7.5YR7/3 にふい黄褐色 10YR6/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 左口縁
208	30	17	SK01	土師器	皿	7.8	1.4	5.9	滑	黒	にふい黄褐色 10YR7/2 にふい褐色 7.5YR7/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 左口縁 内面赤褐色層しい
209	30	17	SK01	土師器	皿	7.8	1.7	5.8	やや粗	やや 色	黒灰色 10YR5/1 黒灰色 10YR4/1	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
210	30	17	SK01	土師器	皿	7.9	1.6	5.7	やや粗	黒	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
211	30	17	SK01	土師器	皿	7.2φ	1.1	0.8φ	滑	黒	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着 右口縁
212	30	17	SK01	土師器	杯	-	1.2	0.6φ	滑	やや 色	黄灰色 2.5Y5/1 黄褐色 2.5Y6/2	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
213	30	17	SK01	土師器	杯	-	1.0	0.8φ	やや粗	やや 色	黒灰色 5YR6/1 黒灰色 7.5YR6/1	口縁ナデ 口底ナデ	底面に灰化層付着
214	30	17	SD01	瓦質土器	皿	-	0.9	-	やや粗	やや 色	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/2	口縁部口底ナデ 以下ハケ目後ナデ 口縁部口底ナデ 以下ハケ目後ナデ 胎 オサエ	ハケ目単位 10 本以上 内面に植物有機物 胎付着
216	30	17	SD03	瓦質土器	高足か	-	0.9	-	やや粗	やや 色	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/1	口縁部口底ナデ 以下ハケ目 胎オサエ後ハケ目 ナデ	内面に穿孔、穿孔、下に把手(痕)

No	緯度	経度	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			出土	構成	色調 (G)	主な調整 (内)	備考	
						口径 (最大値)	器高 (最大値)	底径 (最大値)						
217	30	17	SD03	瓦葺土器	鍋			(11.3)	やや密 やや良	黒い・黒褐色 10YR7/3 灰褐色 7.5YR4/2	口縁部ハケ目後ナデ 体部下部黒オシ 工後ナデ 口縁部ヨコナデ 体部前オサエ	外面に埋付着		
218	30	18	SD03	瓦葺土器	鍋 (足縁)			(11.4)	やや密	黒い・褐色 7.5YR6/3	指オサエ、ハケ目	器底(体部接合部付近に埋付着)		
219	30	18	SD03	土師瓦土器	鍋 (足縁)			長さ (13.4)	やや密	黒い・黒褐色 10YR6/3	指オサエ	内部に7本以上の鉄目		
220	30	18	SD03	陶器	鉢鉢			(4.1)	やや密	灰色 N6 黒褐色 2.5Y6/1	ナデ 鉄目 ナデ 指オサエ	底部外面磨光 磨面粗		
221	30	18	SD04	白磁	椀			(2.0)	やや密	灰白色 10YR/1 灰白色 10YR/1	回転ナデ 磨面 回転ナデ 磨面			
223	30	17	SD05	土師瓦土器	鍋	(22.0)		(6.2)	密	灰褐色 10YR6/2 黒い・黒褐色 10YR7/2	ヨコナデ後細かハケ目 ヨコナデ後ヘラミガキ			
225	31	18	SP047	赤生土器	皿			(5.0)	やや密 やや良	黒い・褐色 7.5YR6/3 黒い・赤褐色 5YR5/4	口縁ハケ目後ミガキか 以下ケズリ 粗ハケ目			
226	31	18	SP047	赤生土器	高坪			(6.7)	やや密	黒い・褐色 7.5YR6/4 黒い・褐色 7.5YR7/4	ハケ目 ケズリ			
227	31	18	SP238	赤生土器	皿			(3.3)	やや密	黒い・褐色 5YR6/4 黒い・赤褐色 5YR5/4	ヘラズリ後ナデ 指オサエ ヨコナデ	九州系の口縁 指縁粗直		
228	31	18	SP061	赤生土器	甕			(7.5)	(6.2)	粗 やや良	黒色 5Y2/1 褐色 5YR6/6	表面磨面のため不明 ハケ目後ヘラミガキ		
229	31	18	SP061	赤生土器	甕			(3.4)	やや密	黒い・赤褐色 5YR5/3 黒い・褐色 7.5YR6/3	ヨコナデ後ハケ目 ナデ ヨコナデ後ハケ目 ナデ			
230	31	18	SP102	赤生土器	甕			4.7	やや粗	黒褐色 7.5YR6/1 黒い・褐色 7.5YR6/4	ヨコナデ ヘラミガキ ヨコナデ ヘラミガキ ハケ目			
231	31	18	SP102	土師器	皿	7.9	1.2	6.0	密	良	黒い・褐色 5YR7/4 褐色 5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄系切りか 鉄目直縁	
232	31	18	SP178	土師器	鉢	(16.7)		(2.7)		密	良	褐色 7.5YR6/6 褐色 7.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	
233	31	18	SP178	土師器	皿	(8.0)	1.9	(6.4)	やや粗	良	褐色 7.5YR6/6 褐色 7.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 左回転	
234	31	18	SP178	土師器	皿	(9.4)	1.3	(7.8)	やや密	良	黒い・褐色 7.5YR6/4 黒い・赤褐色 5YR5/4	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 左回転	
235	31	18	SP178	土師器	皿	(8.8)	1.15	6.8	やや密	良	黒い・褐色 7.5YR7/3 灰褐色 7.5YR6/2	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 左回転	
236	31	18	SP178	土師器	椀	(15.2)	4.39		やや密	良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	回転ナデ後ヘラミガキ 回転ナデ		
237	31	18	SP178	土師器	鉢	(17.2)	5.5		やや密	良	黒い・褐色 7.5YR6/3 黒い・褐色 7.5YR7/3	回転ナデ 回転ナデ		
238	31	18	SP239	土師器	甕			(3.0)	やや密 やや良	黒い・赤褐色 5YR5/3 褐色 5YR6/6	ヘラズリヨコナデ ヨコナデ	外面下部に凹陥		
239	31	18	SP239	土師器	皿	(8.7)	1.75	6.2	やや密	良	黒い・褐色 10YR7/3 黒い・褐色 7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄系切り	
240	31	18	SP223	土師器	皿	8.7	1.6	6.5	密	良	黒い・褐色 7.5YR6/4 黒褐色 7.5YR2/2	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	
241	31	18	SP223	土師器	皿	7.4	1.3	5.8	やや密	良	黒い・褐色 7.5YR6/3 黒い・褐色 7.5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	
242	31	18	SP223	土師器	皿	(8.2)	1.7	(6.0)	やや密	良	黒い・褐色 7.5YR6/3 黒い・褐色 7.5YR6/4	回転ナデ後磨止ナデ(中央部) 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	
243	31	18	SP223	土師器	椀	(15.4)	(3.8)		密	良	浅黄褐色 10YR8/4 灰白色 7.5YR8/2	回転ナデ 回転ナデ		
244	31	18	SP223	瓦葺	椀			(2.3)	密	良	灰白色 2.5YR7/1 灰色 N4/	口縁部回転ナデ 下部ヘラミガキ 口縁部回転ナデ 下部指オサエ、ヘラ ミガキ		
245	31	18	SP223	白磁	椀			(2.0)	密	良	灰オリーブ色 5Y6/2 灰オリーブ色 5Y6/2	回転ナデ 回転ナデ	両面とも磨面	
246	31	19	SP096	土師器	皿	9.5	2.1	6.1	やや密 やや良	黒い・褐色 7.5YR7/4 黒い・褐色 7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄系切り 右回転		
247	31	19	SP139	土師器	皿	9.4	1.4	5.5	密	良	黒い・褐色 7.5YR7/4 黒い・褐色 7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	
248	31	19	SP207	土師器	皿	(8.0)	0.9	(6.0)	やや密	良	褐色 5YR6/6 黒褐色 7.5YR5/6	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	
249	31	19	SP207	土師器	皿	8.35	1.0~1.5	4.9	密	良	黒い・赤褐色 10YR7/2 黒い・赤褐色 10YR7/3	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転 口クロ成形後に口内磨出し 磨面	
250	31	19	SP224	土師器	皿	(8.4)	1.6	(5.4)	密	良	黒い・褐色 7.5YR7/3 黒い・褐色 5YR6/3	回転ナデ 回転ナデ	底部 回転ヘラ切りか?	
251	31	19	SP226	土師器	皿	7.7	1.4	4.9	密	良	明褐色 5YR7/2 黒い・褐色 7.5YR6/3	回転ナデ 見込み磨止ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転 切り磨し時底部に段差 一部穴が開く	
252	31	19	SP251	土師器	皿	(8.8)	1.3	(5.0)	やや密	良	黒い・褐色 7.5YR7/4 黒い・褐色 7.5YR6/4	回転ナデ 回転ナデ	底部鉄ヘラ切り 右回転	



No.	種別	出土地所	種別	器種	法量 (cm)			新土	焼成	(内)		備考		
					口径 (最大値)	高さ (最大値)	底径 (最大値)			色調 (色)	主な調整 (色)			
253	31	19	SP251	土師器	皿	8.4	1.4	3.8	やや粗	灰	にぶい黄褐色 10YR6/3 灰青褐色 10YR6/2	口縁ナデ 口縁ナデ	底面はへら切り右丸底	
254	31	19	SP253	土師器	皿	-	0.8	07.0	やや粗	灰	にぶい黄褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	底面はへら切り大丸底	
255	31	19	SP137	白磁	皿	09.2	1.0	14.4	新	良	灰青褐色 5YR6/4 灰青褐色 7.5YR6/2	口縁ナデ 口縁ナデ	足元の輪を軸に掻き取り	
256	31	19	SP174	白磁	皿	10.0	2.3	-	新	良	灰土・灰白色 10YR7/1 輪・明褐色 7.5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	内外面無釉 軸は青白色を呈す	
257	31	19	SP221	土師器	椀	10.9	4.5	6.2	新	良	灰青褐色 7.5YR6/4 灰青褐色 10YR8/4	口縁ナデ 口縁ナデ	口縁ナデ後上方のへらミガキ 底面は赤切り後ナデ へらミガキ	
258	31	19	SP235	土師器	椀	116.2	4.7	6.6	やや粗	やや良	灰褐色 7.5YR8/3 灰褐色 7.5YR8/6	口縁ナデ 口縁ナデ	口縁ナデ後縁ナデ中央に流溝有り 底面はへら切り右丸底流溝付高台	
259	31	19	SP181	土師器	椀	116.0	4.1	-	新	良	灰褐色 10YR6/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	口縁ナデ 口縁ナデ	口縁ナデ後へらミガキ 高径差が大きい	
260	31	19	SP165	土師器	椀	-	2.9	07.0	新	良	灰白色 7.5YR8/2 灰白色 7.5YR8/2	口縁ナデ 口縁ナデ	口縁ナデ後へらミガキ 口縁ナデ後指オサエ	
261	31	19	SP252	土師器	杯	114.0	4.6	6.6	新	良	にぶい黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁ナデ 口縁ナデ	底面は赤切り	
262	31	19	SP165	瓦器	椀	112.8	2.4	-	やや粗	良	灰色 N4/ 灰色 N4/	口縁ナデ 口縁ナデ	丁字ナヨコナデ後右方向の略文 指オサエ 軸ナデ	
263	31	19	SP131	瓦器	椀	114.4	3.8	-	やや粗	良	灰白色 10YR8/1 灰色 5Y5/1	口縁ナデ 口縁ナデ	へらミガキ後右上方の略文 口縁部ヨコナデ 胴部指オサエ	
264	32	19	SP135	瓦器	椀	114.4	4.3	-	やや粗	良	灰褐色 10YR6/1 青灰色 5P8.5/1	口縁ナデ 口縁ナデ	丁字ナヨコナデ後右方向の略文 口縁部ヨコナデ 胴部指オサエ	
265	32	19	SP141	瓦器	椀	112.5	3.2	-	やや粗	良	灰色 N4/ 灰色 N5/	口縁ナデ 口縁ナデ	丁字ナヨコナデ後右上方の略文 口縁部ヨコナデ 下位指オサエ	
266	32	19	SP156	瓦器	椀	114.4	3.7	-	やや粗	良	灰白色 N8/ 灰色 N4/	口縁ナデ 口縁ナデ	丁字ナヨコナデ後右方向の略文 口縁部ヨコナデ 下位指オサエ	
267	32	20	SP285	土師四土器	罎	121.4	4.7	-	新	良	灰褐色 5YR4/1 明褐色 5YR7/1	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ後ハク目 ナデ ヨコナデ 胴部強いヨコナデ	-
268	32	20	SP216	土師四土器	罎	-	2.1	10.4	やや粗	やや良	灰白色 2.5Y7/1 にぶい黄褐色 10YR7/2	口縁ナデ 口縁ナデ	ハク目 胴部厚縁不明	内部に覆付着 底面の底面より上に覆付着
269	32	19	SP298	土師四土器	罎	-	4.9	-	やや粗	やや良	にぶい褐色 7.5YR6/4 黒色 7.5YR 1.7/1	口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ	以下ハク目 胴部ヨコナデ 体部指オサエ	外部に覆付着
270	32	20	SP302	土師四土器	罎	137.4	13.7	29.8	やや粗	良	明赤褐色 2.5YR3/2 黒褐色 7.5YR3/1	口縁ナデ 口縁ナデ	指オサエ ヨコナデ 指オサエ ヨコナデ	底面指オサエ ナデハク目 東院防置のみ
271	32	20	SP302	土師四土器	足罎	-	7.7	-	やや粗	良	にぶい褐色 7.5YR6/3 灰褐色 7.5YR5/2	口縁ナデ 口縁ナデ	指オサエ ナデ 指オサエ ナデ	-
272	32	20	SP295	土師四土器	足罎	直径 2.0	高さ 11.2	-	やや粗	良	にぶい黄褐色 10YR7/3	口縁ナデ	胴部直縁 粘土シワ	-
273	32	20	SP302	瓦四土器	罎	120.0	3.7	-	新	良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y6/1	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ後細いハク目 ヨコナデ 指オサエ ナデ	-
274	32	20	SP062	瓦四土器	罎	-	4.35	-	やや粗	良	黄灰色 2.5Y6/1 明黄褐色 2.5Y6/2	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ後ハク目 指オサエ ナデ	内部全体に覆付着
275	32	20	SP268	瓦四土器	罎	-	4.6	-	新	良	灰褐色 7.5YR5/1 黒褐色 7.5YR3/2	口縁ナデ 口縁ナデ	ハク目後丁字ナデ ハク目後丁字ナデ	胴部に強い指ナデ
276	32	20	SP278	瓦四土器	罎	-	3.7	-	新	やや良	黄灰色 2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y4/1	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ後ハク目 ヨコナデ	-
277	32	20	SP194	瓦四土器	鉢	-	4.6	-	やや粗	やや良	灰白色 2.5Y7/1 黄灰色 2.5Y6/1	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ ヨコナデ	-
278	32	20	SP143	赤褐色須恵器	鉢	120.0	4.1	-	やや粗	良	灰白色 2.5Y7/1 黄灰色 2.5Y6/1	口縁ナデ 口縁ナデ	口縁ナデ 口縁ナデ	-
283	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	15.3	-	粗	やや良	明赤褐色 2.5YR3/1 赤色 10R4/8	口縁ナデ 口縁ナデ	胴部割縁につき不明 胴部へ胴部にミガキ残る	胴部二段の浅縁
284	33	20	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	3.5	-	やや粗	やや良	褐色 7.5YR7/6 にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ 口縁縁部はつまみ上げコナデ	大形壺 幅広の垂下口 鉢型文
285	33	20	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	6.4	-	やや粗	やや良	灰褐色 7.5YR5/2 にぶい褐色 7.5YR7/4	口縁ナデ 口縁ナデ	へらミガキ へらミガキ	内部に灰面附
286	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	8.4	-	細部	やや粗	にぶい赤褐色 5YR3/4 明赤褐色 5YR5/6	口縁ナデ 口縁ナデ	ハク目後細いへらミガキ ハク目後へらミガキ	胴部に灰面附 5本以上
287	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	9.8	3.0	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 10YR7/3 褐色 5YR7/6	口縁ナデ 口縁ナデ	へらミガキ 胴部割縁のため不明	内部黒炭皮、外面赤成部有す 赤形
288	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	18.0	3.7	やや粗	良	明赤褐色 5YR5/6 灰褐色 5YR4/2	口縁ナデ 口縁ナデ	指オサエ 強いナデ 上位：指オサエ タタキナデ 下位：指オサエ 上方のへらケヅリ	底面に 2.4 × 1.3cmの白色石埋め込み 胴部割縁に欠いたか
289	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	4.0	14.2	新	良	灰褐色 7.5YR5/2 にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁ナデ 口縁ナデ	ヨコナデ 指オサエ ナデ	胴部内部に轉瓦工による穴 ミニチュア土器
290	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	6.4	15.0	やや粗	良	にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい褐色 5YR6/4	口縁ナデ 口縁ナデ	指オサエ ナデ へらミガキ 指オサエ 壺ナデ ハク目	底面指オサエナデ
291	33	21	遺物保管庫	赤生土器	壺	-	4.0	3.4	新	良	にぶい褐色 5YR6/4 褐色 5YR6/6	口縁ナデ 口縁ナデ	指オサエ 丁字ナデ 指オサエ ナデ	-

No.	種別	国産	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			出土	構成	色調	(内)	(内)	備考		
						口径 (最大径)	高さ (残存径)	底径 (最大径)								
292	33	21	遺物包含層	赤生土層	壺	-	5.4	0.8	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR7/4 黄褐色 10YR2/3	黒面陶質により不明 ヘラミガキ	-			
293	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	16.4	13.8	-	や中層	良	褐色 7.5YR6/6 褐色 5YR6/6	ココナデ 赤オサエ ナデ ハケ目	-			
294	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	(18.0)	6.9	-	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR6/4 赭灰色 5YR4/1	黒面陶質により不明 ハケ目	-			
295	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	-	4.9	5.2	や中層	良	にぶい・褐色 5YR6/4 にぶい・褐色 5YR6/4	ココナデ後上方向のヘラミガキ ココナデ後上方向のヘラミガキ	-	一部黒面		
296	33	21	遺物包含層	赤生土層	小型甕	-	8.4	3.6	や中層	良	明赤褐色 5YR3/6 明赤褐色 5YR5/6	赤オサエ ナデ ハケ目 赤オサエ ナデ ハケ目	-	底面軽いナデ		
297	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	-	4.6	16.6	や中層	良	にぶい・黄褐色 10YR7/3 にぶい・褐色 7.5YR7/4	赤オサエ ナデ ハケ目 赤オサエ ナデ ハケ目	ヘラミガキ	-		
298	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	-	4.3	6.4	や中層	良	にぶい・赤褐色 5YR5/4 にぶい・赤褐色 5YR4/3	赤オサエ ナデ ハケ目 赤オサエ ナデ ヘラミガキ	-	底面赤オサエ ナデ ヘラミガキ		
299	33	21	遺物包含層	赤生土層	甕	-	3.2	8.0	や中層	良	にぶい・褐色 7.5YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR5/3	赤オサエ ナデ ハケ目 赤オサエ ハケ目	ヘラミガキ	-		
300	34	21	遺物包含層	須磨系 灰身	-	1.7	8.6	粗	良	灰白色 10YR7/1 灰白色 10YR7/1	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転 底面のみ			
301	34	21	遺物包含層	土師器 皿	皿	8.8	1.2	5.9	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR7/4	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転		
302	34	21	遺物包含層	土師器 皿	皿	(7.8)	1.7	5.4	や中層	良	にぶい・黄褐色 10YR6/3 にぶい・黄褐色 10YR6/3	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転		
303	34	21	遺物包含層	土師器 甕	甕	-	2.6	6.4	密	や中層	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化未切り後ナデ		
304	34	21	遺物包含層	土師器 甕	甕	-	1.5	6.4	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR7/4	白転ナデ 白転ナデ	ヘラミガキ	-	底面陶化未切り後ナデ	
305	34	21	遺物包含層	土師器 甕	甕	-	1.8	6.0	密	や中層	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	白転ナデ 白転ナデ	ヘラミガキ	-	底面陶化未切りヘラミガキ	
306	34	21	遺物包含層	土師器 井	井	(14.5)	3.6	(7.8)	や中層	良	にぶい・黄褐色 10YR7/4 赭灰色 10YR5/1 にぶい・褐色 7.5YR6/4	白転ナデ 白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化未切り		
307	34	21	遺物包含層	土師器 井	井	-	2.4	6.4	密	良	赭灰色 7.5YR5/1 にぶい・褐色 7.5YR6/3	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化未切り		
308	34	21	遺物包含層	土師器 井	井	-	1.7	7.4	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR7/4	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化未切り 右回転		
309	34	21	遺物包含層	青磁 皿	皿	(10.0)	2.1	(4.0)	密	良	灰オリーブ色 5Y6/2 オリーブ藍色 5Y6/3	白転ナデ後底文 比類無文 白転ナデ	-	底面陶化ヘラケズリ		
310	34	21	遺物包含層	青磁 甕	甕	(16.2)	(5.3)	-	密	良	胎土・灰白色 5Y7/1 糖・灰色 10Y6/1	ナデ ナデ	-	内外面陶化 内面に履下へ一糸の比類 文 片蓋置付文		
311	34	21	遺物包含層	灰質土層 足塗	足塗	(16.8)	(9.9)	-	や中層	良	灰色 5Y7/1 灰色 5Y5/1	赤オサエ ナデ ハケ目 赤オサエ ナデ	-	底面赤オサエナデ 黒西系		
312	34	21	遺物包含層	灰質土層 甕	甕	-	4.1	-	や中層	や中層	灰色 N4/ 赭灰色 10YR4/1	ココナデ ココナデ	-	外面に覆付着		
313	34	21	遺物包含層	灰質土層 甕	甕	-	5.0	-	や中層	や中層	黒褐色 10YR3/1 赭灰色 10YR4/1	ココナデ ナデ ココナデ ナデ	-	内外面に覆付着		
314	34	21	遺物包含層	灰質土層 足塗	足塗	長さ 5.3	太さ 1.4	幅 1.6	や中層	や中層	赭灰色 10YR4/1	手ね	-	厚足か		
316	35	22	遺構外	赤生土層 甕	甕	-	2.8	-	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR6/4	ココナデ ココナデ	-	口縁部曲つまみ上げ 幅記の垂下口 縁に片蓋文		
317	35	22	遺構外	赤生土層 甕	甕	-	5.1	-	や中層	や中層	にぶい・褐色 7.5YR7/3 褐色 7.5YR6/6	ハケ目 ココナデ ハケ目 ココナデ	-	外面劣部十四文		
318	35	22	遺構外	赤生土層 甕か壺	甕か壺	-	4.0	4.3	や中層	や中層	赭灰色 10YR4/1 にぶい・褐色 7.5YR6/4	黒面陶質のため不明 ハケ目目録体等によるケズリ後ナデ	-			
319	35	22	遺構外	赤土層 井	井	-	2.8	-	密	良	灰色 N6/ 灰色 7.5Y6/1	白転ナデ 白転ナデ	-			
320	35	22	遺構外	赤土層 井	井	-	1.2	6.0	密	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラケズリ		
321	35	22	遺構外	赤土層 甕	甕	-	7.2	-	密	良	灰白色 N7/ 灰色 7.5Y4/1	白転ナデ 白転ナデ	赤オサエ 格子目タタキ	-		
322	35	22	遺構外	土師器 皿	皿	7.5	1.3	5.4	密	良	灰白色 10YR8/2 浅黄褐色 7.5YR8/4	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化未切り		
323	35	22	遺構外	土師器 皿	皿	(7.8)	1.8	(4.8)	密	良	にぶい・褐色 7.5YR6/4 にぶい・褐色 7.5YR7/3	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転		
324	35	22	遺構外	土師器 皿	皿	(4.4)	2.1	(6.2)	密	良	明褐色 7.5YR7/2 にぶい・褐色 7.5YR6/4	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転		
325	35	22	遺構外	土師器 皿	皿	9.2	1.2	6.6	密	良	にぶい・褐色 5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR6/4	白転ナデ 白転ナデ	-	底面陶化ヘラ切り 右回転		
326	35	22	遺構外	土師器 皿	皿	8.8	1.35	5.9	密	良	にぶい・黄褐色 10YR7/4 にぶい・黄褐色 10YR7/3	白転ナデ 白転ナデ	強いココナデ	-	底面陶化未切り	

No.	排 回	回 取	出土場所	器種	器種	法量 (cm)			長さ (g)	石材・材料	備考		
						口径 (残存値)	器高 (残存値)	底径 (残存値)					
327	35	22	遺構外	土師器	椀	-	2.4	6.2	中やね	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	①赤ナデ後ヘラミガキ ②赤ナデ	底面回転車切り	
328	35	22	遺構検出時	土師器	杯	(14.0)	5.0	底.0	中やね	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6	①赤ナデ ②赤ナデ	底面回転車切り	
329	35	22	遺構検出時	瓦器	椀	(15.0)	3.3	-	滑	中やね 赤	灰白色 5Y4/1 黄灰色 2.5Y5/1	①赤ナデ ②コナデ ヘラミガキ	-
330	35	22	遺構外	瓦器	椀	(14.0)	3.0	-	中やね	赤	灰白色 5Y4/1 灰白色 5Y4/1	①コナデ 指オサエ ②コナデ 指オサエ	内外ともに摩滅著しい
331	35	22	遺構外	青磁	椀	-	3.3	-	滑	赤	青土: 灰白色 N7/ 軸: オリーブ灰色 5GY6/1	内外面施釉	外面に編織付文
332	35	22	遺構外	青磁	椀	(13.2)	5.4	(4.0)	滑	赤	青土: 灰白色 7.5Y7/1 軸: オリーブ灰色 2.5GY5/1	内外面施釉	底面嵌付内側輪 ケズリ出し高付 内面に片編織付文
333	35	22	遺構検出時	土師質土 器	罎	-	5.0	-	滑	中やね 赤	浅黄褐色 7.5YR8/3 に赤い褐色 7.5YR6/3	①コナデ ハウ目後ナデ ②ナデ ハウ目	-
334	35	22	遺構外	瓦質土器	罎	27.2	9.8	-	中やね	赤	黄灰色 2.5Y6/1 黄灰色 10YR4/1	①指オサエ ナデ後ハウ目 ②指オサエ ナデ 唇子目タタキ	外面に厚付直
335	35	22	遺構検出時	瓦質土器	罎	-	8.5	-	中やね	中やね 赤	灰白色 2.5Y7/2 ハウ目	①ハウ目 ②コナデ	-
336	35	22	遺構外	瓦質土器	罎	(24.0)	5.4	-	中やね	赤	灰黄褐色 10YR4/2 灰白色 10YR7/1	①コナデ ハウ目 指ナデ ②コナデ 左上方向への丁寧なナデ	-
337	35	22	遺構検出時	瓦質土器	罎	-	5.2	-	滑	中やね 赤	黄褐色 10YR3/2 黄褐色 2.5Y5/1	①コナデ 指オサエ ナデ ②コナデ ハウ目	-
338	35	22	遺構外	瓦質土器	罎	-	2.0	-	中やね	中やね 赤	灰白色 N5/ 灰色 N5/	①ハウ目後ナデか ②ハウ目後ナデか	口縁部内外面ココナデ
339	35	22	遺構外	土師質土 器	足罎	-	7.5	厚さ 2.6 幅 2.9	中やね	赤	に赤い褐色 7.5YR5/3	①指オサエ ②ナデ	-
340	35	22	遺構外	瓦質土器	鉢	-	4.0	-	中やね	中やね 赤	黄灰色 2.5Y4/1 黄灰色 2.5Y4/1	①ナデか ②ナデか	口縁部 片口
341	35	22	遺構外	陶器	磁鉢	(29.3)	9.4	-	滑	赤	灰赤色 7.5R4/2 灰赤色 7.5R4/2	①赤ナデ 輪付目付文 ②コナデ 回転ナデ	輪部境 採目九条一単位
342	35	22	遺構外	陶器	甕	-	4.5	-	滑	赤	灰色 N4/ 明赤灰色 10R4/1	①コナデ ②コナデ	輪部境

第3表 出土石器類観察一覧表

No.	排 回	回 取	出土場所	器種	法量 (cm)			長さ (g)	石材・材料	備考
					長さ (残存値)	幅 (残存値)	厚さ (残存値)			
40	24	10	SD2	灰石	6.1	5.7	4.1	60.1	輝石 (安山岩)～流紋岩	13 条の稜用部
107	26	13	SB01 (SP1)3	用途不明品	最大長 (全長) 18.1	最大幅 4.2	器高 2.6	120.3	滑石	内面ケズリ後長い稜部外面ケズリ後研磨 6ヶ存在
140	27	14	SB05 (SP1)87	面白か?	最大長 5.8	最大幅 5.6	1.9	113.7	滑石	石調の配用か 裏面中央に縦行縦有り 破石上で検出
215	30	17	SD01	灰石	最大長 12.1	最大幅 6.0	4.2	460	花崗岩質	二面使用 上上面または中破
224	31	18	SP250	白磁	2.1	2.0	0.5	1.2	灰質土質	押江製糖による調整 平足無蓋式
279	32	20	SP049 (附付型)	石調	(7.5)	(6.7)	1.8	175	滑石	内面 再加工部、半ズ外面 再加工部、一部工具部、半ズ 再加工部 輪部後加工している
315	35	22	遺構外	石調	1.85	1.3	0.2	0.4	灰質土質	細い調整 (施文か) 表面風化

第4表 鉄製品および鍛冶関連遺物観察一覧表

No.	排 回	回 取	出土場所	器種	法量 (cm)			長さ (g)	備考
					最大長 (残存値)	最大幅 (残存値)	最大厚 (残存値)		
169	28	15	SB02 (SP22)2	鉄片	2.5	2.6	1.7	21.6	鉄片か
177	28	16	SB07 (SP12)8	釘	(4.3)	0.6 ~ 0.7	0.5 ~ 0.6	7.7	-
178	28	16	SB07 (SP15)1	釘	(5.7)	0.4 ~ 0.5	0.4 ~ 0.5	8	-
222	30	18	SD04	長細鐵	(4.2)	0.55 ~ 0.8	0.4 ~ 0.65	4	-
280	32	20	SP058	鉄片	9.2	8.5	4 ~ 0.8	300	鉄片 輪部付
281	32	20	SP169	鉄片	3.5	3.8	2.5	83.3	鉄片 一部赤サビ化
282	32	20	SP065	釘	(4.3)	0.5 ~ 0.6	0.4 ~ 0.5	6.8	-

## IV 自然科学分析

### 1 信川遺跡出土炭化材・生材の放射性炭素年代測定、樹種同定

パレオ・ラボ株式会社（編集：井上）

#### はじめに

山口県柳井市の信川遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。また、同一試料を用いて樹種同定も行った。

#### 1. 試料

試料は17点である。掘立柱建物SB01の構成柱穴SP014の炭化材1点（試料No.1:PLD-43338）と生材1点（試料No.2:PLD-43339）、掘立柱建物SB03の構成柱穴SP270の炭化材1点（試料No.3:PLD-43340）、同SP300の生材1点（試料No.4:PLD-43341）、掘立柱建物SB08の構成柱穴を切る新しい柱穴SP053の生材1点（試料No.5:PLD-43342）、掘立柱建物SB07の構成柱穴SP077の炭化材1点（試料No.6:PLD-43343）、竪穴住居SI02の炭化材1点（試料No.7:PLD-43809）、掘立柱建物SB01の構成柱穴SP023の炭化材1点（試料No.8:PLD-43810）、掘立柱建物SB06の構成柱穴SP038の炭化材1点（試料No.9:PLD-43811）、掘立柱建物SB07の構成柱穴SP102の炭化材1点（試料No.10:PLD-43812）と同SP163の炭化材1点（試料No.11:PLD-43813）、掘立柱建物SB05の構成柱穴SP099の炭化材1点（試料No.12:PLD-43814）と同SP157の炭化材1点（試料No.13:PLD-43815）、掘立柱建物SB01の構成柱穴SP003の生材1点（試料No.14:PLD-43919）、掘立柱建物SB05の構成柱穴SP184の生材1点（試料No.15:PLD-43920）と同SP198の生材1点（試料No.16:PLD-43921）、掘立柱建物SB03の構成柱穴SP066の生材1点（試料No.17:PLD-43922）である。

試料No.8と9は最終形成年輪が残っていたが、それ以外の試料には最終形成年輪は残っていなかった。

#### 2. 放射性炭素年代測定

##### (1) 分析方法

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。

##### (2) 結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、第36図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

第5表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43338	試料 No.1 遺構: SB01(SP014)	種類: 同化材 (ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43339	試料 No.2 遺構: SB01(SP014)	種類: 生材 (ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43340	試料 No.3 遺構: SB03(SP270)	種類: 同化材 (トネリコ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43341	試料 No.4 遺構: SB03(SP300)	種類: 生材 (マツクワ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43342	試料 No.5 遺構: SP053 位置: SB08の構成員穴を切 る部上・柱穴	種類: 生材 (トネリコ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43343	試料 No.6 遺構: SB07(SP077)	種類: 同化材 (ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43809	試料 No.7 遺構: SB02 中央部 部位: 床面直上	種類: 同化材 (クワ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43810	試料 No.8 遺構: SB01 (SP023)	種類: 同化材 (コナラ属クヌギ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43811	試料 No.9 遺構: SB06(SP038)	種類: 同化材 (サカキ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43812	試料 No.10 遺構: SB07(SP102)	種類: 同化材 (クワ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43813	試料 No.11 遺構: SB07(SP162)	種類: 同化材 (クワ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43814	試料 No.12 遺構: SB05(SP099)	種類: 同化材 (ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43815	試料 No.13 遺構: SB05(SP157)	種類: 同化材 (コナラ属アカガシ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43919	試料 No.14 遺構: SB01 (SP003)	種類: 生材 (スギ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 部種: 柱材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43920	試料 No.15 遺構: SB05(SP184)	種類: 生材 (スギ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 部種: 柱材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43921	試料 No.16 遺構: SB05(SP198)	種類: 生材 (アスナロ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 部種: 柱材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-43922	試料 No.17 遺構: SB03(SP066)	種類: 生材 (マツ属樹皮質変態属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 部種: 柱・柱文材 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第6表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正周年年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{13}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{13}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-43338 SB01(SP014) 試料 No.1	-28.46 $\pm$ 0.29	898 $\pm$ 20	900 $\pm$ 20	1052-1078 cal AD (23.92%) 1156-1179 cal AD (28.65%) 1191-1207 cal AD (15.69%)	1047-1083 cal AD (29.09%) 1095-1102 cal AD ( 1.43%) 1125-1141 cal AD ( 3.61%) 1147-1218 cal AD (61.32%)
PLD-43339 SB01(SP014) 試料 No.2	-27.13 $\pm$ 0.30	913 $\pm$ 20	915 $\pm$ 20	1048-1082 cal AD (39.42%) 1097-1100 cal AD ( 1.74%) 1128-1139 cal AD ( 6.52%) 1150-1168 cal AD (17.06%) 1170-1175 cal AD ( 2.46%) 1196-1198 cal AD ( 1.07%)	1041-1107 cal AD (50.39%) 1115-1180 cal AD (37.98%) 1189-1210 cal AD ( 7.08%)
PLD-43340 SB03(SP270) 試料 No.3	-28.91 $\pm$ 0.28	462 $\pm$ 19	460 $\pm$ 20	1432-1447 cal AD (68.27%)	1424-1454 cal AD (95.45%)
PLD-43341 SB03(SP300) 試料 No.4	-27.76 $\pm$ 0.29	555 $\pm$ 19	555 $\pm$ 20	1328-1336 cal AD (13.85%) 1396-1418 cal AD (54.28%)	1325-1354 cal AD (34.81%) 1393-1422 cal AD (60.64%)
PLD-43342 SP053 試料 No.5	-27.85 $\pm$ 0.29	398 $\pm$ 19	400 $\pm$ 20	1450-1487 cal AD (68.27%)	1445-1505 cal AD (84.51%) 1595-1617 cal AD (10.94%)
PLD-43343 SB07(SP077) 試料 No.6	-28.50 $\pm$ 0.29	991 $\pm$ 19	990 $\pm$ 20	998-1000 cal AD ( 2.01%) 1021-1044 cal AD (47.16%) 1086-1093 cal AD ( 5.84%) 1106-1118 cal AD (13.26%)	995-1004 cal AD ( 5.21%) 1018-1049 cal AD (50.54%) 1082-1133 cal AD (33.52%) 1138-1152 cal AD ( 6.18%)
PLD-43809 SI02 中央部 試料 No.7	-27.97 $\pm$ 0.12	1800 $\pm$ 20	1800 $\pm$ 20	231-252 cal AD (34.00%) 292-317 cal AD (34.27%)	213-257 cal AD (48.78%) 282-327 cal AD (46.67%)
PLD-43810 SB01(SP023) 試料 No.8	-27.63 $\pm$ 0.12	893 $\pm$ 19	895 $\pm$ 20	1053-1060 cal AD ( 6.24%) 1157-1181 cal AD (33.76%) 1187-1212 cal AD (28.27%)	1049-1082 cal AD (22.30%) 1132-1138 cal AD ( 0.95%) 1151-1219 cal AD (72.20%)
PLD-43811 SB06(SP038) 試料 No.9	-25.11 $\pm$ 0.11	837 $\pm$ 18	835 $\pm$ 20	1179-1190 cal AD (13.53%) 1208-1230 cal AD (39.77%) 1244-1257 cal AD (14.96%)	1168-1170 cal AD ( 0.63%) 1175-1196 cal AD (19.70%) 1198-1263 cal AD (75.12%)
PLD-43812 SB07(SP102) 試料 No.10	25.88 $\pm$ 0.14	773 $\pm$ 18	775 $\pm$ 20	1231-1242 cal AD (19.63%) 1259-1276 cal AD (48.64%)	1226-1277 cal AD (95.45%)
PLD-43813 SB07(SP163) 試料 No.11	-24.62 $\pm$ 0.12	971 $\pm$ 17	970 $\pm$ 15	1029-1047 cal AD (23.57%) 1084-1095 cal AD (13.02%) 1103-1124 cal AD (26.39%) 1141-1147 cal AD ( 5.29%)	1026-1050 cal AD (27.67%) 1080-1153 cal AD (67.78%)
PLD-43814 SB05(SP099) 試料 No.12	-24.07 $\pm$ 0.11	903 $\pm$ 18	905 $\pm$ 20	1051-1079 cal AD (32.82%) 1155-1177 cal AD (27.90%) 1193-1201 cal AD ( 7.55%)	1047-1083 cal AD (36.70%) 1095-1102 cal AD ( 1.82%) 1125-1141 cal AD ( 4.57%) 1147-1215 cal AD (52.36%)
PLD-43815 SB05(SP157) 試料 No.13	-27.76 $\pm$ 0.11	882 $\pm$ 18	880 $\pm$ 20	1163-1180 cal AD (29.93%) 1187-1211 cal AD (38.34%)	1053-1076 cal AD ( 7.76%) 1156-1219 cal AD (87.69%)
PLD-43919 SB01(SP003) 試料 No.14	-27.34 $\pm$ 0.17	950 $\pm$ 17	950 $\pm$ 15	1040-1049 cal AD ( 9.00%) 1081-1108 cal AD (25.70%) 1113-1134 cal AD (19.92%) 1137-1152 cal AD (13.65%)	1033-1053 cal AD (15.92%) 1061-1157 cal AD (79.53%)
PLD-43920 SB05(SP184) 試料 No.15	-27.43 $\pm$ 0.16	886 $\pm$ 17	885 $\pm$ 15	1161-1180 cal AD (33.55%) 1188-1210 cal AD (34.72%)	1053-1076 cal AD (10.17%) 1156-1218 cal AD (85.28%)
PLD-43921 SB05(SP198) 試料 No.16	-27.86 $\pm$ 0.16	938 $\pm$ 17	940 $\pm$ 15	1044-1053 cal AD ( 7.99%) 1062-1066 cal AD ( 3.15%) 1076-1086 cal AD ( 9.23%) 1092-1106 cal AD (11.98%) 1118-1156 cal AD (35.92%)	1039-1055 cal AD (12.76%) 1056-1158 cal AD (82.69%)
PLD-43922 SB03(SP066) 試料 No.17	-28.12 $\pm$ 0.13	521 $\pm$ 18	520 $\pm$ 20	1409-1424 cal AD (68.27%)	1402-1435 cal AD (95.45%)

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$ の半減期5730  $\pm$  40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### (3) 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲 (確率95.45%) に着目して結果を整理する。

SB01 (SP014) の試料No.1 (PLD-43338) は1047-1083 cal AD (29.09%)、1095-1102 cal AD (1.43%)、1125-1141 cal AD (3.61%)、1147-1218 cal AD (61.32%)、試料No.2 (PLD-43339) は1041-1107 cal AD (50.39%)、1115-1180 cal AD (37.98%)、1189-1210 cal AD (7.08%) で、どちらも11世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

SB03 (SP270) の試料No.3 (PLD-43340) は、1424-1454 cal AD (95.45%) で、15世紀前半～中頃の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。同 (SP300) の試料No.4 (PLD-43341) は、1325-1354 cal AD (34.81%) および1393-1422 cal AD (60.64%) で、14世紀前半～15世紀前半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代～室町時代に相当する。

SB07 (SP077) の試料No.6 (PLD-43343) は、995-1004 cal AD (5.21%)、1018-1049 cal AD (50.54%)、1082-1133 cal AD (33.52%)、1138-1152 cal AD (6.18%) で、10世紀末～12世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。

SP053の試料No.5 (PLD-43342) は、1445-1505 cal AD (84.51%) および1595-1617 cal AD (10.94%) で、15世紀中頃～16世紀初頭および16世紀末～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料はいずれも最終形成年輪が残っていないため、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

SI02中央部の試料No.7 (PLD-43809) は213-257 cal AD (48.78%) および282-327 cal AD (46.67%) で、3世紀前半～4世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。なお、試料No.7には最終形成年輪が残っていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定する

と枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料 No.7 の測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

SB01(SPO23) の試料 No.8 (PLD-43810) は 1049-1082 cal AD (22.30%)、1132-1138 cal AD (0.95%)、1151-1219 cal AD (72.20%) で、11 世紀中頃～13 世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。なお、試料 No.8 は最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

SB06(SPO38) の試料 No.9 (PLD-43811) は 1168-1170 cal AD (0.63%)、1175-1196 cal AD (19.70%)、1198-1263 cal AD (75.12%) で、12 世紀後半～13 世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。試料 No.9 は最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

SP102(SB07 廃絶後に掘り込まれた柱穴) の試料 No.10 (PLD-43812) は 1226-1277 cal AD (95.45%) で、13 世紀代の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。また、SB07(SP163) の試料 No.11 (PLD-43813) は 1026-1050 cal AD (27.67%) および 1080-1153 cal AD (67.78%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。試料 No.10 と 11 は最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

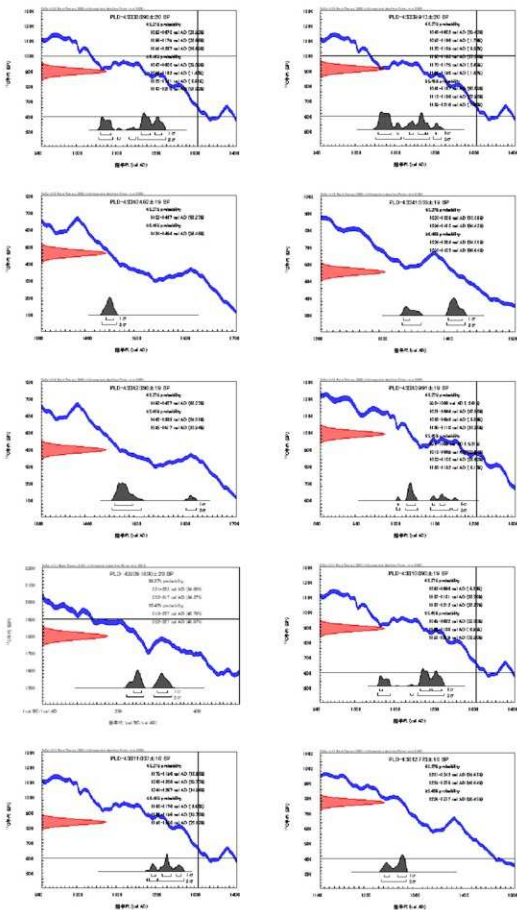
SB05(SPO99) の試料 No.12 (PLD-43814) は 1047-1083 cal AD (36.70%)、1095-1102 cal AD (1.82%)、1125-1141 cal AD (4.57%)、1147-1215 cal AD (52.36%)、SB05(SP157) の試料 No.13 (PLD-43815) は 1053-1076 cal AD (7.76%) および 1156-1219 cal AD (87.69%) で、ともに 11 世紀中頃～13 世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。試料 No.12 と 13 は最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

SB01 (SPO03) の試料 No.14 (PLD-43919) は、1033-1053 cal AD (15.92%) および 1061-1157 cal AD (79.53%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料 No.14 は最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

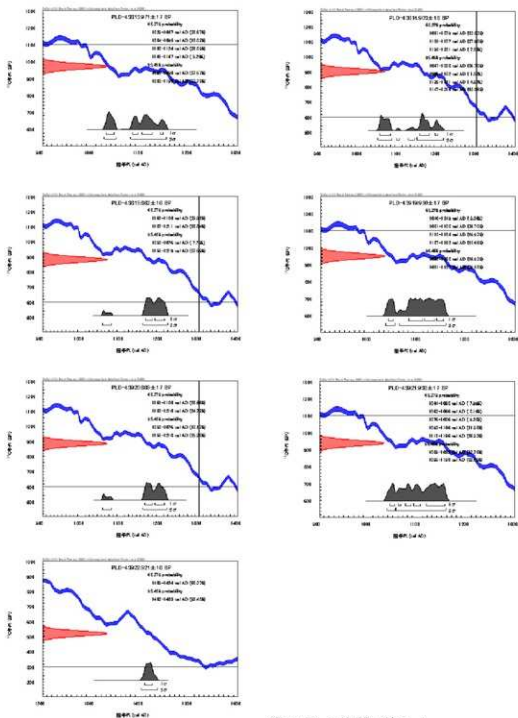
SB05 (SP184) の試料 No.15 (PLD-43920) は、1053-1076 cal AD (10.17%) および 1156-1218 cal AD (85.28%) で、11 世紀中頃～後半および 12 世紀中頃～13 世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。また SB05 (SP198) の試料 No.16 (PLD-43921) は、1039-1055 cal AD (12.76%) および 1056-1158 cal AD (82.69%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。どちらも最終形成年輪は残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

SB03 (SPO66) の試料 No.17 (PLD-43922) は、1402-1435 cal AD (95.45%) で、15 世紀初頭～前半の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。試料 No.17 は最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。





第 36 圖 曆年較正結果 -1



第 37 図 暦年較正結果-2

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」:3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

### 3. 樹種同定

#### (1) 分析方法

生材の樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

#### (2) 結果

同定の結果、針葉樹のヒノキ、モミ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、アスナロの5分類群と、広葉樹のサクラ属、トネリコ属、クリとコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、サカキの6分類群の、計11分類群が見られた。

ヒノキおよびクリが3点で最も多く、スギおよびトネリコ属が2点、モミ属、マツ属複雑管束亜属、アスナロ、サクラ属、アカガシ亜属、クヌギ節、サカキは各1点であった。同定結果一覧を第7表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、第37～39図に光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真を示す。

#### ①ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第37図 6a-6c(No.6)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

#### ②サクラ属（広義） *Prunus* s.l.バラ科 第37図 4a-4c(No.4)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1～5列となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定では、モモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

#### ③トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 第37図 3a-3c(No.3)

大型の道管が年輪の始めに並び、晩材部では急に径を減じた道管が単独ないし2～3個複合して

配列する環孔材であるが、試料では年輪界がみられず、トネリコ属までの同定となった。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～3列となる。

トネリコ属には、アオダモやマルバアオダモなどのトネリコ節と、シオジとヤチダモなどのシオジ節がある。いずれも日本各地の温帯の山地などの湿潤地に分布する、落葉高木から小高木の広葉樹である。トネリコ節とシオジ節の材質は類似し、広葉樹の中では強度は中庸であるが、トネリコ節の方がやや重硬である。また、切削加工等は、シオジ節の方がトネリコ節よりも容易である。

④モミ属 *Abies* マツ科 第38図 12a-12c(No.12)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

⑤クリ *Castanea crenata* Siebold, et Zucc. ブナ科 第38図 10a-10c(No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

⑥コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第38図 13a-13c(No.13)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

⑦コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第38図 8a-8c(No.8)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

⑧サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科 第38図 9a-9c(No.9)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔と

なる。放射組織は上下端 1～4 列が直立する異性で、幅 1～3 列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

⑨マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第 39 図 17a-17c(No.17)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

⑩スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 第 39 図 15a-15c(No.15)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2～15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軟軟で、切削などの加工が容易な材である。

⑪アスナロ *Thujiopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第 39 図 16a-16c(No.16)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ 2～13 列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1 分野に 2～4 個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軟軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油が多く、耐朽性に優れている。

### (3) 考察

SP077 と SP014 の柱は、いずれもヒノキであった。放射性炭素年代測定の結果、SP077 の柱は平安時代中期～後期、SP014 の柱は平安時代中期～鎌倉時代の暦年代を示している。ヒノキは、真つすぐで加工性の良い樹種である（伊東ほか、2011）。

SP300 の柱は、サクラ属であった。放射性炭素年代測定の結果、鎌倉時代～室町時代の暦年代を示している。サクラ属は堅硬な樹種である（伊東ほか、2011）。

SP270 および SP053 の柱は、いずれもトネリコ属であった。放射性炭素年代測定の結果、SP270 の柱は室町時代、SP053 の柱は室町時代～江戸時代前期の暦年代を示した。トネリコ属は、堅硬な部類に属する樹種である（伊東ほか、2011）。

山口県内で確認されている中世の柱には、マツ属複維管束亜属やヒノキ、イスノキが利用されてい

る（伊東・山田編，2012）。今回の信川遺跡では、ヒノキが利用されている点で傾向は類似するが、他にサクラ属やトネリコ属などの広葉樹がみられる点で特徴的であった。

古墳時代初頭の竪穴住居跡 S102 の炭化材（試料 No.7）は、クリであった。材は建築材であった可能性が考えられる。クリは堅硬な樹種である（伊東ほか，2011）。中国地方では、古墳時代初頭の竪穴住居跡の構造材にクリが多くみられ、特に広島県下の古墳時代初頭の焼失竪穴住居跡で多く確認されている（扇崎，2012）。

平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡 SB06・07 ではクリとサカキが、平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物 SB05 ではモミ属とアカガシ亜属が、SB01 ではクスギ節がみられた。いずれも柱穴から出土しており、柱材と考えられる。モミ属は軽軟で加工性が良く、アカガシ亜属とクスギ節、サカキは、クリと同様に堅硬な樹種である（伊東ほか，2011）。中国地方における平安時代の柱材にはヒノキが多いが、クリやアカガシ亜属、クスギ節、サカキも確認されており（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

平安時代末～鎌倉時代初頭の柱材は、スギとアスナロであった。スギとアスナロは木理通直で真っすぐに生育する加工性が良い樹種である。中国地方における平安時代の柱材にはヒノキが多いが、ヒノキ属やスギも確認されており（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

室町時代の柱支え材は、マツ属複雑維管束亜属であった。マツ属複雑維管束亜属はスギやアスナロと同様に真っすぐで加工性が良く、油分が多くて水湿に強いという材質をもつ。中国地方で確認されている室町時代の柱材では、マツ属複雑維管束亜属やクリなどが確認されている（伊東・山田編，2012）。柱材と柱支え材では用途は多少異なるが、樹種の選択傾向は一致すると考えられる。

#### 引用文献

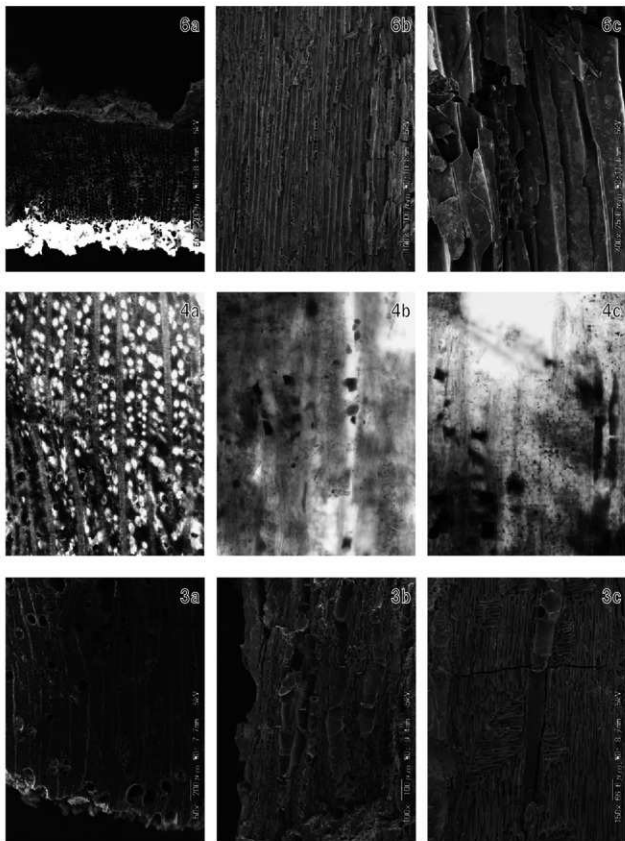
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。

扇崎 由（2012）中国（1）—岡山県・広島県・山口県—，伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学—出土木製品用材データベース—」：210-223，海青社。

第7表 樹種同定結果一覧

試料 No.	出土遺構	種類	樹種	備考	年代測定結果による時期	年代測定番号
1	SPO14	炭化材	ヒノキ	SB01 構成柱穴	平安時代中期～鎌倉時代	PLD-43338
2	SPO14	生材	ヒノキ	SB01 構成柱穴	平安時代中期～鎌倉時代	PLD-43339
3	SP270	炭化材	トネリコ属	SB03 構成柱穴	室町時代	PLD-43340
4	SP300	生材	サクラ属	SB03 構成柱穴	鎌倉時代～室町時代	PLD-43341
5	SPO53	生材	トネリコ属	SB08 より新	室町時代～江戸時代前期	PLD-43342
6	SPO77	炭化材	ヒノキ	SB07 構成柱穴	平安時代中期～後期	PLD-43343
7	SI02	炭化材	クリ	中央部床面	古墳時代初頭	PLD-43809
8	SPO23	炭化材	コナラ属クヌギ節	SB01 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43810
9	SPO38	炭化材	サカキ	SB06 構成柱穴	平安時代中期～末	PLD-43811
10	SP102	炭化材	クリ	SB07 廢絶後に 掘り込まれた柱 穴	鎌倉時代	PLD-43812
11	SP163	炭化材	クリ	SB07 構成柱穴	平安時代中期～末	PLD-43813
12	SPO99	炭化材	モミ属	SB05 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43814
13	SP157	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	SB05 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43815
14	SPO03	生材	スギ	SB01 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43919
15	SP184	生材	スギ	SB05 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43920
16	SP198	生材	アスナロ	SB05 構成柱穴	平安時代末～鎌倉時代初頭	PLD-43921
17	SPO66	生材	マツ属複雑維管束亜属	SB03 構成柱穴	室町時代	PLD-43922



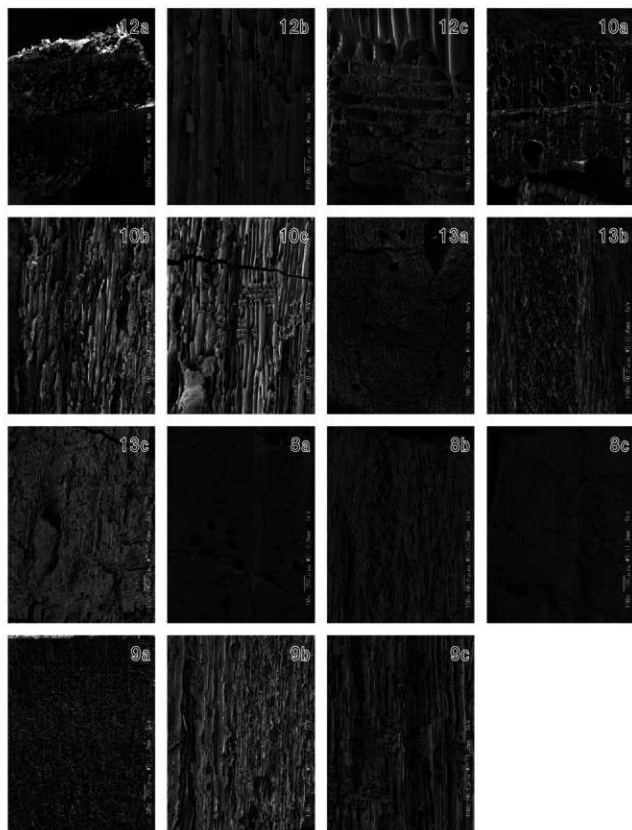
光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真

6a-6c. ヒノキ (No. 6)、4a-4c. サクラ属 (No. 4)、3a-3c. トネリコ属 (No. 3)

a: 横断面 (スケール=μm)、b: 接線断面 (スケール=μm)、c: 放射断面 (スケール=μm)

第 38 図 出土木材 (1)



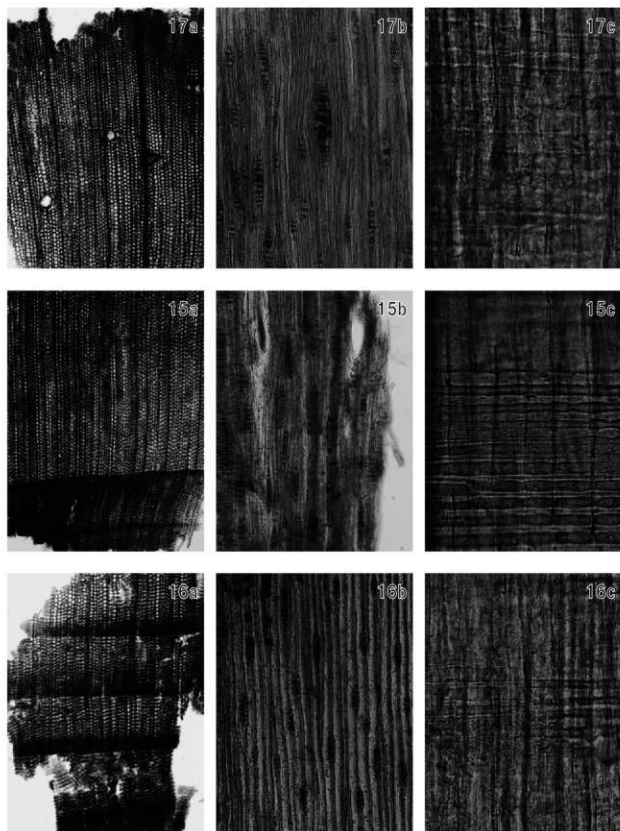


走査型電子顕微鏡写真

12a-12c. モミ属 (No. 12)、10a-10c. クリ (No. 10)、13a-13c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 13)、8a-8c. コナラ属クスギ節 (No. 8)、9a-9c. サカキ (No. 9)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第 39 図 出土木材 (2)



光学顕微鏡写真

17a-17c. マツ属複雑管束亜属 (No. 17)、15a-15c. スギ (No. 15)、16a-16c. アスナロ (No. 16)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=50 μm)

第 40 図 出土木材 (3)

## V 総括

信川遺跡の所在する柳井市新庄地区は、柳井港に注ぐ土穂石川と平生湾に注ぐ田布施川に挟まれた、赤子山を主峰とする低丘陵の北側山麓、標高 12～13 m に位置する。古柳井水道南岸域にあたり、調査結果から防予諸島内外の交易・交流色が濃い性格を示す遺跡であることが明らかとなった。

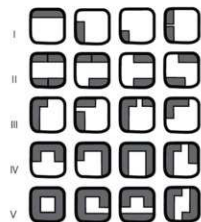
### 1 弥生時代・古墳時代の様相

SK01 は出土遺物から、弥生時代中期に比定した廃棄土坑である。出土遺物の中には、甕(10)・鉢(21)のように連鎖状指頭押圧痕がある突帯を有するものがあり、瀬戸内海沿岸域の特徴が現れている。この技法は東九州から中・四国、東海地方に至る広い分布圏をもつ。

古墳時代初頭と判断した竪穴建物 2 棟のうち 1 棟 (SI02) からは高杯の杯部が出土した。この高杯は非常に丁寧なつくりで、県内での出土例を見ない。岡山県津寺遺跡出土の高杯 (古墳時代初頭の溝出土) に器形・法量が酷似している。SI02 は 3 辺 (または 4 辺) にベッド状遺構をもつ竪穴建物である。山口県の弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物において、ベッド状遺構の事例をいくつか見ることができる。主要遺跡は、山口県東部では明地遺跡で 14 棟、天王遺跡で 7 棟、林遺跡で 4 棟、追迫遺跡で 2 棟、吉政遺跡 1 棟、西部では古永遺跡 (Ⅲ-東地区) で 4 棟、高野遺跡 (北地区) で 1 棟などがある。詳しくは、第 41・42 図および第 8 表を参照にされたい<sup>註 1 註 2</sup>。

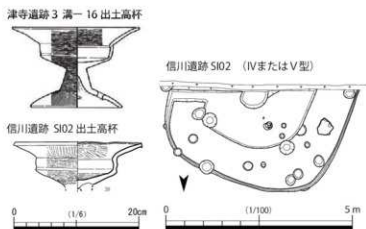
SI02 を規模や平面型式で比較すると県内では林遺跡の SB02、明地遺跡の SB36・47 に類似する。同様の例は岡山県や九州地方で多く見つかっているが、九州地方ではⅠ・Ⅱ型の割合がさらに高い。また、九州寄りの県西部でⅣ・Ⅴ型の出土例はない。先述の岡山県津寺遺跡では、検出された 140 棟の竪穴建物のうち古墳時代前期の 91 棟に限れば、一辺 4.0 m～5.5 m の中型で 4 本柱、Ⅳ型のものが 66 棟と多い。本遺跡 SI01 も同規模、同型である。

県内東部に片寄るこの様相は、とりわけ瀬戸内海沿岸域東部方面との交易や交流を物語っているが、今後さらに県西部や近県の広島、愛媛、福岡の遺構の型式・出土遺物などの情報を加味して検討していく必要がある。



第 41 図 ベッド状遺構をもつ  
竪穴建物の型式分類

(ベッド状遺構と屋内施設 / 宮本長二郎<sup>註 1</sup>  
より挿入図を編集加工して掲載)



第 42 図 SI02 平面図および出土高杯実測図

第8表 ベッド状遺構をもつ竪穴建物の地域別・時代別・類型別分布

(ベッド状遺構と屋内施設 / 宮本長二郎<sup>2)</sup> より北海道、東北・関東・北陸地方を除き抜粋・編集し、山口県主要な遺跡を追加して掲載)

地域	弥生時代			古墳時代			Ⅰ型		Ⅱ型		Ⅲ型		Ⅳ型		Ⅴ型	
	前期	中期	後期	前期	中期	後期	弥生	古墳	弥生	古墳	弥生	古墳	弥生	古墳	弥生	古墳
長野県			3				2	0					1			
愛知県			1				1	0								
滋賀県				1				1								
京都府			1	3			1	1								2
大阪府			1	8	2			4				1	1	3		2
兵庫県	1	23	9	1			2	4	5	1			3	3	11	1
岡山県			14	24			2	1	1	1		1	2	4	9	17
鳥取県				2	1			3								
四国地方	7	13	5	2	1	6	2				2		1	3	6	3
九州地方	8	120	31	5	2	52	17	34	1	11	6	13	10	15	4	
山口県	林道跡		1	3									1	3		
	明地道跡		4	1				1					2		2	
	明地道跡Ⅱ		7	2			2						3	1	2	1
	天王道跡		7				1		4						2	
	追道跡			2											2	
	吉政道跡			2				1					1			
	吉永道跡				4			2		1		1				
	高野道跡			1						1						

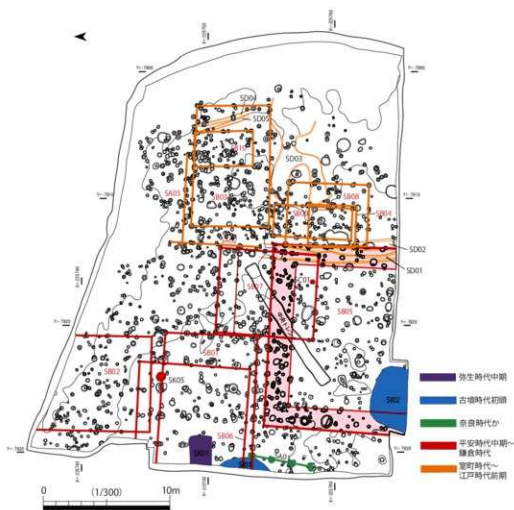
## 2 古代～近世の様相

奈良時代まで遡る可能性を有する遺構に柱穴列 SA01 があり、付近からは古代瓦が出土している。本遺跡の主体を成すのは、調査区の西半部分に存在する平安時代末～鎌倉時代の大型建物群である(第43図 遺構図(時代別) 参照)。

建物群の中には SB07 のように柱穴の一つからは土師器杯(179)、青磁碗(180)、白磁四耳壺(181)が出土し、廃絶時の祭祀を想定させるものがある。181は11世紀中頃～12世紀中頃に比定される<sup>註3</sup>。輸入磁器の保有状況から、当時の荘園領主など権力者の存在が伺える。

またこれら建物群には、SB01 のように柱穴の規模が大きく、遺物の出土量も多いものが存在する。SB01 構成柱穴 SP003 からは土師器皿 14 点のほか、土師器杯、都城系土師器碗、瓦器碗、白磁皿など多数出土した。また SP013 からは、福岡市博多遺跡群や箱崎遺跡等で多くの出土例をみる双胴の滑石製用途不明石製品が出土している。畿内や九州北部で出土している遺物と類似するという結果は、瀬戸内海沿岸域の幅広い範囲で交易があったことを示しており、この地の有力者の権勢が大きいことを物語っている。

北東西の三面に廂をもつ最大規模の建物 SB05 構成柱穴からも、土師器皿・杯、瓦器皿・碗を中心に多くの遺物が出土している。領主などの権力者関連建物の可能性がある。



第43図 遺構図(時代別)

本遺跡が所在する柳井市新庄では、奈良時代末期に建立されたとする瀧田廃寺の関連遺物として瓦が発見されている。また、調査区となった新庄「信川」の東隣地区は「大祖」という小字である。これは「大堂」がなまったもので、古代七坊をもつ大寺であった積蔵寺があったとされる。「積蔵寺は真言寺院として創建されたが、中世末期までに浄土系宗派に改宗し、真言寺院としては現存しない」<sup>註4</sup>とされる。大型の建物群は、こうした寺院に関わる建物である可能性もあろう。

この地は、古柳井水道南岸で物資の搬入出の至便さ故か、中世前期から近世初期の長期に渡り、頻繁に建物が建てられている。しかし、地盤の安定しない軟弱な堆積層上に、掘立柱で大型建物を造営しているため、耐久期間も非常に短かったと推察する。

調査区の東半分には室町時代～江戸時代の建物群が広がる。室町時代に入ると耐久性を考慮して掘立柱の穴はより深く掘られ、SB03のように柱穴底に油が多く水湿に強い松材を用いた支柱材を設置するなど工夫が見られるようになる。建物の規模は縮小し、柱穴からの出土遺物量も急激に少なくなるが、東西南北を意識した棟方向はほぼ変わっていない。この様相は、江戸時代前期まで存続する。

### 3 まとめ

本遺跡では、弥生時代中期から古墳時代初頭に入々が生活した竪穴建物や土坑、平安時代末から鎌倉時代初頭に造営された大型建物群を中心とする多数の遺構、更には江戸時代前期に至るまで多くの人々が生活した痕跡がある。併せて土器・石器等の豊富な出土品は、当時の人々の暮らしの様子を雄弁に語るものであり、地域の歴史や文化を理解するうえで、貴重な成果といえる。

註

- 1 宮本長二郎 1990 「ベッド状遺構と地内施設」『季刊 考古学』第32号 - 特集 古代の住居 徳山閣出版
- 2 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1996 「第3部 古墳時代の埴谷住居」『古墳遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104
- 3 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府築山跡XV」-興組遺跡発掘編- 太宰府市の文化財 第49集
- 4 柳井市 1988 『柳井市史(総論編)』

参考文献

- 1 柳井市史編纂委員会 1958 『柳井市新住地調査』
- 2 文化庁監修 1976 『文化財講座 日本の建築2 古代・中世1』第一法規出版
- 3 文化庁監修 1977 『文化財講座 日本の建築3 中世2』第一法規出版
- 4 柳井市 1984 『柳井市史(通史編)』
- 5 日本道路公団岡山工事事務所 山形県教育委員会 1988 『追込遺跡 -鳥田川中流域遺跡群の調査-』山形県埋蔵文化財調査報告 第107集
- 6 日本道路公団岡山工事事務所 山形県教育委員会 1988 『天王遺跡 -鳥田川中流域遺跡群の調査-』山形県埋蔵文化財調査報告 第108集
- 7 財団法人山形県教育財団 山形県教育委員会 1993 『林遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告 第159集
- 8 財団法人山形県教育財団 山形県教育委員会 1993 『甲地遺跡-平成4年度発掘調査報告書-』山形県埋蔵文化財調査報告 第162集
- 9 財団法人山形県教育財団 山形県教育委員会 1994 『甲地遺跡II-平成5年度発掘調査報告書-』山形県埋蔵文化財調査報告 第167集
- 10 財団法人山形県教育財団 1996 『吉政遺跡-柳井ウエルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査報告書-』山形県埋蔵文化財センター 調査報告 第1集
- 11 財団法人山形県教育財団 山形県埋蔵文化財センター 1999 『高野遺跡(北地区)』山形県埋蔵文化財センター 調査報告 第9集
- 12 財団法人山形県教育財団 山形県埋蔵文化財センター 1999 『吉永遺跡(田一東地区)』山形県埋蔵文化財センター 調査報告 第10集
- 13 岡次哲夫 2003 『九州地方における地鎮めの様相』『説文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 14 玉井哲雄 2008 『日本建築の歴史 寺院・神社と住宅』河出書房新社
- 15 防府市教育委員会 2013 『真防国跡発掘調査報告3』
- 16 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター 2018 『阿弥陀寺 -上坂本東大出防安・通常防工事に伴う埋蔵文化財調査-』山形県埋蔵文化財センター調査報告 第100集
- 17 福岡市埋蔵文化財センター ホームページ 2021 『不磨所石製品 中世前期(11~12世紀頃)』



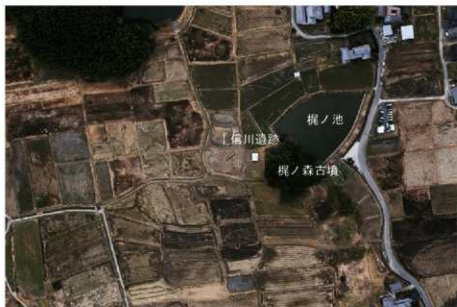
調査区 遠景 (東から)



調査区 遠景（北から）



調査区 遠景（南から）



調査区 近景（北から）

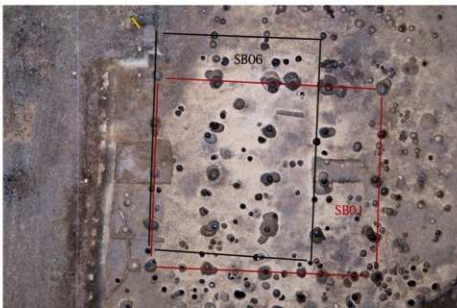




調査区 近景 (東から)



調査区 全景 (南上空から)



SB01・06 (南上空から)

図版 4



東壁 土層断面 (西から)



北壁 土層断面 (南から)



西壁 土層断面 (東から)



SK01 弥生土器等出土状況 (北から)



SK01 完掘状況 (北から)



S101 完掘状況（東から）



S102 検出状況（北から）



S102 土層断面 中央～西（北から）



S102 完掘状況（北から）



SB01 完掘状況（西から）



SB01 構成柱穴 SP003 土師器碗等出土状況（北から）



SB01 構成柱穴 SP005 土師器杯出土状況（北から）



SB01 構成柱穴 SP019 土師器杯出土状況（北から）



SB01 構成柱穴 SP023 土師器皿出土状況（南から）



SB05 完掘状況 (西から)



SB05 構成柱穴 SP114 土師器杯出土状況 (南から)



SB05 構成柱穴 SP187 土師器皿等出土状況 (西から)



SB05 構成柱穴 SP188 土師器皿出土状況 (北から)



SB05 構成柱穴 SP243 柱根検出状況 (南から)



SB07 構成柱穴 SP163  
白磁四耳壺等出土状況（西から）



SB03 構成柱穴 SP066  
支柱材出土状況（西から）



SK05 土層断面（北から）



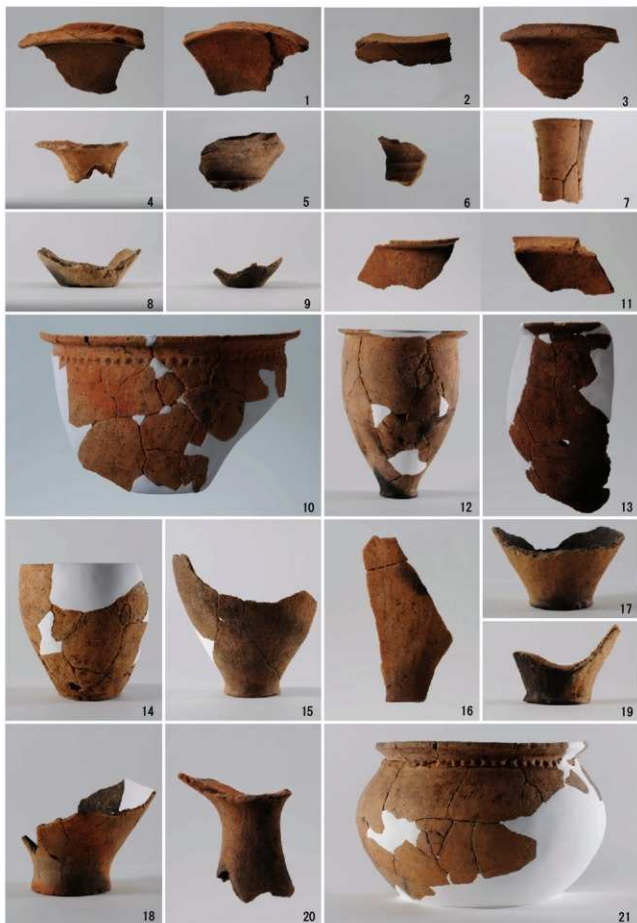
SC01 土器器皿・杯出土状況（南から）



SD01 セクション①土層断面（北から）



SD03 セクション③土層断面（西から）



出土遺物 (1)







出土遺物 (3)





出土遺物 (5)





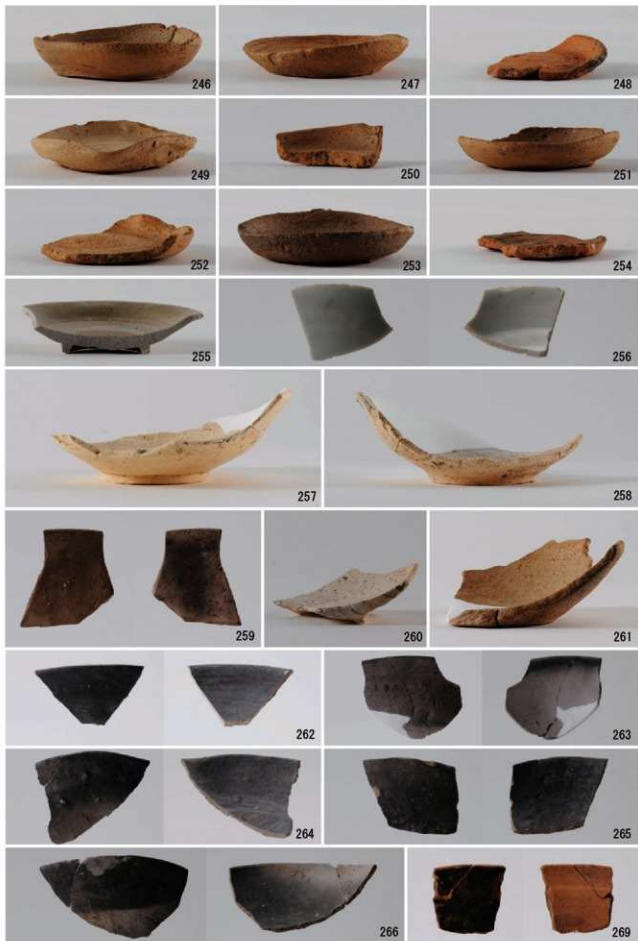
出土遺物 (7)



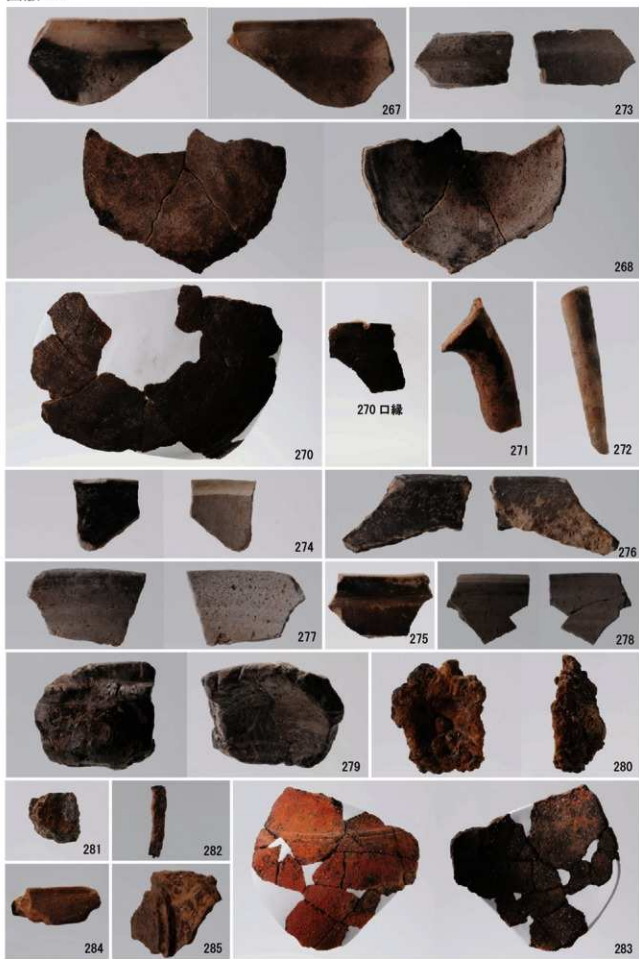








出土遺物 (11)





出土遺物 (13)



# 報告書抄録

ふりがな	のぶかわいせき
書名	信川遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第111集
編集著者名	井上広之 山田圭子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター 〒753-0073
所在地	山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦 2022年3月18日（令和4年3月18日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな所 在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
のぶかわいせき 信川遺跡	山口県 柳井市 新庄	35212		33° 96' 48"	132° 08' 10"	20201106 ＼ 20210303	850㎡	ほ場 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
信川遺跡	集落	弥生 中世	竪穴立物 2棟 掘立柱建物 10棟 柱穴列 3列 土坑 15基 溝 5条 祭祀跡 1基 柱穴 約1500個	弥生土器 土師器 瓦器 瓦質土器 輸入陶磁器 国産陶磁器 石製品 鉄製品 等	古墳時代初頭の竪穴建物を検出 平安時代後半から鎌倉時代前半を中心とする大型の掘立柱建物を検出
要約					<p>弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての集落、および中世の大型建物群を中心とした遺跡である。</p> <p>弥生時代中期の土坑からは、弥生土器の壺・甕・鉢など良好な一括資料を検出した。</p> <p>古墳時代初頭の竪穴建物からは、土師器の壺・甕・高杯などが出土した。</p> <p>弥生時代および古墳時代の出土遺物の中には瀬戸内湾岸地域特有の特徴を示すものもあった。</p> <p>中世においては平安時代後半から鎌倉時代前半にかけて大型建物が造営され、その傾向は室町時代中期頃まで継続する。また、建物に伴う柱穴列、土坑等を検出した。</p> <p>掘立柱建物を構成する柱穴からは土師器の皿・杯・碗、瓦器、中国陶磁器が多数出土しており、文献資料を補う良好な一括資料を得た。</p>

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第111集

## 信川遺跡

2022年3月18日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号  
印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
〒752-0921 山口県下関市長府扇町9番50号



